

# K-face

# 15年のあゆみ

～かながわ学術研究交流財団の軌跡～

1992 ~ 2007







# K-face 15年のあゆみ

## 目次

まえがき	3
<b>1. 随想</b>	
神奈川に根差し国際社会に貢献する（小山八郎）	7
湘南のあけぼの（鈴木治雄）	8
湘南国際村の構想が生まれるまで（都留重人）	9
郵便物が“湘南国際村 JAPAN”だけで海外から届くようにしたい（宇野喜三郎）	10
<b>2. 湘南国際村がめざすもの</b>	
「湘南国際村」開村	15
地域からの国際貢献	15
「民際外交」の新しい舞台として	17
「頭脳センター構想」のキー・プロジェクト	18
湘南国際村土地利用計画図	19
<b>3. K-FACE について</b>	
設立趣意書	23
財団概要	24
出捐者	25
歴代役員	26
在籍した職員	27

## 4. K-FACE の歴史

準備段階 .....	31
1992(平成4)年 .....	31
1993(平成5)年 .....	33
1994(平成6)年 .....	35
1995(平成7)年 .....	38
1996(平成8)年 .....	41
1997(平成9)年 .....	44
1998(平成10)年 .....	47
1999(平成11)年 .....	52
2000(平成12)年 .....	57
2001(平成13)年 .....	61
2002(平成14)年 .....	67
2003(平成15)年 .....	71
2004(平成16)年 .....	75
2005(平成17)年 .....	82
2006(平成18)年 .....	87
2007(平成19)年 .....	100

## 5. 湘南国際村に入村する諸機関

財団法人かながわ国際交流財団湘南国際村学術研究センター(旧 K-FACE) .....	103
国立大学法人総合研究大学院大学 .....	105
財団法人地球環境戦略研究機関 .....	106
株式会社 湘南国際村協会 .....	107



## まえがき

財団法人かながわ学術研究交流財団（Kanagawa Foundation for Academic and Cultural Exchange 略称：K-FACE）は、1992(平成4年)10月に、長洲一二・神奈川県知事（当時）が設立代表者となって、神奈川県の学術、文化、芸術等を中心とした異文化交流の推進こそが地域社会の発展に寄与するとともに国際社会に貢献し、ひいては世界平和を築くという認識の実現の場として計画された。そして、三浦半島中央部に位置し横須賀市及び葉山町にまたがる優れた景観の地に、“歴史と文化の香り高い21世紀の緑陰滞在型の国際交流拠点”を目指して建設された「湘南国際村」を活動拠点として、人文・社会科学分野を中心とする大学院レベルの研究事業を推進するとともに、その研究成果や研究・研修機関等の集積を活用した県民、外国人等を対象とする人材育成・交流事業を展開するための事業推進主体として設立された。

K-FACE は設立以来15年間にわたり、多様な事業を展開してきたが、時代の要請に応えるべく2007年(平成19)年4月1日に、市民レベルの国際交流・協力活動を支援してきた財団法人神奈川県国際交流協会（Kanagawa International Association 略称：KIA）と統合し、財団法人かながわ国際交流財団（Kanagawa International Foundation 略称：KIF）となった。K-FACE の名前はなくなったが、その設立趣旨に沿った事業は統合財団の湘南国際村学術研究センターに引き継がれ、「湘南国際村学術研究交流基金」をもって運営される。

K-FACE の最後の理事長であり、かつ統合財団 KIF の初代理事長として、K-FACE の歴史を残して次の世代に引き継ぐことを使命と考えて本書を企画した。

2008(平成20)年9月

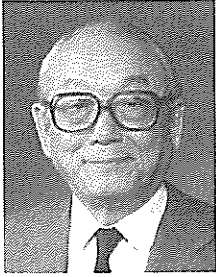
財団法人かながわ国際交流財団  
理事長 福原義春



# 1. 随 想







## 神奈川に根ざし国際社会に貢献する

初代理事長 小山八郎

1994(平成6)年5月20日  
湘南国際村オープニングイヤー実行委員会発行  
「地球社会への船出」より

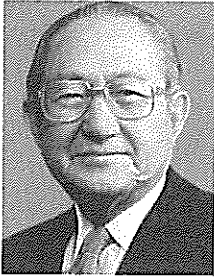
「国際化」という言葉がいわれるようになって久しい。この言葉が使われるようになったこと自体いかにも日本的であるが、経済の発展とともにわが国の国際化が目覚ましく進展したことは事実だ。しかし、世界をリードする経済大国になったからといっても、それだけで日本人が「国際人」になったわけではない。

日本人は顔がよく見えない、と私たちは外国の人からいわれてきた。日本の製品は世界にあふれても、そこに生きる人間の顔は見えてこないというのだ。生活や文化レベルでの人的交流が、経済的な結びつきに比べて余りにも少なすぎたということだろう。その意味で、学術研究や芸術文化など幅広い分野で多面的な交流をすすめる、相互理解を深めていく必要性はますます高まってきたといえる。内外で論議されている日本の国際貢献も、そうした基盤があってはじめて生きてくるに違いない。

湘南国際村は国際的な視野に立った学術研究、人材育成、技術交流、文化交流をとおして、国際社会への貢献、地域社会の発展に寄与する、いわば多面的な国際交流拠点である。相模湾を眼下に、湘南海岸や富士山、房総や伊豆半島を一望する三浦半島の丘陵地。その景勝の地に姿をあらわした湘南国際村センターは、村のシンボルであると同時に世界に開かれた神奈川の窓だ。

この村センターのソフト事業部門を担い、湘南国際村を舞台に人文・社会科学系の学術研究、人材育成、交流事業の国際的な活動を実施していく機関として、「かながわ学術研究交流財団」は設立された。「国際文化県かながわ」の国際村にふさわしい各種の事業、それは同時に21世紀の日本をつくっていく大事な仕事でもあると、私は確信している。質の高い学術研究活動、世界に通用する人材の育成、マルチラテラルな国際交流、これらの事業の一つひとつが神奈川という地域に根ざし、日本社会と国際社会に貢献していく。そうした仕事を着実に築きあげ、21世紀につないでいきたいと考えている。

すでに財団設立から1年半がたち、幸いにも多くの事業が軌道に乗ってきた。さらに国際的な研究・研修機関や活動団体との協力関係も着々とすすみ、K-FACE ネットワークは国の内外に広がりつつある。財団のさまざまな事業をとおして、表情豊かな日本人の顔を世界の人々にお見せできれば幸いである。



## 湘南のあけぼの

第二代理事長 鈴木治雄

1994(平成6)年5月20日

湘南国際村オープニング・イヤー実行委員会発行  
「地球社会への船出」より

私は大正2年(1913年)3月31日、神奈川県三浦郡葉山町(当時は同郡葉山村堀内)で生まれた。

葉山の気候は東京と比べれば冬暖かく夏涼しく、古くから避暑避寒地、また保養地として知られ、御用邸所在地であるのは、そのためである。昭和天皇は特にこの地を愛され、しばしば行幸されたのは周知のことである。

私は生まれてから五歳までしか住んでいなかったが、その後も夏休みや冬休みには、葉山の生家にしばしば出掛けた。当時は逗子から葉山に至る海沿いの道を、乗合馬車がラッパを鳴らしながら走っていた。これが自動車のない、そのころの唯一の交通機関だった。

夏には近くの鏡掬海岸で毎日のように泳いだし、磯では海草が波にゆらめく中を小魚の群れが泳いでいた。生家の中の池の周囲には蛇が住んでいたし、夕方になると大小のカニが無数にはい出してきた。夏の終わりにはツクツクボウシが寂しく鳴き、アカトンボが群れをなして乱舞した。これらの郷土の風物詩に触れることが出来た私の少年期は幸せこの上もなかった。

この懐かしい愛着の深い湘南の地にこのたび科学、学術、文化、さては経済、時流の国際的交流の拠点である湘南国際村センターの舎館が完成し、いよいよ活動を開始することになったのは私にとっていうにいわれぬ嬉しいことである。

湘南国際村は東京からの交通の便がすこぶるよいのに加え、自然環境が抜群であることは誇ってよい。

湘南の地が如何に風光明媚であるかと思事に見事に描写したのは徳富蘆花であり、「自然と人生」は不朽の名著であり、私の愛読書の一つであるが、殊に「自然に対する五分間」の中の、「此頃の富士の曙」は名文であり傑作だと思う。いま、断片的ではあるが、その中の文章を若干引用したい。

「心あらん人に見せたきは此頃の富士の曙」から始まり、「富士は今睡より醒めんとすなり。」「今醒めぬ。見よ、嶺の東の一角、薔薇色になりしを。」「富士は薄紅に醒めぬ……見よ、闇を追ひ行く曙の足の迅さを。」「紅なる曙の足、伊豆山脈の南端天城山を超ゆる時は、請う眼を回して富士の下を望め。」「海既に醒めたるなり。」最後に再び、「ああ、心あらん人に見せたきは此頃の富士の曙。」興は絶頂に達する。

湘南国際村も曙を迎えた。やがて太陽は空に輝く。私の嬉しさはこの上もない。皆様の御想像に任せるのみである。



## 湘南国際村の構想が生まれるまで

株式会社湘南国際村協会取締役会長 都留重人

1994(平成6)年5月20日

湘南国際村オープニング・イヤー実行委員会発行  
「地球社会への船出」より

ひとつの大きな構想が誕生するまでには、ひらめきをもってそれを考えた最初の人があり、続いてその基本的な骨格を練り上げる作業の中心になったグループがあり、そして次いでは、具体的な肉付けをした構想全体の作成に参画した人たちがいる、というのが普通である。

湘南国際村の場合、上記第一段階の人物が正確に誰だったかは、私は知らない。しかし次の第二段階で、余暇開発センターに「プロジェクト21」という委員会が設けられて、「湘南・国際経済文化交流センター」と題した一つのたたき台的構想をまとめあげる過程では、私もそれに参画した。これには、余暇開発センターの理事長だった佐橋滋氏が指導的な役割を果たしたことは紛れもない事実で、同氏が湘南国際村の船出を待たずに先年長逝されたことは残念でならない。

佐橋氏は、旧制の第八高等学校で私の一つ後輩の学級にいた。私と同じ文科乙類だったが、私が2年生のとき学生運動で検挙され学校を除名処分になったため、当時はお互いに知りあう機会もなかったと思う。しかし、戦後、氏が通産省を退官後、余暇開発センター入りをしたころから、同窓の縁もあって往き来する機会も生じ、二人で、協力し1978(昭和53)年には「新しい社会に向けて一経済価値と文化価値の調和を探る」というテーマのもとに「筑波会議」というのを開催した。そして1981(昭和56)年11月には、第二回の「筑波会議」を「人類の相互理解に向けて一情報革命と文化創造の可能性を探る」と題して開催したのだった。この2回の「筑波会議」に深い係りをもった二人の若い社会学者—齊藤精一郎と松田義幸の両氏—が、その後余暇開発センターの研究主幹となられて、さきに言及した「プロジェクト21」委員会のまとめ役をされたのであり、湘南国際村構想作成の第三段階でも、両氏の貢献に負うところが大きい。

私自身の個人的な体験からは、コモ湖畔ビュラジオにあるロックフェラー出資の学术交流センターなどが念頭にあったが、わが国際村のほうは、もっと幅広く学術文化の交流の役をになうことになるであろうし、更には私も主張したことだが、リカレント教育のためのファシリティーを提供する場所ともなる。国際文化県をめざす神奈川県にふさわしい施設がここに誕生したことを心から喜ぶたい。

# 郵便物が“湘南国際村 JAPAN”だけで海外から届くようなものにしたい

初代専務理事 学校法人鎌倉女学院理事長 宇野喜三郎

2008(平成20)年7月

新しく葉山と横須賀にまたがって作られる国際施設の業務を手伝うよう指示がありましたのは1994(平成6)年春のことです。

当時の長洲一二知事の言葉をお借りするなら「世界に通用する国際宿泊施設とし、そこで日本一上質の研修・研究・交流事業をおこないたい」という強い念願のもと、国際交流施設作りが進められていて、そのソフト部門に一役買うようにということでした。「外国からの郵便物が、“SHONAN KOKUSAIMURA, JAPAN”だけで葉山に届くようなものにしたい」という夢も直接聞かされていました。

当時、(株)三井建設が所有していた葉山国際ゴルフ場が開場したものの、地盤が弱いため閉鎖せざるを得ない状況のなかで、その跡地の有効活用について三井建設から神奈川県に持ち込まれたのがこの計画の発端で、公益的な利用が計られるならばとプラン作りに入っていたものです。長洲知事・久保孝雄副知事に、当時の知事の顧問的存在だった都留重人氏や佐橋滋氏、鈴木治雄氏などによるアイデアの結晶が国際的な施設造りと財団づくりでした。おそらくダボスに匹敵する世界的な情報発信基地をお考えになっていたのではないのでしょうか。

その大きな夢の具現化にあたったのが、県庁内に新たに設置された大プロジェクト、“湘南国際村計画”のための建設・運営準備組織に配属された加瀬昇、尾高暉重、友井国勝(前湘南国際村協会会長)、山崎純二(前かながわ学術研究交流財団常務理事)などの錚々たるメンバーで、その方々を指揮されていたのが当時の県総務部長・山下長兵衛氏でした。優れた構想力と太いパイプ作りの才能を活かして、びっくりするほど強力な外部の協力者を得、資金作りをされました。かながわ学術研究交流財団の豊富な基本財産と有為な人材を用意されたのもこの方々で、この財力と人材無しにはその後の多彩な財団活動はありえなかったでしょうし、あの立派な施設は実現されなかったでしょう。

## なぜ「村」と呼ぶのか

湘南国際村と聞くと、こんな町中でなぜ「村」なのですか、と多くの方が尋ねられました。周囲は緑いっぱい自然環境に恵まれつつも、この贅を尽くした施設に「村」という表現に首をかしげられていました。久保副知事がこの国際的な施設の構想作りにカナダやアメリカの関連施設を研究されたときに、カナダでふと立ち寄ったところに「村」と表現されている施設があり、ローカル色を生かした先進的な雰囲気これだと直感したと聞いたことがあります。この「村」の発想こそが、施設のあり方と財団事業展開の基礎となり、世界に発信する機能を持ちつつも、ローカルな雰囲気を忘れない、「地域に根ざし、世界に開く」という財団の基本姿勢になっていくのです。

地元の横須賀市や葉山町からは資金援助とともに人材派遣を受けるなど、きわめて積極的な協同的支援を受けました。また、単に行政・議会からの応援だけでなく、地元の人々の暖かい理解と応援あってこそ、「地域に根ざした」というコンセプトが生きたのです。



こうした視点の実現には、テレビ神奈川社長から初代の国際村協会の社長となられた吉田次郎氏（国際村在住）の貢献が大きく、家主として財団にいつも暖かい目配りをいただき、今でもお会いすれば“先輩、先輩”と謝意を表しています。

湘南国際村のモデルになったアメリカのアспен研究所やカナダのバンフセンターのような高度なリーダー研修施設は、ともに「自然いっぱいの村」というべき施設で、常に世界中の人を迎えて、多彩な事業を展開しています。地域の人々の誇りとなる施設であり、地域おこしに大きな役割を果たしてきました。事業展開の中で財団もアспенやバンフから幹部を迎え、直接に財団事業に指導を受けるとともに、アспенセミナーやバンフセミナーを導入してかながわセミナーを模索しました。その結果複数のかながわ的セミナーが生まれ識者の注目を集めました。外部からこの姿勢を支持して地域と世界を繋ぐため適切な助言を与えたのは一橋大学名誉教授の細谷千尋氏、アспенやバンフと繋いでくださったのが、当時国際文化会館の常務理事の加藤幹雄氏、さらにいま国際評論家としてTVで活躍されている浅井信雄氏や国際政治経済評論家の田中直毅氏、法政大学教授の鈴木佑司氏、実践女子大学教授の松田義幸氏など、世界的視野を持った方々の支援と助言あっての成果となりました。いくら感謝申し上げても足りないくらいです。

## K-FACE と呼んだわけ

財団発足にあたり、県関係からは熱血漢・沓掛匡衛氏など、きわめて優秀なスタッフが送り込まれ、地元行政からは横須賀市、葉山町の職員が、民間企業からはさくら銀行、日本IBM、富士コカ・コーラボトリング、日本電信電話、日本郵船（名称は当時）などが協力企業として職員派遣に応じ、才能あるプロパー職員を加えて極めて強固なスタッフ陣となりました。知事の熱い依頼を受けて初代の財団理事長として就任されたのが小山八郎氏（当時、日経連副会長）で、外資企業の社長を務めるなど豊富な外国体験をされ、多忙な中いつも職員の中に入り込んで適切な指示を与えておられました。また、常務理事として住友商事を退職された南村明徳氏が着任され、巧みな語学力で職員をリードされておられました。こうした布陣がK-FACEの基礎を築き上げていったのですが、特記すべき思い出の一つに、K-FACEなる名称があります。かながわ学術研究交流財団という名称で発足したものの、あまりにも長く略称を求められていました。この時、芝山一彦氏、竹村昭氏が熟考して編み出したのが“Kanagawa Foundation for Academic and Cultural Exchange”。長洲知事はこの提案に顔を崩されて、「うまい」と言われ、K-FACEの名に恥じない「神奈川の顔」となるような財団にしてください、と付け加えられました。今は亡き長洲一二知事の記念碑とも言うべきこの施設・この財団、その理念と想いはいつまでも大切に守り育てあげていきたいものです。



## 2 . 湘南国際村がめざすもの





## ■「湘南国際村」開村

湘南国際村の基本構想が発表されたのは、1985（昭和60）年3月のことである。湘南国際村は、三浦半島のほぼ中央部の横須賀市と葉山町にまたがる丘陵地にある。このあたりは自然環境および歴史的文化遺産に恵まれており、しかも横浜・東京からも近いという地理的条件も兼ね備えている。ここに、総面積にして約188ha、国際色豊かな交流拠点を整備しようというものである。

湘南国際村事業は、三浦半島の中央部、横須賀と葉山にまたがる優れた景観の地に、“歴史と文化の香り高い21世紀の緑陰滞在型の国際交流拠点”を創出することにより、神奈川という一地域から世界への貢献を行い「国際文化県かながわ」の実現と三浦半島地域の発展をめざすプロジェクトである。国内外のさまざまな人々が、緑豊かな自然環境の中で滞在しながら、研究・研修、文化・交流活動、スポーツ・レクリエーションなど、ゆとりと広がりのある活動を展開できる拠点。村に集う人々が相互にふれあい、各々の活動効果を高めながら相互理解を深めていく交流の場。そして、人々の交流が国際理解と世界の平和につながっていく貢献の場—これが湘南国際村である。

“緑陰滞在型の国際交流拠点”—村を一言で表現すればこうなる。具体的な完成イメージとしては、首都圏第一級の景観と鎌倉文化などの歴史的伝統を背景とした、「全体が緑豊かな公園のような村」をイメージとしている。しかも、高等研究機関、リカレント教育（生涯学習）機関、科学技術研究機関などが集積した「知的創造が行われる村」であり、国内外の訪問者、居住者、地域住民がふれあう「国際色豊かなコミュニティ」でもある。

村では実際、どんな活動が行われるのだろうか。もう少し具体的に紹介していくとしよう。

まず、村にはさまざまな研究・研修機関が誘致され、そこをベースにいろいろなジャンルの研究者たちが、神奈川にふさわしいテーマや国際社会が求める平和・経済・健康・環境・科学技術などの諸問題について活発な研究活動を展開することになる（学術研究）。また社会、経済、科学技術の急激な変化に対応した社会人学習、高齢化時代を踏まえた生涯学習、発展途上国の人々向けの日本社会（文化）や科学技術などの研修が行われ、リカレント教育活動の拠点としての機能も発揮していく（人材育成）。技術交流への期待も強い。公的機関のほか、ベンチャー企業から大企業までの各種民間研究機関が集結し、異業種間交流事業や高等研究機関研究者との連携事業などが行われる（技術交流）。さらには、国際交流に理解のある人々の入村を求め、居住空間におけるホームステイ・ホームビジットなどを含む、国際的な各種文化交流活動も積極的に展開される（文化交流）。

以上4つの基本的機能、すなわち「学術研究」「人材育成」「技術交流」「文化交流」が、村の果たすべき基本的機能である。そして、これらを実現するための施設として、湘南国際村センターをはじめとした公共系研究・研修施設、民間系研究・研修施設、交流施設、ショッピングセンターなどの建設が計画されている。

## ■地域からの国際貢献

湘南国際村の大きな特色として、地域主導型のプロジェクトであることを挙げることができる。構想を具体化していく段階では、神奈川県庁内はもとより県議会、横須賀市、葉山町、地元議会、学識者、地元住民などから幅広く意見を求め、慎重に検討を重ねている。またその事業化に際しては、県の計画誘導による公・民共同プロジェクトというかたちをとった。したがって、国家レベルの関係機関の支援を受けてはいるものの、ナショナル・プロジェクトの研究都市構想である

「筑波研究学園都市」や「関西文化学術研究都市」などとは、その事業の経緯や進め方において明らかに異なっている。

長洲一二神奈川県知事は、庁内放送による月例談話（1993(平成5)年6月）で、湘南国際村計画の目的を次のように語っている。

「第一はいうまでもありませんが、神奈川らしい国際貢献の拠点づくりということです。東西冷戦は終結しましたが、地球上には相変わらず紛争が絶えません。環境や人権をはじめ、貧困、人口爆発、エネルギー問題など、人類が直面する問題の多くはますます深刻になってきています。世界的な不況のため、どの国も決してゆとりがあるわけではないのですが、経済や科学技術の分野でトップにある日本の役割は小さくないはずで、いわば世界の厚生省、環境庁、科学技術庁のような役割が求められているのです。

神奈川もこうした貢献の一翼を担いたいと考え、世界の人々と共に知恵をしぼり、地域から働きかける、そういう拠点づくりをめざしてきました。現に戦争の恐怖や飢餓にあえぎ、人間の尊厳を脅かされている人々を助けることは、もちろん必要です。ただ、そうした難問の解決には、種を蒔き、芽を出させ、大きく繁らせなければ緑が作りだせないのと同様に、息の長い知的な作業も不可欠です。湘南国際村をこうした営みを担える場に成長させたいと、心から念じています」。

知事の指摘にあるように、私たちはいま大きな歴史の峠に立っている。東西ドイツの歴史的な再統一、東欧諸国の変化、地球規模の環境問題の顕在化、新しい経済秩序の形成など、これまでの政治、社会、経済の枠組みやそれを支えていた価値観までもが大きく揺れ動いている。今後、世界の相互依存関係がさらに緊密化、複雑化することは確実であり、国家の範囲を越えたグローバルな視点に立った課題は山積している。まさにボーダーレスな“地球社会”の時代を迎えているのである。

地球社会とは、人々が、さまざまな問題を一国単位ではなく国境を越えた地球的な視野で考え、人種、民族、宗教、イデオロギーといった壁を乗り越えて、“地球市民”の自覚のもとに行動する社会とあってよいだろう。21世紀には地球社会が形成され、それは時が経つにつれて深化し成熟度を増していくはずだ。日本の国家レベルでの国際貢献が重要なものというまでもないが、それ以前に、地域からの国際貢献のあり方について、もっと真剣に議論しなければならない時期にきているのである。

神奈川はそういう世界的な流れを早くからキャッチし、1987(昭和62)年度にスタートした県政の指針となる総合計画「第二次新神奈川計画」の改定実施計画(1991~95)の中で、「生活の質の向上」「都市の質の向上」と並ぶ3大目標の1つとして、「世界の平和と発展への貢献」を掲げている。そのための有効な手段として、すなわち世界の平和と発展に地球から貢献するための拠点として構想・計画された“地域発の国際化推進事業”—それが湘南国際村プロジェクトなのである。

湘南国際村と県政との関わりでいうと、もうひとつ見落としてならないものに、三浦半島地域の発展をめざす地域振興プロジェクトという側面がある。

前出の第二次新神奈川計画の「地域計画」によると、計画地を含む三浦半島地域の青写真は、

1. 自然を中心に「海と丘陵の豊かな自然と文化遺産がいかされている歴史的文化的ゾーン」
2. まちづくりを中心に「自然と伝統と国際性をいかした活力と魅力ある文化都市圏」
3. 産業を中心に「調和と基調とした個性ある産業圏」

というように、三つに分けて描かれている。このなかで県は、湘南国際村構想を、地域の将来像の実現に大きな役割を果たす同地域の中心的なプロジェクトの1つに位置づけている。

国際社会に貢献するとともに地域社会の発展にも寄与する一湘南国際村が非常に多目的な構想といわれる所以のひとつはここにある。

## ■「民際外交」の新しい舞台として

「みなとみらい21」や「かながわサイエンスパーク」のような、いわゆる都市型・業務中心型の国際交流拠点も必要である。しかし21世紀には、それに加えて、滞在型・充電型のより洗練された国際的学術文化交流拠点が待望されている。今や世界の1割国家となった日本は、その経済力と技術力を活かし、学術研究や文化交流などを通じて豊かな人間生活の実現をめざす拠点をつくり、世界に貢献していくことが必要になってきている。できれば神奈川の地にそれを創設し、後世に残る文化遺産として伝えていきたい……。

湘南国際村計画はこのようなコンセプトを出発点とし、それを施策化したものである。

このコンセプトの萌芽は、1975(昭和50)年6月、長洲知事が就任後初めて行った所信表明の中に早くも見られる。知事は国際社会と神奈川との関係に触れ、次のように述べている。

「日本をめぐる国際環境が、南北問題や東西関係を軸に激動しつつある今日、そしてまた、環境、資源、人口問題などを契機に地球破局の危機さえ叫ばれ、かけがえのない地球上に人類共存のための新しい世界秩序の形成が真剣に模索されている今日、私は、この神奈川が近代100年の日本の歴史の中で果たしてきた国際友好と平和の玄関としての役割を、新しい歴史的次元の中で再び果たしていくために、県レベルで可能な“民際外交”に力を注ぐべきだと考えるものであります」

所信表明の中で使われた「民際外交」という概念は、その後今日に至るまで神奈川県国際政策の根幹を形成している。いうまでもなく湘南国際村は、この民際外交の基本理念のもとに構想された地域プロジェクトであり、民際外交というキーワード抜きに語ることはできない。そこで、国際ならぬ民際とはいったいどのような考え方の国際交流であるのか、概要は次のとおりである。

民際外交の基本理念は、「世界を構成している基本的な単位は“国家”ではなく“人間”であり、世界中の人々が人と人、地域と地域で結びつくことにより、共に同じ人間として平等に生きることができる国際社会をめざすことが、世界平和の原点になる」というものである。資源小国である日本が世界から必要とされるためには、国同士の交流だけではなく、国家の根底にある多様な生活様式と文化を相互に理解しあうことが重要である。そのためには人と人、地域と地域の交流、すなわち民際外交が不可欠となる。「国家同士 (Government to Government) ばかりでなく、市民と市民 (People to People)、地域と地域 (Local to Local) が平和な世界づくりのため、国境を越えて主体的に交流・協力していこう」という考え方である。

民際外交はすでに20年近い歴史をもつ。具体的には、1. 歴史的に密接な関係があり、あるいは自然や社会環境が似ている自治体との間の「友好交流」、2. 海外技術研修員の受入れや技術指導者の派遣といった「民際協力」、3. 外国籍県民を理解し、尊重しながら共に生きる地域づくりをする「内なる民際外交」、4. 「神奈川非核兵器県宣言」の議決に代表される「非核・平和活動」などの活動がある。

いうまでもなく、湘南国際村が民際外交の未来に果たす役割は限りなく大きいものがある。湘南国際村の開村は、将来、民際外交の歴史の一つのエポックとして語られていくことだろう。神奈川の民際外交にまたひとつ、新しい活躍のステージが用意されたのである。

## ■「頭脳センター構想」のキー・プロジェクト

石油危機を経て日本の産業構造転換がいよいよ本格化しつつあった頃、神奈川は自治体としてどのように産業構造の変容を受け入れ、県民の経済活動を支援していくかを模索していた。そんな中、1980年(昭和55)年10月、県のその後の産業・経済政策の進路を決定づける重要な指針が発表された。神奈川県産業政策協議会が行った「頭脳センター構想に関する提言」である。頭脳センター構想とは、科学技術と人材の蓄積が豊富で、多彩な知識・技術・施設などを集積した神奈川を、日本の、いや世界の“頭脳センター”として機能させていこうという構想である。

同提言の中で県は、地域と調和し創造性に満ちた産業社会を築くとともに、神奈川を世界的な技術開発の拠点にするための方策として5項目の提言を行っているが、その中には湘南国際村構想と見事にリンクする部分がある。

たとえば「優秀な人材を集めるための環境づくり」においては、「科学技術の面で将来にわたり先進性を維持し、技術開発のメッカと呼ばれるためには、恵まれた自然環境のもとで先導的で独創力豊かな人材が多数集結し、自由に能力を発揮できる活躍の場をつくるなど環境づくりが必要である」と提言している。そして、その具体策として、1. 研究機関の集積、2. 研究機関の連帯の強化、3. 高度な技術、技能の訓練の制度化、4. 産業と大学の有機的な連携を挙げている。

また「技術情報交流のシステム化」では、「先進的技術開発を推進するためには、水準の高い情報はもとより異質の分野の情報など多様な情報を活用することが必要であり、企業ニーズにあった情報を提供する組織と、研究者、技術者が生きた情報を交換できる自由な交流の場づくりを推進する必要がある」とし、1. 技術情報センターの設置、2. 技術情報フォーラムの形成を示唆している。

神奈川の活力は、分厚い人材の蓄積のうえに成り立っている。科学技術はもとより学術研究、芸術文化をはじめ、社会のあらゆる分野で知的活動が活発に行われており、それは産業分野にとどまらず生活や文化レベルに及んでいるのである。知的・人的資源の受信・発信の拠点ともいえる湘南国際村は、そうした活力にさらに磨きをかけていくうえで、まぎれもなく「頭脳センター構想」のキー・プロジェクトの1つに位置づけることができるだろう。

事実、これに関しては、先に紹介した1993(平成5)年6月の月例談話の中で、知事自ら湘南国際村と頭脳センター構想との関わりについて言及しているのです、その部分を抜粋してみたい。

「第3の側面は、頭脳センター構想のキー・プロジェクトでもあるということです。日本の産業をめぐる環境が著しく変化するなかで、神奈川の生き残る道は“頭脳”を資源とする産業にシフトしていくことだ。私はかねてからそうお話ししてきました。そういう信念のもとで頭脳センター構想を展開してきたわけですが、湘南国際村もゆくゆくは世界中の研究者、技術者、文化人、芸術家などが集い、世界に向けて情報発信する頭脳の拠点、いわば“センター・オブ・エクセレンス”の1つとして育ててほしいと願っております」

以上のように湘南国際村プロジェクトは、神奈川県国際政策や産業・経済政策などと密接に結びついている。神奈川県重要施策が幾重にも重なったところに生まれた多面的なプロジェクト—これが湘南国際村なのである。

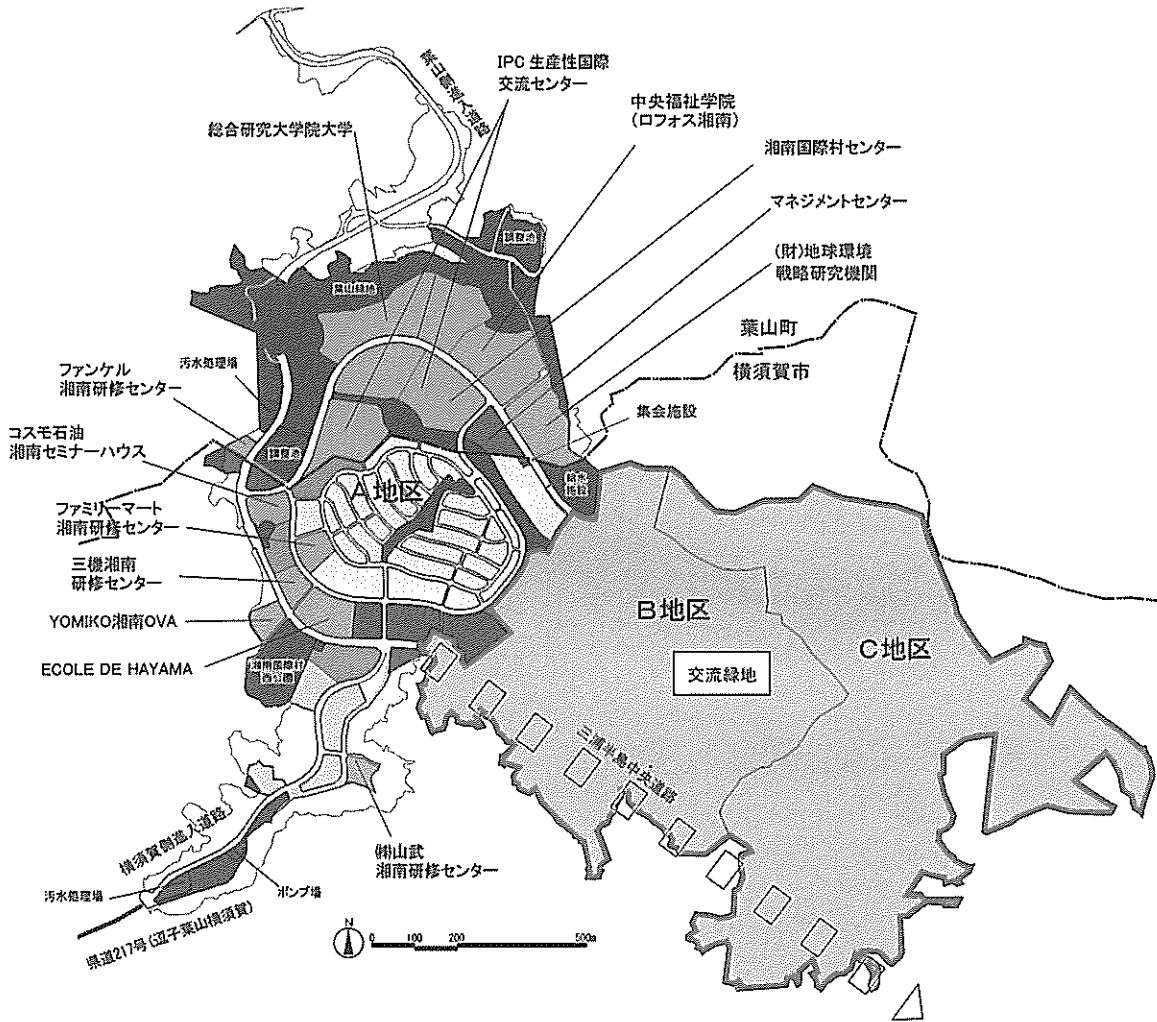
1994(平成6)年5月20日

湘南国際村オープニング・イヤー実行委員会発行  
「地球社会への船出」より



# 湘南国際村土地利用計画図

2006 (平成18)年改訂後



2006(平成18)年10月神奈川県発行  
「湘南国際村改訂基本計画」より

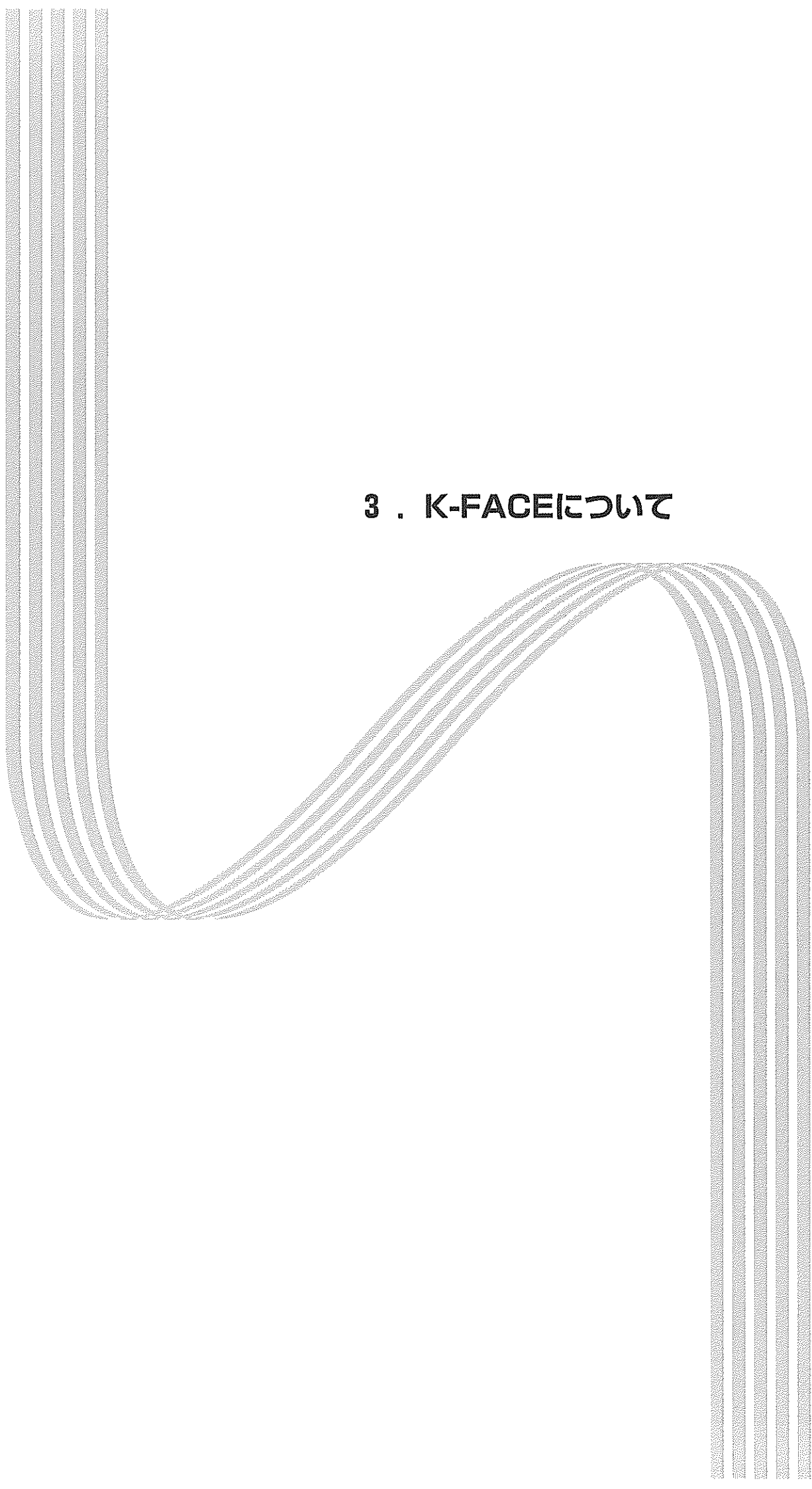
凡 例	
	研究・研修施設用地
	低層専用住宅用地
	低層住宅用地
	共同住宅用地
	居住施設用地
	商業・業務施設用地
	教育・健康・福祉施設用地
	公共公益施設用地
	計 画 区 域
	開 免 区 域

湘南国際村では、東京ディズニーランドの約4倍(188ha)という広大な敷地に、神奈川県が地域からの国際貢献を具体的に進めるプランとして策定した湘南国際村基本構想のもとに、自然にやさしく、災害に強いまちづくりが重点的に取り組まれている。

1994(平成6)年5月に、村の中核施設である湘南国際村センターのオープンとともに開村した。さらに、総合研究大学院大学、地球環境戦略研究機関、(財)かながわ国際交流財団の湘南国際村学術研究センター、(財)社会経済生産性本部の生産性国際交流センター、(社福)全国社会福祉協議会の中央福祉学院(ロフォス湘南)などの公的機関を始めとして、民間研修施設やサービス施設・居住施設などが整備されている。



### 3 . K-FACEについて





## 設立趣意書

今、世界が歴史の転換期ともいふべき激動の時代を迎えている中で、南北間の経済格差の拡大、新たな民族主義の台頭、地球環境問題の顕在化など、国境だけでなく、世代をも越えて考えるべき課題が山積みしています。

こうした課題の解決に向けて、地球的な視野で考え、それぞれの地域に根ざして行動する「地球市民」としての自覚を持つことが、今まさに私たちに求められています。そして、平和で豊かな地球社会を築くためには、地球からどう貢献したらよいかを真剣に模索しつつ、国境を越えた交流・連携・協力を求め、世界共通の課題に取り組んでいくことが必要であるといえます。

神奈川県では、学術、文化、芸術等を中心とした異文化交流の推進こそが地域社会の発展に寄与するとともに国際社会に貢献し、ひいては世界平和を築くという認識のもとに、県民・市町村・市民団体・企業の方々と協力・協同して積極的に事業を展開してきたところであります。

さらに、その実現の一つの場として、三浦半島中央部に位置する横須賀市及び葉山町にまたがる優れた景観の地に、“歴史と文化の香り高い21世紀の緑陰滞在型の国際交流拠点”を目指した「湘南国際村」において、学術研究・人材育成・技術交流・文化交流事業の展開を計画しているところであります。

そこで、今回、その湘南国際村を活動拠点として、地域から世界に貢献し、地域社会の発展に寄与するために、人文・社会科学分野を中心とする大学院レベルの研究事業を推進するとともに、その研究成果や研究・研修機関等の集積を活用した、県民、外国人等を対象とする人材育成・交流事業を展開する事業推進主体として、財団法人かながわ学術研究交流財団（Kanagawa Foundation for Academic and Cultural Exchange 略称：K-FACE）を設立するものであります。

1992(平成4年)10月

## 財団概要

### 1. 名称

財団法人かながわ学術研究交流財団

(Kanagawa Foundation for Academic and Cultural Exchange 略称 = K-FACE)

### 2. 設立目的

地域から世界に貢献し、地域社会の発展に寄与するため、人文・社会科学分野を中心とする大学院レベルの研究事業を推進するとともに、その研究成果や研究・研修機関等の集積を活用した、県民、外国人等を対象とする人材育成・交流事業を展開する。

### 3. 基本財産

51億6,300万円 (出損者数63)

(内訳) 神奈川県 35億円

横須賀市・葉山町 4,400万円

民間企業60社 16億1,900万円

### 4. 事業及び予算規模

(1) 事業 人文・社会科学分野を中心とする研究事業、人材育成事業、交流事業

(2) 予算規模 (当初予定)

○平成4年度 1億1,800万円

○平成5年度 3億2,500万円

### 5. 主務官庁

神奈川県

### 6. 所在地

○設立～平成6年3月 横浜市内

○平成6年4月～ 湘南国際村センター (三浦郡葉山町)

### 7. 設立

1992(平成4)年10月27日 (2007(平成19)年3月31日解散)

## 出捐者

(名称は当時)

公共出資 3 自治体合計 68.6%			
神奈川県		67.79%	
横須賀市		0.68%	
葉山町		0.17%	
民間出資60社合計 31.4%			
三井不動産(株)		19.37% 1社	
西武鉄道グループ		1.94% 1社	
(株)さくら銀行	(株)横浜銀行	0.58% 2社	
京浜急行電鉄(株)	東京海上火災保険(株)	東京電力(株)	0.39% 6社
(株)駿河銀行	東京ガス(株)	日本電信電話(株)	
(株)大林組	戸田建設(株)	(株)フジタ	0.19% 24社
鹿島建設(株)	日産火災海上保険(株)	三浦藤沢信用金庫	
麒麟ビール(株)	日新火災海上保険(株)	三井建設(株)	
佐藤工業(株)	日本アイ・ビー・エム(株)	三井不動産建設(株)	
清水建設(株)	日本鋼管(株)	矢崎総業(株)	
湘南信用金庫(株)	日本生命保険相互会社	横須賀産業(株)	
セコム(株)	(株)間組	(株)横浜そごう	
第一生命保険相互会社	富士コカ・コーラボトリング(株)	(株)横浜高島屋	
(株)オオバ	千代田火災海上保険(株)	(株)ハナサン	0.10% 14社
(株)国際コミュニケーションズ	(株)テレビ神奈川	三井海上火災保険(株)	
湘南菱油(株)	(株)東芝	安田火災海上保険(株)	
(株)住友銀行	日揮(株)	(株)和光商会	
第一法規出版(株)	(株)野村総合研究所		
(株)イトーキ	大東京火災海上保険(株)	富士通(株)	0.06% 8社
住友海上火災保険(株)	日本電気(株)	松下電器産業(株)	
西武建設(株)	富士ゼロックス(株)		
(株)神奈川新聞社			0.04% 1社
(株)ケイエスピー	(株)ケイネット	(株)湘南国際村協会	0.02% 3社

## 歴代役員

(名称・役職は当時、敬称略)

	理事長	専務理事	常務理事
1992(平成4)年度	10月14日 小山八郎就任 (スミスクライン・ピーチャム・ ジャパン会長・日経連副会長)	10月14日 宇野喜三郎就任 (元神奈川県人事委員会委員)	10月14日 南村明穂就任 (住友石油開発相談役)
1993(平成5)年度	↓	↓	↓
1994(平成6)年度	↓	↓	↓
1995(平成7)年度	4月3日 小山八郎退任 6月8日 鈴木治雄就任 (昭和電工名誉会長)	↓	7月1日 浮田雄二就任 (元文部省)
1996(平成8)年度	4月1日 長洲一二就任 (前神奈川県知事)	4月1日 小野仁一郎就任 (元神奈川県立歴史博物館館長)	9月30日 浮田雄二退任
1997(平成9)年度	↓	↓	—
1998(平成10)年度	↓	↓	—
1999(平成11)年度	5月4日 長洲一二退任 10月22日 福原義春就任 (資生堂会長)	↓	—
2000(平成12)年度	↓	↓	—
2001(平成13)年度	↓	6月18日 富岡隆夫就任 (元朝日新聞文化財団常務理事)	6月18日 池田稔就任 (元神奈川県企画部次長)
2002(平成14)年度	↓	↓	↓
2003(平成15)年度	↓	↓	—
2004(平成16)年度	↓	↓	—
2005(平成17)年度	↓	↓	—
2006(平成18)年度	↓	↓	4月1日 山崎純二就任 (元神奈川県企画部参事)
	3月31日 財団の解散にともない退任		
2007(平成19)年度	4月1日 福原義春理事長は 統合財団理事長就任	4月1日 富岡隆夫専務理事 は統合財団常務理事就任	4月1日 山崎純二常務理事 は精算法人精算人就任

(退任後直ちに後任者が就任した場合には、退任日付の記載を省略した。)



## 4 . K-FACEの歴史



## 設立準備段階

※名称・役職は当時、敬称略

### 1985（昭和60）年3月 湘南国際村国際村基本構想策定

神奈川県が、湘南国際村構想のおおもとの考え方となる「湘南国際村基本構想」を策定。

「湘南国際村は、国際的視野に立脚した学術研究、人材育成、技術交流、文化交流の推進という相互に関係の深い四つの基本目的を持ち、多様な交流を展開することにより、国際社会に貢献するとともに、地域社会の発展に寄与する多目的な滞在型の国際交流拠点とする」と定められた。

### 1988（昭和63）年5月 湘南国際村基本計画策定

県内の「湘南国際村基本計画」の中で、湘南国際村の中核施設において研究・研修事業を行う組織として、財団法人の設置が位置づけられた。

### 1989（平成元）年10月 （株）湘南国際村協会設立

湘南国際村及び湘南国際村センターの管理・運営を行う（株）湘南国際村協会が設立された。

### 1990（平成2）年10月～1991（平成3）年2月 湘南国際村フォーラム（全3回）

川崎市のかながわサイエンスパーク（KSP）で開催。

第1回国際交流拠点づくりプロジェクト

第2回地球化時代の人材育成

第3回地球化時代の異文化交流

### 1991（平成3）年10月 湘南国際村フォーラム'91

## 1992（平成4）年度

### 【概況】

財団発足初年度にあたることから、事業等を通じて財団の設立について広く周知・広報を行うとともに、各事業の本格実施に向けての事業枠組みの決定、関係機関とのネットワーク形成等、財団事業活動の円滑な推進を図るための条件整備を活動方針としてその実現に取り組んだ。また、当財団の設置目的達成のため、寄付行為に定める事業を一部実施した。

### 【研究】

研究事業の企画、調査研究及び審議を行う企画委員会を設置するとともに、湘南国際村に誘致する国際的研究・研修機関との協同研究及び研修の検討会を開催した。

## 【出来事】

### 1992（平成4）年 湘南国際村フォーラム'92

8月 大楠山ウォーク

10月 シンポジウム「地球社会における地域の役割」、基調講演は江崎玲於奈（筑波大学学長）。

#### 10月14日 設立発起人会

財団法人かながわ学術研究交流財団の設立発起人会を横浜のホテル・ニューグランドで開催。長洲一二知事（神奈川県）が挨拶。基本財産51億6300万円。設立代表者に長洲知事、初代理事長に小山八郎（日経連副会長）、専務理事に宇野喜三郎（県人事委員会委員）、常務理事に南村明（住友石油開発相談役）を選任。その他の理事と評議員を選任。

#### 10月27日 設立許可

民法第34条による公益法人（財団法人）として知事及び県教育委員会から設立許可。所在地は横浜市中区山下町54 神奈川県山下町分庁舎第3別館内。

### 1993（平成5）年

#### 1月30日 企画委員会の設置

理事長の諮問に応じて、当財団の行う事業のうち、特に研究事業に重点を置いて、企画、調査研究及び審議を行う「財団法人かながわ学術研究交流財団企画委員会」を設置した。委員長は細谷千博（国際大学教授）、副委員長には久保孝雄（ケイエスピー代表取締役社長、元神奈川県副知事）、委員に浅井信雄（神戸市外国語大学教授）、岡本行夫（国際コンサルタント）、加藤幹雄（国際文化会館常務理事）、斎藤精一郎（立教大学教授）、鈴木佑司（法政大学教授）、高橋彰（アジア経済研究所理事）、田中直毅（国際政治経済評論家）、福士昌寿（関東学院大学教授）、松田義幸（余暇開発センター研究主幹）、キャロライン・マタノ・ヤン（日米教育委員会事務局長）。

#### 2月2日 湘南クリエイティブ・フォーラム

横浜シンポジアにおいて、財団が主催。テーマは「世界新秩序の中での日本の選択」。

#### 2月5日、3月12日 国際的研究機関誘致検討会

湘南国際村に立地する公的な国際研究・研修機関等との協同事業の検討会を開催。

#### 2月～3月 研修プログラム検討会

人材育成に係る研修プログラム作成のため、国連大学等の公的研修機関、富士ゼロックス総合教育研究所等の民間研修機関との検討会を7回開催。

#### 3月18日 国際交流推進者セミナー

ホテルリッチ横浜で財団が主催。市町村国際交流担当者向け。

#### 3月22日 三文化広場

湘南クリエイティブ・フォーラムが国際文化会館で開催したものを支援。米、独、加の研修生等及び有識者等向け。

## 1993(平成5)年度

### 【概況】

財団発足2年度目であり、湘南国際村への移転及び財団事業の本格的な実施を翌年度に控えた節目の年度にあたることから、事業の基本計画及び実施計画の策定、国内外の関係機関とのネットワーク形成、湘南国際村センターの賃貸予定スペースの備品整備等、財団の事業活動の円滑な推進を図るための条件整備に努めた。併せて、湘南国際村開村への意識醸成、事業ノウハウの蓄積、事業ニーズの把握、財団事業の広報啓発等を重点目標とした。

### 【研究】

研究テーマ「地球化時代における地域の役割について」に関し12名の企画委員全員が4つの部会に属し、研究会を実施した。研究期間は1年間。

	テーマ	部会主査
第一部会	地球化時代とは何か－国民国家の変容	田中直毅（国際政治経済評論家）
第二部会	ボーダレス時代の国家と地域	細谷千博（国際大学教授）
第三部会	地方政府と民際外交	鈴木佑司（法政大学教授）
第四部会	地球化時代の地域・市民運動	松田義幸（筑波大学客員教授）

### 【出来事】

#### 6月30日 誘致機関等共同研究会

湘南国際村に立地する公的な国際研究・研修機関等との協同研究と研修の検討会を開催。

#### 8月 研修プログラム検討会

人材育成に係る研修プログラム作成のため、国連大学等の公的研修機関、富士ゼロックス総合教育研究所等の民間研修機関との検討会を17回開催。神奈川にゆかりのある人物を題材に財団独自の研修プログラムを開発。

#### 10月12日 湘南国際村フォーラム'93

パシフィコ横浜で「NAFTAに見る地域統合の試み」について。特別講演はセルヒオ・ゴンザレス・ガルベス（駐日メキシコ大使）、基調講演は島山襄（国際経済交流財団顧問）、コーディネータは古河栄一（日本国際戦略センター代表）、パネリストに雨宮昭一（日産自動車常務）、市川博也（経団連経済協力部長）、トーマス・リード（米ワシントンポスト紙極東総局長）。

#### 10月13～17日 第1回 日米独研究交流会議

日米独研究交流会議の初回「地域化が我々にとって意味するもの」のため、若手識者をドイツ・シュトゥットガルト市へ派遣。

#### 10月13～24日 「湘南国際村海外プロジェクト・ネットワーク・ミッション」派遣

韓国人間開発研究院、シンガポール東南アジア研究所、マレーシア戦略国際問題研究所などと意見交換のためミッションを派遣。

#### 10月15日 国際化研修

横浜港湾労働者会館にて開催。講師はピーター・フランクル（数学者）他。

#### 11月30日 研究交流会湘南国際村現地打合せ

県内大学を中心に、研究分野を超えた人的ネットワークづくりを目指して開催。

## 12月4日 K-FACE セミナー '93

(株)湘南国際村協会と共催にて、横浜シンポジアで。テーマは「自然と共生する湘南国際村の創造に向けて」、講師は宮脇昭（国際生態学センター常務理事）、尾高暉重（神奈川県企画部湘南国際村推進室長）他。

## 1994（平成6）年

### 2月19日 文化理解講座

神奈川県と共催で、県政総合センターにて。テーマは「中国と日本の技術交流史」、講師は里深文彦（相模女子大教授）。

### 2月26日 日中比較文化講座

日中友好会館と共催で、日中友好会館にて開催。テーマは「企業の国際化と中国人雇用について」、講師は馬成三（中国経済情報センター顧問）。

### 3月5日 湘南国際村シンポジウム

「世界はどこへ向かうか」を横須賀市と共催にて、よこすか芸術劇場で開催。基調講演は小和田恒（国連大使）、パネルディスカッションは細谷千博（国際大学教授）のコーディネーションの下、浅井信雄（神戸市外国語大学教授）、アレキサンダー・アルマゾフ（東京アメリカンセンター館長）、岡本行夫（国際コンサルタント）、畑恵（ニュースキャスター）。

### 3月30日 国際的研究機関誘致検討会

ホテルリッチ横浜にて開催。総合研究大学院大学、日本生産性本部他が参加。

### 3月31日 かながわ学術情報誌「K-FACE」プレ創刊号発刊

## 1994（平成6）年度

### 【概況】

湘南国際村のオープンに合わせて湘南国際村センターへ移転し、財団発足以来1年半にわたって開発・蓄積した研究成果、事業ノウハウ、関係機関とのネットワークを活用して、研究事業、人材開発事業、交流事業を本格的に実施するとともに、センター内の研究施設及び研修・会議施設の運営にあたった。

新たに公募研究をスタートさせるとともに、学術情報誌 K-FACE 創刊号を発行した。交流事業については、概ね計画通りに実施できた。人材育成事業では、米国大使館アメリカンセンターと共催にて、「湘南国際村リブイン・セミナー」を開始した。また、国連大学グローバル・セミナー“湘南セッション”の10回目となるこの年から当財団が主催者に加わり、会場を湘南国際村センターに移して実施することになった。

施設運営としては、センター内の研究施設のうち、機関誘致スペースに財団事業とつながりの深い3機関が入居するとともに、各公募研究グループに研究室を貸与した。財政面では、基本財産運用収入が当初予算を上回ったが、事業収入は予算を下回った。国際交流基金からの助成金や委託料等、当初予算にない収入を確保できた。

### 【研究】

#### （公募研究）

研究課題を定めて研究テーマと研究者を公募した。研究期間は1年間。

テーマ	研究代表者
民際外交	高瀬幹雄（関東学院大学助教授）
予防外交における市民・自治体間国際ネットワークの構築	首藤信彦（東海大学教授）
現代進化思想の受容に関する日米の比較研究	佐倉 統（横浜国立大学助教授）

#### （特別課題調査研究）

研究テーマ「東アジア地域ネットワーク」。研究体制、田中直毅他。研究期間は5ヶ月。

### 【出来事】

4月19日 湘南国際村センターへ移転

5月15～18日 第2回 日米独研究交流会議

日米独研究交流会議の「経済問題、社会・教育問題、環境問題」のため、若手識者を米メリーランド州ボルチモア市へ派遣。

5月30日 湘南国際村センターオープン

構想から10年目にして「湘南国際村」開村。「湘南国際村センター」オープン。

6月10～11日 21世紀かながわ会議

湘南国際村オープニング・イヤー実行委員会と共催。国際会議場にて開催。10日は「20世紀総括・21世紀展望会議」と題し、バリー・ブザン（英国ウォリック大学教授）が基調講演「20世紀の意味と21世紀の展望」、都留重人（一橋大学名誉教授）をモデレータに、バリー・ブザン、鈴木佑司（法政大学教授）、田中直毅（国際政治経済評論家）、山本満（青山学院大学教授）をパネリストに討論。11日は「人類未来会議」としてワン・ガンウー（香港大学学長）の基調講演「東西文明の出会い：対立と融合についての考察」と、細谷千博（国際大学教授）をモデレー

タとしたワン、五百旗頭真（神戸大学教授）、山内昌之（東京大学教授）、山崎正和（大阪大学教授）による討論。

#### 7月5～6日第 第1回 湘南国際村リブイン・セミナー

米国大使館東京アメリカンセンター、湘南国際村オープニング・イヤー実行委員会と共催。テーマは「環境と経済成長」。座長は川口順子（元通産省地球環境担当審議官、サントリー常務取締役）。

#### 7月20～21日 K-FACE セミナー

湘南国際村オープニング・イヤー実行委員会と共催。講演「今、日本人に求められること」加藤幹雄（国際文化会館常務理事）、「異文化間の国際理解」蜷川真夫（アエラ編集長）。

#### 7月25日 神奈川県内大学交流会

人文・社会科学系の学部を有する県内大学とのネットワークを充実強化するため、学部長、事務局長との会議を開催。参加8大学。

#### 9月5～9日 第10回 国連大学グローバル・セミナー

“湘南セッション”の10回目となるこの年から当財団が主催者に加わり、会場を湘南国際村センターに移した。

湘南国際村オープニング・イヤー実行委員会も共催。テーマは「国連：21世紀へ向けて」。ミヤン・カドルディン（国連広報局広報渉外部長）らによる講演。

#### 10・11月の5日間 葉山国際セミナー

主催者の葉山町に講師派遣、会場提供の協力。

#### 10月18日 湘南国際村フォーラム'94

基調講演を神谷健一（さくら総合研究所最高顧問）「21世紀のアジアと日本の役割」とスティーブン・リオン（マレーシア戦略国際問題研究所日本研究センター所長）「ASEANと地域主義」。高橋彰（アジア経済研究所理事）をモデレータに、リオン、清水嘉治（神奈川大学経済学部長）、田村正勝（早稲田大学教授）による討論「アジア・太平洋地域における経済のダイナミズムについて」。

#### 11月1～4日 第3回 日米独研究交流会議

湘南国際村オープニング・イヤー実行委員会と共催。初回をドイツ、第2回を米国で開催し、第3回目となる今回を湘南国際村で開催。テーマは「経済と環境問題、文明と人権問題」。神奈川グループのメンバーは田中直毅（国際政治経済評論家）、國沢好衛（東芝コンセプトエンジニアリング課長）、立木智子（横浜市立大学助教授）、佐藤博樹（法政大学教授）、佐野敦彦（佐野環境都市計画研究所所長）、岡部直明（日本経済新聞社論説委員）。

#### 11月19日 学術研究フォーラム・イン・湘南国際村

湘南国際村オープニング・イヤー実行委員会と共催。平成5年度研究の主テーマ「地球化時代における地域の役割」の研究発表と討論。研究発表、講演などは細谷千博（国際大学教授）、田中直毅（国際政治経済評論家）、赤根谷達雄（筑波大学講師）、古城佳子（國學院大学助教授）、大芝亮（一橋大学教授）、長尾悟（東洋学園大学助教授）、加藤幹雄（国際文化会館常務理事）、松本正生（埼玉大学助教授）、松田義幸（筑波大学客員教授）。特別講演「地球化時代における地域の役割」はカレヴィ・J・ホルステイ（カナダ・ブリティッシュコロンビア州立大学教授）。この成果はK-FACE研究叢書第1号（96年3月25日発行）として出版された。

#### 11月24～26日 かながわ・エグゼクティブ・セミナー

湘南国際村オープニング・イヤー実行委員会と共催。「企業家と社会貢献－なぜ、いま原三



溪か」をテーマに、初日は三溪園の見学と田中英道（東北大学教授）の特別講演「経営と文化を考える」。二日目は湘南国際村センターで討論。

## 1995（平成7）年

### 1月27～29日 かながわ・アスペン・セミナー

アスペン研究所が開発したエグゼクティブ・セミナーをモデルに、アスペン研究所と湘南国際村オープニング・イヤー実行委員会と共催、国際文化会館の協力にて開催。テーマは「変化の時代のリーダーシップ」。モデレータはS.フレデリック・スター（アスペン研究所理事長）と加藤幹雄（国際文化会館常務理事）。

### 3月4日 日中比較文化講座

日中友好会館と共催。「中国国内法体系の実情と課題」の講師は大田茂（高知地方検察庁次席検事）、「中国人の法意識と契約意識」の講師は王晨（大阪市立大学助教授）。

### 3月1日 かながわ学術情報誌「K-FACE」創刊号発行

### 3月13日 日経フォーラム in 湘南国際村

シンポジウム「大競争時代と産業空洞化の行方」を日本経済新聞社と共催。基調講演を伊藤元重（東京大学教授）、パネルディスカッションのコーディネータを森一夫（日本経済新聞社編集委員）。

### 3月29日 神奈川県内大学交流会

参加9大学。

## 1995（平成7）年度

### 【概況】

湘南国際村センター移転後2年目として、前年度に実施した財団の骨格となる事業を充実発展させるとともに、財団の国内外のネットワークを更に拡大し、新たなネットワークの活用による新規事業を展開する等、湘南国際村の中核組織としての財団事業の充実・拡大に努めた。

緑陰滞在型の環境を活用し、「かながわ・エグゼクティブ・セミナー」、「かながわ・バンフ・セミナー」、を開催した他、「21世紀かながわ円卓会議」等、各種国際シンポジウムを開催した。

財団の運営面では、事務局体制の整備のため常勤職員2名を採用するも、企業よりの派遣者2名の減により、職員数は不変。財政面では、超低金利が続くため、基本財産運用収入が当初予算を大幅に下回る下で、中長期の国債・県債を活用する等の増収に努めた結果、最終予算よりやや多い運用収入を確保できた。

### 【研究】

（公募研究）

研究課題を定めて研究テーマと研究者を公募した。研究期間は9ヶ月。

テーマ	研究代表者
アジア域内貿易と情報ネットワーク	古田和子(東洋英和女学院大学助教授)
Great Books Eastern World Projectの基礎研究	宮脇正孝(専修大学助教授)
横浜の内なる社会的文化的“島”に関する実証社会学的な研究	新原道信(横浜市立大学助教授) -
「民際外交」の研究	臼井久和(フェリス女子学院大学教授)

（特別課題調査研究）

研究テーマ「歴史認識の比較研究－日本の歴史図書にみる日本人のアジア観」。研究体制、菊池努（南山大学助教授）。研究期間は9ヶ月。

### 【出来事】

5月3～6日 第4回 日米独研究交流会議

「政治・政府」、「環境問題」のため、若手識者をドイツ・バーデンビュルテンベルグ州ウールディンゲンへ派遣。

6月8日 第二代理事長に鈴木治雄（昭和電工株式会社名誉会長）就任。

6月23日 水のシンポジウム

富士コカ・コーラボトリングと共催。見城美枝子（テレビキャスター）が講演。

7月10～11日 第2回 湘南国際村リブイン・セミナー

米国大使館東京アメリカンセンターと共催。テーマは「持続的経済成長と環境」。座長は諸戸孝明（経団連・貿易と環境タスク・フォース座長）。講演「経済成長と持続可能な環境保護」は、ロリ・フォーマン（ネイチャー・コンサーバンジー太平洋地区プログラム開発部長）。講演「アメリカの地球環境NGO」は、ロバート・メイスン（テンブル大学準教授）。

7月28～30日 かながわ・エグゼクティブ・セミナー

かながわを生きた人々を題材にした財団独自プログラム。テーマは「世界を繋ぐ人間像－鈴木大拙」。モデレータは松田義幸（実践女子大学教授）と宇野喜三郎当財団専務理事。特別講演「大拙の世界を訪ねて」、講師は古田紹欽（松が丘文庫長）。

9月4～8日 第11回 国連大学グローバル・セミナー

国連大学と共催。テーマは「国連50周年：平和の構築へ」。講演「明日の世界における国連の行方」、講師 S.R. インサナリー（ガイアナ国連大使）、「予防活動」内田孟男（中央大学教授）、「国連と日本」平野次郎（NHK 解説主幹）。

10月6～7日 湘南国際村フォーラム '95

テーマは、「芸術・文化の社会・経済的支援」。基調講演「ビクトリア時代の教訓」は、都留重人（一橋大学名誉教授）。

10月27～29日 かながわ・バンフ・セミナー

カナダ・バンフセンターとの共催。テーマは「21世紀に向かっている環境とリーダーシップ」。モデレータはマーシャル・ウィリアムズ（バンフセンター会長）。基調講演は石井吉徳（国立環境研究所副所長）等。

10月31日～11月3日 第5回 日米独研究交流会議

「文化・教育」「メディア」のため、若手識者を米メリーランド州アナポリスへ派遣。

10・11月の5日間 葉山国際セミナー

11月2日 神奈川県内大学交流会

参加12大学。長倉三郎（神奈川科学技術アカデミー理事長）が特別講演「戦後高等教育の問題点とこれからの高等教育にのぞむもの」。

11月16～18日 かながわエグゼクティブ・セミナー

テーマは「愛と社会貢献－澤田美喜の世界」。モデレータは松田義幸（実践女子大学教授）と宇野喜三郎（当財団専務理事）。

11月29日、12月2日 三浦一族シンポジウム

横須賀市との実行委員会方式により、三浦一族をテーマとしたシンポジウムを開催。

12月9日 フォーラム「戦後50年・私はこう考える」

「戦後50年」を振り返り将来を展望するフォーラムを K-FACE 主催で。岡本行夫（外交評論家）、鈴木佑司（法政大学教授）、斎藤精一郎（立教大学教授）、浅井信雄（神戸市外国語大学教授）、細谷千博（国際大学教授）、田中直毅（国際政治経済評論家）、加藤幹雄（国際文化会館常務理事）、高橋彰（アジア経済研究所理事）、福士昌寿（関東学院大学教授）、飯野正子（津田塾大学教授）、松田義幸（実践女子大学教授）、久保孝雄（株）イーエスピー社長）によるフォーラム。

12月17～18日 若手研究者交流会

若手研究者の総合的・学際的研究を支援する目的で若手研究者交流会を開催。講演は、「脳化社会」養老孟司（東京大学名誉教授）、「科学と感性」木村尚三郎（東京大学名誉教授）。

1996（平成8）年

1月11～12日 K-FACE セミナー

テーマ「創造の世紀－国際化時代における創造性とは」。モデレータは、飯沼和正（科学ジャーナリスト）。

1月20日 社団法人日本経済調査協議会共催 21世紀かながわ円卓会議

テーマは「文明の衝突と融和」。モデレータは松田義幸（実践女子大学教授）。岡田英弘（東京外国語大学名誉教授）の特別講演「人間・社会・世界の現在」と今道友信（東京大学名誉教授）特別講演「文明の衝突・対立から融合への可能性」。

1月30日、3月19日 湘南国際村研究研修ネットワーク協議会

湘南国際村の研究研修機関相互の事業連携促進のため開催。

2月16～18日 かながわ・アスペン・セミナー

アスペン研究所と共催。テーマは「変化の時代のリーダーシップ」。モデレーターはD.T. マクラフリン（アスペン研究所理事長）、加藤幹雄（国際文化会館常務理事）。特別講演「変化の時代のリーダー像」、講師は城山三郎（作家）、「世界をわたった、鈴木大拙の世界」、講師は古田紹欽（松が丘文庫長）。

3月16日 日中比較文化講座

日中友好会館と共催。テーマは「中国における日本語教育の現状と課題」。講師は巖安生（北京外国語大学教授）。

3月25日

K-FACE 第2号発行

K-FACE 研究叢書 第1号及び第2号発行

93年度からスタートした学術研究の成果として、K-FACE 研究叢書 第1号「地球化時代における地域の役割」かながわ学術研究交流財団編及び、第2号「冷戦後世界と自治体の役割」首藤信彦（東海大学教授）編著を発行。

## 1996（平成8）年度

### 【概況】

湘南国際村を拠点として地域の切り口からの学術研究、人材育成、国際交流の事業を本格的に展開しつつ国内外のネットワークの拡大に努めた。また湘南国際村ホームページの開設等、情報発信の強化に努めた。研究事業は公募研究・特定課題研究の充実を図るとともに、成果を叢書として発行した。

緑陰滞在型の環境を活用し、「かながわ・エグゼクティブ・セミナー」、「かながわ・バンフ・セミナー」、「かながわ・アスペン・セミナー」を開催した。

組織体制については、常勤役員を一新するとともに、事業を円滑に推進する上で、必要な事務局体制の整備を行うため、幹部職員を含めて4名の常勤職員を採用した。

### 【研究】

（公募研究）

研究課題を定めて研究テーマと研究者を公募した。研究期間は9ヶ月。

○グループ研究 3研究

テーマ	研究代表者
情報産業構造と地域住民の情報・文化行動の変容に関する実証的研究	島根克巳（専修大学助教授）
地球環境時代の多機能・複合型開発の動向	鈴木邦雄（横浜国立大学教授）
「世界経済のグローバル化とリージョナリズムの役割」の研究	佐藤孝治（神奈川大学助教授）

○個人研究 6研究

テーマ	研究者
法情報ネットワークの構築と法制度改革 他5件	田村次郎（慶應義塾大学教授）他

（特別課題調査研究）

テーマ	研究期間	研究体制
歴史認識と共生の可能性	9ヶ月	菊池 努（南山大学教授）
名著と生涯教育プロジェクト	6ヶ月	江藤裕之（エンゼル財団客員研究員）

### 【出来事】

4月1日 第三代理事長に長洲一二（前神奈川県知事）就任。

5月13～16日 第6回 日米独研究交流会議

湘南国際村で開催。テーマは「ビジネス」。公開セッションは「ビジネス・労働分野における日米独各自治体が抱える現状と課題」。

7月8～9日 第3回 湘南国際村リブイン・セミナー

米国大使館東京アメリカンセンターと共催。テーマは「持続的成長と環境」。座長は細谷泰雄（東京電力理事）。講師はスティーブン・シャーノビッツ（地球環境・貿易研究所所長）、リチャード・フォレスト（全米野生動物連盟東アジア代表）、デイビット・ストローザー（環境保護庁・日米共同環境保護企画調整委員会事務局長）。

7月30日、1997年3月12日 湘南国際村研究研修ネットワーク協議会

湘南国際村の研究研修機関相互の事業連携を促進のため開催。

#### 8月3～4日 かながわ・エグゼクティブ・セミナー

テーマ「思想劇場『二宮尊徳の世界』－いま蘇る経営哲学」。モデレータは松田義幸（実践女子大学教授）。基調講演「日本の経営者に見る報徳思想」、講師は竹内宏（長銀総合研究所理事長）。

#### 8月30日 水のシンポジウム

テーマ「水と身体に関わり」。富士コカ・コーラボトリングの協力を得て開催。セルジオ越後（サッカー解説者）が「水とスポーツ」について基調講演。

#### 9月2～6日 第12回 国連大学グローバル・セミナー、天皇・皇后両陛下がご視察

「グローバリズムとリージョナリズム」のテーマで。最終日には天皇・皇后両陛下が湘南国際村をご視察、セミナー参加者と一時間近く懇談された。スウェーデンのビョルン・ヘトネ（ヨーテボリ大学教授）が「グローバリゼーションと新しい地域主義」と題して、またブルース・ラセット（米エール大学教授）が「グローバルカリジョナルか－国際機構に何ができるか」と題して基調講演。成果はK-FACE研究叢書 第3号「グローバリズムとリージョナリズム」（1997年3月28日発行）に。

#### 10～11月の5日間 葉山国際セミナー

葉山町からの依頼に応え、講師派遣、会場提供等積極的に協力。

#### 10月18～19日 かながわ・バンフ・セミナー

「地球環境の新時代を考える」のテーマで。モデレータは清木克男（地球産業文化研究所理事長）。大橋照枝（麗澤大学教授）の「環境・マーケティング－エコフェミニズムの視点から」と題した基調講演。

#### 11月8日 湘南国際村フォーラム'96

「NGO・地方自治体と国際協力ネットワーク」をテーマに開催。鈴木佑司（法政大学教授）がモデレータと基調講演。

#### 11月29～30日 若手研究者交流会

「情報化社会のもたらすもの」をテーマに開催。加藤邦紘（NTTマルチメディアシステム総合研究所長）が「マルチメディア時代へ向けての研究開発」について、竹内啓（明治学院大学教授）が「情報化の増幅する誤解」について講演。

#### 12月12日 K-FACE ホームページ開設

湘南国際村紹介のホームページ開設とともに、当財団のホームページを開設。

#### 12月13～14日 K-FACE セミナー

テーマは「国際化と異文化コミュニケーション」。浅井信雄（神戸市外国語大学教授）の講演「日本の国際社会での居場所を求めて」他。

#### 1997（平成9）年

#### 1月23～25日 かながわアспен・セミナー

アспен研究所と共催。テーマは「変化の時代のリーダーシップ」。モデレータはD.T. マクラフリン（アспен研究所理事長）、加藤幹雄（国際文化会館常務理事）。特別講演「歴史に学ぶ－変化の時代のリーダー像」、ジョージ・フィールズ（産能大学大学院客員教授）。

## 2月14日 地球市民セミナー

グローバル化時代における地域からの国際貢献、地域と地域、人と人との国際交流の意義や必要性についての公開講座。長洲一二当財団理事長の講演「世界－国家－地域：グローバリズムとローカリズム」。

## 2月21～22日 社団法人日本経済調査協議会共催 21世紀かながわ円卓会議

ハーバード大学・ハンチントン教授の論文「文明の衝突」をもとに「文明の対立と融合」について考えるシンポジウムを開催。特別講演は、猪口孝（国連大学上級副学長）の「『文明・文化の融合』に向けた課題とその解決策」。

## 3月1日 日中比較文化講座

日中国交正常化25周年記念。日中友好会館と共催。テーマは「日中関係の現状と将来－中国人の視点」。講演は夏文達（中国国際放送局東京支局長）他。

## 3月17日 K-FACE フォーラム

K-FACEの出捐者、理事、評議員を対象に、協力への感謝と財団事業の体験のためにフォーラムを開催。テーマは「日本経済再生の道を求めて－いま、何をすべきか、何ができるか」。講演は斉藤精一郎（立教大学教授）他。

## 3月28日 K-FACE 研究叢書 第3号 発行

タイトルは「グローバリズムとリージョリズム」。猪口孝（国連大学上級副学長）、田中俊郎（慶応義塾大学教授）編。

## 1997（平成9）年度

### 【概況】

これまでの各事業の成果と今後の課題等について再検討し、より一層、県民・地域へ還元するという視点に立って研究・人材育成・交流の各事業を実施した。また人材育成事業では、宿泊型セミナーを見直して日帰りセミナーを導入する等、開催方法の工夫を凝らした。更に交流事業では、財団として重点的に取り組むテーマである「アジア」「環境」を中心としたセミナー、地元地域への貢献に重点に置いたセミナー等を行った。

### 【研究】

#### （公募研究）

研究課題を定めて研究テーマと研究者を公募した。研究期間は9ヶ月。

#### ○グループ研究 3件

テーマ	研究代表者
開港場における近代教育の発達とその展開	小檜山ルイ（東京女子大学助教授）
地球環境時代の多機能・複合型地域開発の展開	周佐喜和（横浜国立大学助教授）
グローバリズム・ローカリズムの研究	高瀬幹雄（国際文化会館常務理事）

#### ○個人研究 6件

テーマ	研究者
環境移行前後の高齢者の日常生活機能と行動に関する調査研究 他5件	山崎俊宏（東海大学助教授）他

#### （特別課題調査研究）

テーマ	研究体制
グレートブックスセミナーの及ぼした影響とその評価	江藤裕之（エンゼル財団客員研究員）
技術移転を通じたアジア人の人材育成、異文化理解、パートナーシップについて	鈴木佑司（法政大学教授）
マルチメディア社会における今後の課題と展望	三浦半島情報ネットワーク研究会

### 【出来事】

#### 4月11日 三浦按針セミナー

横須賀市などと共催で。特別講演は榎山紘一（東京大学教授）。斎藤悦史（神奈川新聞社論説委員）をコーディネータに、中村実（はまぎん産業文化振興財団理事）、岩見妙晴（研究家）、イアン・ド・ステインズ（在日英国商工会議所専務理事）、牧野正（伊東按針会顧問）によるパネルディスカッション。

#### 6月12日 水のシンポジウム－水と食文化

富士コカ・コーラボトリングと共催で。基調講演は小泉武夫（東京農大教授）。

#### 6月16～17日 第4回 湘南国際村リブイン・セミナー

米国大使館東京アメリカンセンターと共催。テーマは「持続的社会的のための行政・企業・NGOの役割－公開性と協力を求めて」。堀内行蔵（法政大学教授）を座長に、コメンテーターにジェイムズ・カリヤ（米国環境保護庁上席科学官）、スタンリー・オースティン（同水質管



理専門官)等。

6月27日 湘南国際村研究研修ネットワーク協議会

7月5～6日 K-FACE・アジアセミナー

テーマは「アジア・太平洋地域の新時代を考える」。講演はノルディン・ソピー (マレーシア戦略国際問題研究所会長兼 CEO)。モデレータは鈴木佑司 (法政大学教授)。

9月8～11日 第13回 国連大学グローバル・セミナー

「国連はどこへー加盟国の態度」。スチーブン・マークス (コロンビア大学上級講師) 他の講演。

9月26日 「かながわを生きた人々」セミナー

「北條政子ーその意外な素顔と生涯」のテーマで、講演は安西篤子 (作家)、五味文彦 (東京大学教授)、三浦勝男 (前鎌倉国宝館館長)。コーディネータは浅田勁 (神奈川新聞社横須賀総局長)。

10月14日 神奈川県内大学交流会

特別講演はジェラルド・ドブリュー (米国カリフォルニア大学バークレー校名誉教授)。16大学から参加。

10月14日～11月26日 5回 葉山国際セミナー

葉山町教育委員会と共催。テーマは「葉山からアジアが見える」。

10月23～24日 かながわ・バンフ・セミナー

バンフセンター、国際コミュニケーションズ、カナダ・アジア太平洋基金と共催。テーマは「環境共生型の都市づくりと地域の役割」。モデレータは J. イエロリーズ (バンフセンター日本代表)。講演は、進士八十八 (東京農大教授)、パトリック・ダフィー (環境リーダーシップ副理事長)。

11月17日 湘南国際村トップ・セミナー

テーマは「グローバル経営者の条件」。講師は、グレン・S・フクシマ (在日米国商工会議所副会頭)。

11月21日 湘南国際村フォーラム '97

「我々はインドを知っているのかー眠れる巨像インドから経済大国へ」をテーマに。基調講演は古賀正則 (明治大学教授)、講演とパネルディスカッションは久保田展弘 (宗教学者)、清好延 (日印調査委員会事務局長) 等。

11月29～30日 若手研究者交流会

テーマは「生命と科学技術の進歩」。特別講演は梅棹忠夫 (国立民族学博物館顧問)。モデレータは及川昭文 (総合研究大学院大学教授)、講演は黒田玲子 (東京大学大学院教授)。

12月15～16日 K-FACE セミナー '97

「異文化コミュニケーションーグローバル時代における日本・日本人とは」をテーマに。基調講演は初日グレゴリー・クラーク (多摩大学学長)、二日目が下村満子 (ジャーナリスト)。グループ講師にエマニュエル・アディオレ (国連大学高等研究所博士課程研究員)、チャントソン・インタヴォン (ラオスの子供に絵本を送る会代表) 等。

12月19日 湘南国際村倶楽部セミナー

湘南国際村倶楽部と共催。テーマは「地球環境問題と戦略」。講師は森寫昭夫 (地球環境戦略機関理事長)。

## 1998（平成10）年

### 1月22～24日 かながわアспен・セミナー

アспен研究所と共催。テーマは「変化の時代のリーダーシップ」。モデレータはD.T. マクラフリン（アспен研究所名誉理事）、加藤幹雄（国際文化会館常務理事）。講演は大竹美喜（アメリカンファミリー生命保険会社会長）。

### 2月6日 地球市民セミナー

テーマは「地球化時代における地域の役割と国際貢献」。講師は、浅井信雄（神戸外国語大学教授）。

### 2月21～22日 社団法人日本経済調査協議会共催 21世紀かながわ円卓会議

テーマは「文明の対立から融合に向けて－異文明に対する受容・融合と日本の役割」。コーディネータは松田義幸（実践女子大学教授）。ゲストスピーカーは、今道友信（東京大学名誉教授）と佐伯彰一（東京大学名誉教授）。講演は鈴木治雄（当財団顧問）。

### 3月7日 日中比較文化講座

日中友好会館と共催。テーマは「日中文化交流と食文化」。講師は、周季華（中国社会科学学院研究教授）他。

### 3月30日 K-FACE 研究叢書 第4号発行

タイトルは「多機能・複合型地域開発経営とエコロジーの共存」。鈴木邦雄（横浜国立大学教授）、周佐喜和（横浜国立大学助教授）編著。

## 1998（平成10）年度

### 【概況】

長期化し曙光が見えない不況や金融機関の不安定等、社会・経済環境が揺れ動く中で、諸情勢に配慮しつつ事業を進めた。特に、当財団の持つ情報、ネットワーク、ノウハウ等の特色を最大限に活かし、より一層効率的・効果的に地域・県民に研究を始めとする各事業の成果を提供・還元できるように配慮しつつ事業を実施した。更に新たな試みとして、横浜、県央、湘南地区へ出張してセミナーを開催する等地域貢献事業の積極的展開を図った。

### 【研究】

#### （企画研究）

当財団が独自に企画し設定したテーマに基づき、研究委託方式、または研究会方式により実施。

#### ①「名著と学び」研究プロジェクト

##### a 米国における名著

研究者：松田義幸（実践女子大学教授）

##### b 新しい学びの方法等

研究者：植田康夫（上智大学教授）他

#### ②「アジア」研究プロジェクト

研究名：アジア諸国における持続可能な発展と分権型社会の構築に関する調査研究  
（その1）

研究者：鈴木佑司（法政大学教授）他

#### ③「マルチメディア」研究プロジェクト

##### a 三浦半島情報ネットワーク調査研究

研究者：森下信（横浜国立大学教授）他

##### b マルチメディア社会の人文社会学的考察に関する予備研究

研究者：廣松毅（東京大学大学院教授）他

### 【出来事】

#### 4月16日 第1回 地球環境セミナー公開シンポジウム

「神奈川から環境共生へ向けた国際協力を考える」を県立地球市民かながわプラザで。講師は佐和隆光（京都大学経済研究所長）等。

#### 5月16日 アジア・セミナー「21世紀のアジア諸国間関係の再構築」

マレーシア戦略国際問題研究所他と共催。モデレータ兼基調講演はノルディン・ソピー（マレーシア戦略国際問題研究所会長）と鈴木佑司（法政大学教授）。基調講演は清木克男（地球産業文化研究所専務理事）。スティーブン・リオン（マレーシア戦略国際問題研究所日本研究センター所長）、チャップ・ソサリス（カンボジア協力平和研究所リサーチフェロー）、伊藤隆（日本財団国際部長）、加納啓良（東京大学教授）、長洲一二（当財団理事長）等が討論。

#### 5月18～19日 第5回 湘南国際村リブイン・セミナー

米国大使館東京アメリカンセンターと共催。テーマは「電子情報化社会：情報通信網の構築と社会・経済・文化の変化」。座長に公文俊平（国連大学グローバル・コミュニケーション・

センター所長)。エリオット・マックスウェル (米連邦通信委員会企画政策室次長)、ダン・ローゼン (同志社大学教授) 等の講演。

6月 季刊 K-FACE ニュースレター 「face to フェイス」 創刊

6月26日 K-FACE セミナー (県央地区出張セミナー)

「アジアの21世紀のリーダーは誰か—アジアの経済危機、その背景と修復を探る視点」を厚木市ヤング・コミュニティ・センターで。講演は浅井信雄 (前神戸市外国語大学教授)。パネルディスカッション「指導者像を通して危機からの脱却の可能性を考える」は、浅井を座長に重村智計 (毎日新聞社論説委員)、朱建栄 (東洋学園大教授) 等。

7月17日 かながわを生きた人々セミナー (湘南地区出張セミナー)

「澤田美喜の世界」ひらつかスカイプラザで。基調講演は吉村恭二 (横浜 YMCA 顧問)。

9月7~11日 第14回 国連大学グローバル・セミナー

「国連と人権—理想と現実そして未来への展望」。首藤信彦 (東海大学教授) がディレクター。デーヴィッド・フォーサイス (米国ネブラスカ大学政治学教授)、横田洋三 (東京大学教授) 等が講師。

9月18日 K-FACE セミナー (横浜地区出張セミナー)

「江戸時代のリサイクル文化から学ぶ」を地球市民かながわプラザで。基調講演は田中優子 (法政大学教授)。その後平野秀秋 (法政大学教授) との対談。

9月29日 研究発表フォーラム '98

公募研究事業の研究成果を広く県民に提供し財団の研究活動への理解を得るため、「ひと・まち・環境—あたらしい都市の姿」のテーマで、研究発表とパネルディスカッション。鈴木邦雄 (横浜国立大学教授) 等。

10月2日 食の文化セミナー

テーマは「日本の食文化」。講師は永山久夫 (食文化研究所長) 等。

10月19~20日 K-FACE セミナー (湘南国際村)

テーマは「復活するシルクロード—中央アジア諸国の過去・現在・未来」。基調講演は藤原稔由 (外務省欧亚局新独立国家室室長) 他。細谷千博 (国際大学教授) を座長に、片倉もとこ (中央大学教授)、イワン・ツェリツシェフ (新潟経営大学教授)、山内昌之 (東京大学教授)、久保田展弘 (宗教学者) 等による討論。

10月24日 社団法人日本経済調査協議会共催 21世紀かながわ円卓会議

「人類、地球の未来」の観点から21世紀の方向を模索するために開催。テーマは「新しい日本の姿を考える—日本の経済・社会システムのあり方」。モデレーター兼基調講演は島田晴雄 (慶應義塾大学経済学部教授)。講師は共催の日本経済調査協議会委員長古賀憲介 (日新製鋼取締役)、委員は坂本春生 (西武百貨店副社長) 等。コメンテーターにジョージ・フィールズ (国際ビジネスコンサルタント) 等。

10月 神奈川県内大学交流会

10月7、27日、11月5、18、24日 (全5回) 葉山国際セミナー

葉山町教育委員会と共催。全体テーマは「葉山から世界が見える—ラテンアメリカってどんなところ」。

個別テーマは：

第1回 パラグアイにみるユネスコ世界文化遺産

第2回 グアテマラってどんなところ？

第3回 ブラジルの文化・歴史を学び現在を考える

第4回 ダンスで感じるラテン文化

第5回 鶴見と沖縄と中南米－多文化教育の実践

11月10～11日 かながわ・バンフ・セミナー

カナダ・バンフ・センターと共催。「いまなぜ世界遺産か―人と自然の共生を考える」。基調講演は作家ロバート・サンドフォードと石井吉徳（東京大学名誉教授、前国立環境研究所長）。ダグ・マクナマラ（バンフ・センター副所長）をモデレータに、幸丸政明（岩手県立大学総合政策学部教授）等による講演と討論。

11月28日 かながわを生きた人々セミナー（湘南国際村開村5周年記念講演会）

「岡本かの子の世界」。よこすか芸術劇場で。講演「かの子と内助の男たち」は瀬戸内寂聴（作家）。松田義幸（実践女子大学教授）をモデレータに尾崎左永子（歌人）、勝又浩（文芸評論家）等によるパネルディスカッション。

1999（平成11）年

1月21～23日 かながわ・アスペン・セミナー

米国アスペン研究所と共催。テーマは「変化の時代のリーダーシップ」。ゲストスピーカーに行天豊雄（国際通貨研究所理事長）。モデレータにデヴィッド・マクラフリン（アスペン研究所前理事長）と加藤幹雄（国際文化会館常務理事）。

3月4日 湘南国際村教育フォーラム'99

テーマは「日本の近代化に見る教育のきのう・きょう・あした」。宇沢弘文（中央大学教授）の講演と小檜山ルイ（東京女子大学助教授）等による研究発表。

3月13日 日中比較文化講座

日中友好会館と共催「日中の文化交流を雅楽から探る」。講師は孟仲芳（天津大学助教授）、岩波滋（宮内庁楽部楽長補）。

3月31日 K-FACE 研究叢書 第5号 発行

タイトルは「グレート・ブックスとの対話」。松田義幸（実践女子大学教授）、須賀由紀子（エンゼル財団主任研究員）、江藤裕之（ジョージタウン大学大学院ドイツ学研究科博士課程）の共著。

1998(平成10)年度から機関紙『Face to フェイス』が発行されました。年に4回、合計32号を発行したのですが、各年度1～2号を選び、その一部のページを抜粋して掲載します。K-FACEの活動の積み重ねを感じ取っていただければ幸いです。



# face to フェイス

face to フェイス

## 人生いろいろ

(財) かながわ学術研究交流財団理事長 長洲 一二

島倉千代子さんの「人生いろいろ」、曲も詩も、なかなかの傑作だと思います。本当に、世の中さまざま、人もまたいろいろです。だからこそ味わい深いと申せましょう。

いろいろな人がいるのは、困る、けしからん、という考え方もあるようです。でも、だれでもみんな同じ顔、同じ意見、同じ暮らしというのは、少々不気味です。昔、戦争中は「一億一心」、みんな「お国のため」、戦後もみんな「会社のため」「十人一色」でした。正直いって、これはもうごめんこうむりたいと思います。

いまや流れは、幸いなことに、「人生いろいろ」「十人十色」の方向になってきたようです。みんな自分の人生を精いっぱい生きよう、と願っています。できれば、十人十色だけでなく「ひとり十色」も望みたい。仕事も大事、家庭もたいせつ、音楽もスポーツも好き、俳句もやる、といったぐあいに。

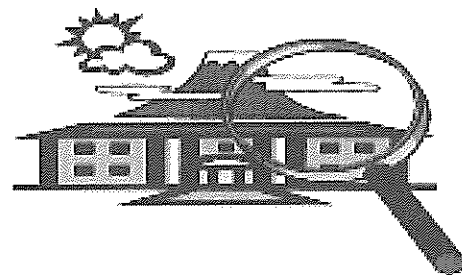
世の中、いろいろな人がいるから、おもしろい。だから、自分と違う人もいることを、お互い認めあう。何とかいっしょに生きてゆく工夫をする。「十人十色、共に生きる」というのが、望ましい世の中でしょう。これは、身近の世の中もそうですが、実は世界大の国際関係でも、同様ではないか。湘南国際村の願いである「国際理解」ということも、「十人十色、共に生きる」ではないでしょうか。

この地球も、本当に「人生いろいろ」です。顔付きも、言葉も、暮らし方も、宗教やら文化やら、さらに価値観まで、とても多彩なことに気がきます。まさに「十人十色」「諸文明」「諸民族」の世界です。そして違うのはけしからんと考えていたら、争いになり、戦争にもなります。いろいろ違うといっても、同じ地球市民として共通点も多いのです。「国際理解」の根本も、「十人十色、共に生きる」でありましょう。



## “K-FACE”ってどこにあるの？

- ☆三浦半島のほぼ中央部、伊豆大島や富士山を一望する湘南の丘に立つ「湘南国際村センター」の中にあります。
  - ☆湘南国際村は東京ディズニーランドの約4倍という広さ。横須賀と葉山町にまたがっています。
  - ☆たくさんの緑や青い海に囲まれ、いろいろな企業、団体が活動しています（ホテルやレストランもあるんですよ）。
  - ☆油壺、城ヶ島をひかえ、このあたりは昔から都心に一番近いリゾート地としても知られています。
- お散歩がてら一度、足を運んでみるのも良いかも……。



■ 交通案内  
JR横須賀線逗子駅、京浜急行汐入駅から湘南国際村行きバス約30分



# face to フェイス

## 湘南国際村開村5周年記念講演会 盛大に開催

### 瀬戸内寂聴 氏

### かの子を熱く、ユーモアたっぷり語る！

#### かながわを生きた人々セミナー「岡本かの子の世界」を開催して

去る11月28日(土)、横須賀市と横須賀市教育委員会との共催による、「岡本かの子」をテーマとしたセミナーを、よこすか芸術劇場他を会場として開催いたしました。

当日、午前に行われた講演会では、瀬戸内寂聴氏にはるばる京都よりお越し頂き、代表作「かの子繚乱」を執筆するに当たっての取材エピソードを披露されるなど、その巧みな話術で幾度となく会場内を沸かせて頂きました。

午後のパネルディスカッションでは、各パネリストのお話から、かの子の様々な側面をうかがい知ることができ、多くの参加者が講師のお話に興味に耳を傾けていました。また、故岡本太郎画伯の養女敏子様が特別参加され、太郎画伯の教育観を語って頂くなど、充実したひと時を皆さまに提供することができました。

○午前の部

【講演】

テーマ「かの子と内助の男たち」

講師：瀬戸内寂聴(作家)

【会場】よこすか芸術劇場

○午後の部

【パネルディスカッション】

テーマ「才能を発見、それを伸ばすための教育とは」

モデレーター

松田義幸(実践女子大学教授)

パネリスト

尾崎左永子(歌人・作家)

勝又浩(文芸評論家・法政大学教授)

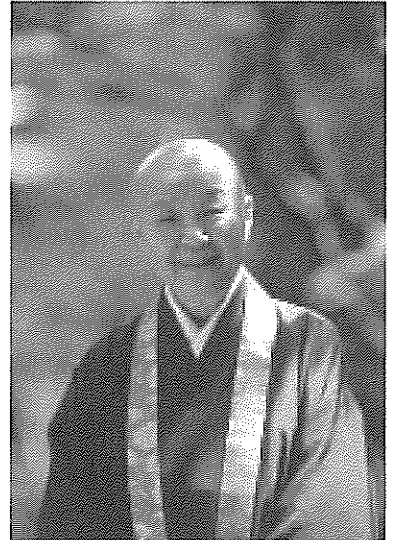
原祐子(日本近代文学館職員)

保昌正夫(文芸評論家・立正大学講師)

【会場】横須賀市産業交流プラザ

【後援】

(財)NHK放送研修センター  
NHK横浜放送局、神奈川新聞社  
県立神奈川近代文学館・(財)神奈川文学  
振興会、(株)湘南国際村協会  
湘南国際村倶楽部、TVKテレビ  
(株)BCF、横須賀商工会議所



## ★かながわハローファクス★ 利用のご案内

このたび、神奈川県が提供する「かながわハローファクス」へK-FACE主催事業の情報を登録できるようになりました。情報の取り出し方は次の通りです。セミナー募集等の情報収集にお役立て下さい。

① 受信機の付いたファクシミリから電話をする

045(212)0186

② 音声で応答

「かながわハローファクスです。ご希望の情報のボックス番号をダイヤルして下さい」

1 1 2 3 1

※K-FACEの  
ボックス番号です

③ 情報を取り出す

「では、ファクスをお送りします。よろしければ〇を、情報を追加する場合は、ボックス番号をダイヤルして下さい」

0

「ファクスの受信ボタン又は通信ボタンを押して、受話器を置いてお待ち下さい」

※更新は、主にセミナーの募集ごとに行います。  
※ファクスする度に、登録中の全情報が送られます。  
※24時間いつでもご利用できます。

ハローファクスについてのお問い合わせは下記へ。

神奈川県県民部県政情報室情報班  
045(201)1111 内線(3337・3338)

## 1999（平成11）年度

### 【概況】

神奈川県は財政危機による補助金の大幅削減、超低金利による果実収益の低迷という非常に厳しい社会・経済環境の中で、基本財産2億円取崩の事態が発生した。このため運営全般を見直し、研究研修部と交流支援部の統合及び総務部と研究交流部の2部体制とした。

事業面では、研究成果を地域・県民・企業などに具体的に提供できるよう人材育成事業・交流事業での事業化に努めた。地元企業と共催で「湘南国際村文化と音楽の集い」を開催する等、湘南国際村の中核組織として交流事業を積極的に展開した。また湘南国際村センター研究棟に誘致した地球環境戦略研究機関に対して支援を行った。

### 【研究】

#### （企画研究）

##### ① 「名著と学び」研究プロジェクト

研究名：名著セミナーの定着と充実及び教材としてふさわしい古典名著の調査研究

代表研究者：松田義幸（実践女子大学教授）

##### ② 「アジア」研究プロジェクト

研究名：アジア諸国における持続可能な発展と分権型社会の構築に関する調査研究  
（その2）

研究者：鈴木佑司（法政大学教授）他

##### ③ 「マルチメディア」研究プロジェクト

研究名：マルチメディア社会の人文社会学的考察に関する調査研究

－教育を例にとって

代表研究者：竹内啓（明治学院大学教授）

### 【出来事】

#### 5月3～5日 湘南国際村フェスティバル参加事業

インターネット体験コーナー。「風と光のイルシオン」展示コーナー。「かながわを生きた人々」ビデオ上映コーナー。

#### 6月15～16日 第6回 湘南国際村リブイン・セミナー

米国大使館東京アメリカンセンターと共催。テーマは「電子情報化社会：情報通信網の構築と社会・経済・文化の変化（第2回）」。ピーター・ライマン（米国カリフォルニア大学バークレー校教授）、ジョン・バーバー（AOL ジャパン代表）等の講演。座長は公文俊平（国連大学グローバル・コミュニケーション・センター所長）。

#### 7月24日 アジア・セミナー

「グローバル化の中の分権を考える－『アジアの地方の時代』と共に生きる」。モデレータと基調講演は鈴木佑司（法政大学教授）。基調講演はスリチャイ・ワンケーオ（チュラロンコン大学准教授）。討論はアジア研究プロジェクトメンバーの浅見靖仁（一橋大学助教授）、小島聰（法政大学助教授）、斎藤友之（地方自治研究機構主任研究員）、武田長久（国際協力事業団協力専門員）、松本正生（埼玉大学助教授）。



#### 8月3日 マルチメディアフォーラム「マルチメディアがつくる三浦半島未来図」

平成9、10年度に実施した「マルチメディア研究プロジェクト」の成果発表会を湘南国際村センターにて開催。講演は森下信（横浜国立大学工学部教授）、パネリストは大塚英作（横浜国立大学経営学部教授）、杉内肇（同大学工学部講師）、波多野和彦（メディア教育界開発センター助教授）。

#### 8月20～21日 風と光のシンポジウム

講演「地域密着型の自然エネルギーを考える」と工作教室、パネル展示。

#### 9月6～10日 第15回 国連大学グローバル・セミナー

テーマは「グローバリゼーションと人間開発—貧困撲滅に向けて」。セミナー・ディレクターは内田孟男（中央大学教授）。基調講演「国連開発計画の役割と政策」はリチャード・ジョリー（国連開発計画総裁特別顧問）、「貧困撲滅に向けての世銀の政策」は西水美恵子（世界銀行南アジア担当副総裁）。講師にピーター・ブルックナー（デンマーク大使）、ランドロフ・S・ダヴィッド（フィリピン大学教授）、藤原帰一（東京大学教授）、山崎孝治（関西学院大助教授）、ジョン・セイヤー（OXFAM 香港所長）、毛利聡子（明星大学教授）、粗信仁（外務省経済協力局政策課長）、ジュリアス・コート（国連大学プログラム・コーディネーター）、伊藤光子（外務省国際機関人事センター所長）。

#### 10月～11月（全5回） 葉山国際セミナー

葉山町と共催。全体テーマは「ラテンアメリカってどんなところ」。各回のテーマと講師は：

第1回「あなたはアルゼンチンを知っていますか」松本アルベルト（アイデアネットワーク代表）

第2回「アマゾンの熱帯雨林を再生する」磯谷達弘（国士舘大学講師）

第3回「ラテンアメリカ徒然草」山田典秋（元神奈川大学講師）

第4回「南アメリカの動物たちの不思議」板橋正憲（金沢動物園）

第5回「グアテマラのマヤ系先住民の織物」本谷裕子（東洋英和女学院大学講師）

#### 10月8日 食の文化セミナー

地球市民かながわプラザで、富士コカ・コーラボトリングと共催。講師は木村修一（東北大名誉教授）、本多京子（医学博士）。

#### 10月19日 かながわを生きた人々セミナー

「ヘボン—近代日本の開眼者」。基調講演とモデレーターは阿部志郎（横須賀基督教社会館館長）、講師に武者小路公秀（フェリス女学院大学教授）、小檜山ルイ（東京女子大助教授）、佐々木晃（関東学院定時制高校教諭）の各氏。横浜市山手町のフェリスホールにて開催。

#### 10月22日 第四代理事長に福原義春（資生堂会長）が就任。

#### 11月9日 女性と環境セミナー

湯河原観光会館で。テーマは「江戸のリサイクル文化に学ぶ」。講師は田中優子（法政大学教授）。

#### 11月21～23日 グレート・ブックス・セミナー

テーマは「対話を通してグレート・アイデアスを理解する」。特別講師は樺山紘一（東京大学教授）。モデレーターは松田義幸（実践女子大学教授）、江藤裕之（清風英語学研究所主任研究員）、須賀由紀子（エンゼル財団研究員）。

## 2000（平成12）年

### 1月29日 フォーラムゆがわら& K-FACE フォーラム

「かがやこう、新しい女性として生きるために一与謝野晶子の歌心をよむ」を湯河原観光会館で開催。モデレータは紅野敏郎（早稲田大学名誉教授）、パネリストは尾崎左永子（歌人）、俵万智（歌人）。

### 2月25日 K-FACE セミナー（横浜地区出張セミナー）

ホテル横浜ガーデンで。テーマは「新しい都市開発・エコ開発と都市経営戦略」。講演は鈴木邦雄（横浜国立大学経営学教授）、向田尊司（手塚プロダクション手塚ワールド推進本部長）。

### 3月4日 湘南国際村文化と音楽の集い

「自然と人間の共生－アジアの風を感じる」バンブーオーケストラ。

### 3月11日 日中比較文化講座

日中友好会館と共催にてロフォス湘南で開催。テーマは「敦煌・莫高窟 - 仏教芸術の美と神秘を探る」。講師は趙俊榮（敦煌研究院助理研究員、東京芸術大学客員研究員）、福井爽人（東京芸術大学教授）。

### 3月20日 K-FACE セミナー（湘南地区出張セミナー）

藤沢産業センターで。テーマは「自然と共生したまちづくり」。基調講演は養老孟司（北里大学教授）、モデレータは大原一興（横浜国立大学助教授）、パネリストに秋元馨（横浜国立大学助手）、石田聰（藤沢市自然環境懇話会代表）、金子昌義（藤沢市都市計画課）、櫻井武（真鶴町文化財審議会委員）。



# face to フェイス

face to フェイス

99年9月

## 「風と光のシンポジウム」盛大に開催

8/20(金)、8/21(土)

湘南国際村では、村内の各団体・施設が相互に協力し合い、より良い村づくのお手伝いをする「湘南国際村研究研修ネットワーク協議会」という組織をつくっており、各種事業を展開中です。

去る8月20日、21日には、新しいエネルギーや自然と文化の調和等について考えようと「風と光のシンポジウム」を開催いたしました。

まず、20日夜には「風と光」をテーマに、当協議会のメンバーや県内工業高校などが作成したオブジェ(作品)を地域の住民の方と観賞する交流会を開催しました。

翌21日には、「地域密着型の自然エネルギーを考える」と題した講演会や、小学生を対象にした工作教室を同時開催しました。この工作教室は、科学技術振興事業団が科学実験のために派遣する「サイエンスレンジャー」(実験の名人)を講師に迎えて行いました。

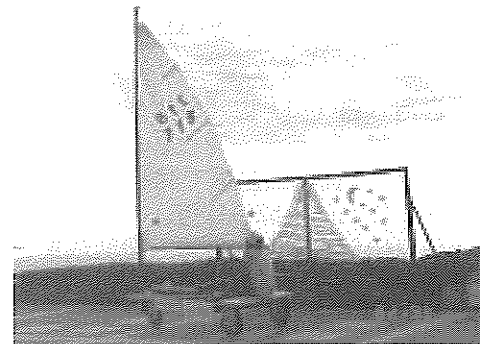
講演会では、NTT-ME、東京電力、東京ガスの3社から自社の取り組みを中心に、自然エネルギーや環境問題について発表が行われました。

工作教室では、「光の万華鏡」をつくったり、サイエンスショーが行われました。

湘南国際村センターの裏のグリーンパークでは、県立神奈川工業高校、県立横須賀工業高校の生徒が作成したソーラーカーやランドヨットなどを含め、15点の作品を展示。参加者は、昼は風になびき、夜は夜空に光を放つ作品に見入っていました。

また、両日とも湘南国際村から夕陽を見る会代表の子安太桐氏による、とんぼの生態等、村の自然に関するパネル展示会も行われました。

来年度も同様のイベントを企画しております。今後の当協議会の活動にご注目ください。



### 【湘南国際村研究研修ネットワーク協議会】

【会員】(財) 国際生態学センター、総合研究大学院大学、(財) 社会経済生産性本部、(社) 全国社会福祉協議会中央福祉学院、(財) 地球環境戦略研究機関、(財) かながわ学術研究交流財団(事務局)

【オブザーバー】(株) オオバ、簡易保険福祉事業団、コスモ石油(株)、資生堂開発(株)、総合警備保障(株)、(株) ファミリーマート、(株) ファンケル、山武ビルシステム(株)、(株) 読売広告社、(株) 湘南国際村協会

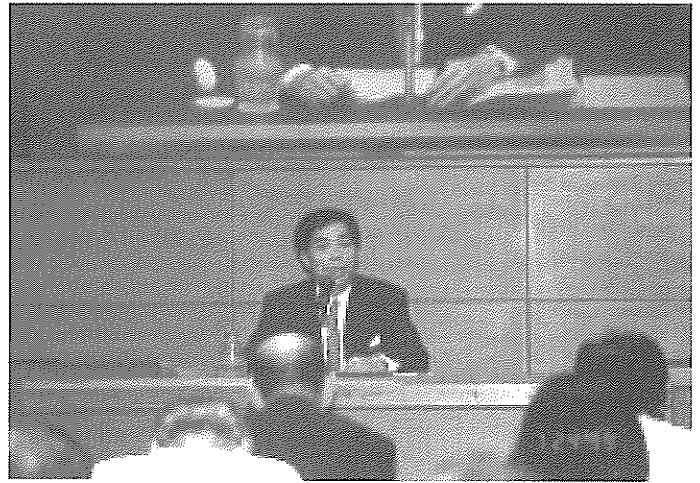
## 湘南国際村

### アジア・セミナー1999

グローバル化の中の分権化を考える  
～「アジアの地方の時代」とともに生きる～

去る7月24日（土）に湘南国際村センターでアジアの国々の中・長期的展望と将来の姿を民主化と分権化という切り口で考えるセミナーを開催いたしました。

セミナーでは法政大学法学部教授の鈴木佑司氏からは、ローカルとグローバルは必ずしも上下関係ではないこと、グローバル化の進展に伴って、国の役割も変化していくことを強調されました。また、チュラロンコン大学 教授のスリチャイ・ワンケーオ氏からはタイにおける市民社会の登場とNGOの役割について、理想科学工業株式会社監査室長の山田政男氏からは企業の視点と経験から見た日系企業とアジアの進出先の地域社会との関わりについて、シャンティ国際ボランティア会事務局長の秦辰也氏



からは、グローバル化の中のNGOの役割について大変興味深いお話がありました。

また、参加者からは、ローカルガバメントにどれだけの力があるのか、分権化による地域格差に対する懸念、介護保険・市民活動に対する行政のあり方などの質問があり、日本における地方との関わりにおいて活発な議論が展開されました。

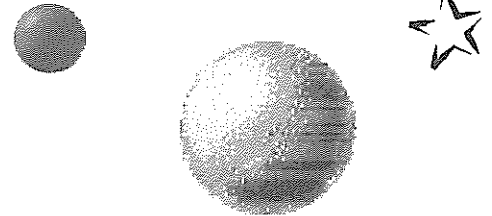
## 三浦半島

### マルチメディアフォーラム

去る、8月3日（火）に「マルチメディアがつくる三浦半島未来図」をテーマとしたフォーラムを湘南国際村センター国際会議場で開催いたしました。

このフォーラムは平成9年度、10年度に財団が行った研究プロジェクトの調査・研究成果を広く公表し、情報ネットワークの構築に向けての現状や課題を探るために企画されました。

講師に研究プロジェクトのメンバーである横浜国立大学工学部教授の森下信氏、同大経営学部教授の大塚英作氏、同大工学部講師の杉内肇氏、メ



ディア教育開発センター研究開発部助教授の波多野和彦氏の4名をお迎えし、また、討議参加者として、三浦半島地域内の市町及び民間企業・団体の担当者のほか、横須賀市、葉山町内の小・中学校の教師等が参加しました。

第1部『三浦半島マルチメディア社会の夢を語る』では、講師からは、情報化は住民が主体であり、役所はそれを積極的にサポートすべきである。三浦半島は自然も残り、高速ネットワークが普及すれば在宅勤務地域として注目される。また、情報化は実世界と仮想世界の区別がつかなくなるので、実感を育てる教育が必要であるなどの意見が交わされました。

第2部『「情報化と教育」の明日を考える』では、現場の教師から情報化の取り組みの現状について報告が行われました。講師からは、情報教育はパソコンを使うことではない。情報というものがどういう意味を持っているのかを認識すべきである。さらに、情報化が地域社会を変えていく要因となりうる。悪質情報が問題であるなどの意見が出されました。

また、参加者からの質疑応答も活発に行われ、良い面、悪い面を含めて情報化の影響の大きさに対する関心の高さがうかがえました。



## 2000（平成12）年度

### 【概況】

厳しい経済環境の中、健全な運営と活性化を図るため、事業費・人件費・管理経費の見直しを行い、効率的な執行、節減を図るなど経営の健全化に務めながら事業を進めた。

事業の実施状況では、企画研究事業として、新たに地球環境問題の研究を実施するなど研究事業を充実させるとともに、研究事業成果を地域・県民等に提供できるよう人材育成事業・交流事業での事業化に努め、グレート・ブックス・セミナーを開催するなど積極的な事業展開を図った。

### 【研究】

（企画研究）

#### ①「名著と学び」研究プロジェクト

研究名：名著セミナーの定着と充実及び新規プログラム開発に向けた調査研究

研究者：松田義幸（実践女子大学教授）

#### ②「マルチメディア」研究プロジェクト

研究名：マルチメディア社会の人文社会学的考察に関する調査研究－教育を例にとって

研究者：竹内啓（明治学院大学教授）

#### ③「地球環境資源との共生」研究プロジェクト

研究会：三浦半島エコミュージアム研究会

代表者：大原一興（横浜国立大学助教授）

#### ④「かながわを生きた人々プログラム開発」研究プロジェクト

研究会：かながわを生きた人々セミナー研究会

委員：中村實（東北文化学園大学教授）他

### 【出来事】

#### 5月4日 湘南国際村セミナー

テーマは「新しいメディアは私たちの生活をどこまで変えるか－活字文化の変遷と将来」、講師は蜷川真夫（株式会社ジェイキャスト代表取締役）。

#### 6月13～14日 第7回 湘南国際村リブイン・セミナー

米国大使館東京アメリカンセンターと共催。テーマは「電子情報社会（その3）：商業・教育・規制」。講演はキャサリン・マン（米国国際経済研究所主任研究員）、マーク・ラフルアー（米ニューハンプシャー州小学校長）、ジェイスン・オクスマン（米コヴァッド・コミュニケーションズセンター所長）。座長は公文俊平（国際大学グローバル・コミュニケーション・センター所長）。

#### 7月1日 K-FACE フォーラム（プレ円卓）

テーマは「21世紀の文化とグローバリゼーション」。講師はエドガー・モラン（フランスの社会学者）、西垣通（東京大学教授）、根本長兵衛（企業メセナ協議会専務理事）。

これより2003（平成15）年3月にかけて実施した3回の「K-FACE フォーラム」（プレ円卓）と3回の「21世紀かながわ円卓会議」の成果を『解はひとつではない』として2004年7月に慶応義塾大学出版会から出版。

## 8月18～19日 第1回 エコミュージアム・フォーラム

18日はシンポジウム&ワークショップ「風と光のフィエスタ」をグリーンパークにて。19日は講演とパネルディスカッション「エコミュージアムってなんだろう」、講師は大原一興（横浜国立大学助教授）。

## 9月4～8日 第16回 国連大学グローバル・セミナー

テーマは「21世紀における国連への挑戦」。基調講演はジェームズ・サタリン（米エール大学教授）及び、香西茂（大阪学院大学教授）。講師に西海真樹（関西学院大学助教授）、斎藤千香子（国連高等弁務官事務所副代表）、臼井律郎（国境なき医師団日本副代表）、ダニエル・ダキダエ（コムパス研究開発所長）、長谷川祐弘（国連開発計画東京事務所長）、中村修三（世界銀行東京事務所長）、吉川元（神戸大学教授）、アルブレヒト・シュナーベル（国連大学学術研究官）、伊藤光子（国際機関人事センター所長）。プログラム委員長は奥田和彦（国際大学教授）。

## 10月4日、11、5日、11月1、8日（全5回）葉山国際セミナー

「多宗教社会アジアを考える」をテーマとした5回の連続講演。講師は、久保田展弘（宗教学者）。

## 10月14日 食の文化セミナー「食文化」の最終回。

テーマは「勝つための食事-オリンピック・ワールドカップ」。講師は、菅泰夫（横浜マリノス栄養アドバイザー）、宮尾勉（湘南工科大学付属高校陸上部顧問）等。富士コカ・コーラボトリングと共催。

## 10月20～21日 かながわを生きた人々セミナー

テーマは「鈴木大拙の世界-世界をつなぐ人間像」。モデレータは、松田義幸（実践女子大学教授）。講師は大倉正之助（大倉流太鼓奏者）、加藤耕子（俳人）、小堀宗以（遠州流宗家副家元）、古田紹欽（松ヶ岡文庫長）、森清（山野美容芸術短期大学教授）。

## 11月18日 図書館総合展参加

東京国際フォーラムで。講師は松田義幸（実践女子大学教授）。講演テーマは「グレート・ブックスへの招待-いま、古典が新しい」。

## 11月24～26日 グレート・ブックス・セミナー

テーマは「対話を通してグレート・アイデアスを理解する」。特別講演は今道友信（東京大学名誉教授）。モデレータは松田義幸（実践女子大学教授）、パネリストは江藤裕之（長野県看護大学専任講師）、犬塚潤一郎（リベラルアーツ総合研究所研究主幹）他。

## 2001（平成13）年

### 1月19日、2月2、23日、3月9、29日（全5回） K-FACE / IGES 環境セミナー

地球環境戦略研究機関（IGES）と共催にて、地球環境問題の諸問題について考えるセミナーを神奈川中小企業センターにて開催。通しテーマは「循環型社会の創造に向けて-一家庭ゴミの視点から」。講師は、土居敬和（容器包装リサイクル協会）、出口蓮子（環境カウンセラー）他。小林淳（神奈川県環境農政部廃棄物対策課主幹）ら15名がパネルディスカッション。パネルのコーディネータは森脇昭夫（IGES 理事長）。

### 1月26日 マルチメディアフォーラム研究成果発表会「2001年 IT と教育-知と情報」

平成10、11年度に実施した「マルチメディア研究プロジェクト」の成果発表を地球市民かながわプラザで開催。講師は竹内啓（明治学院大学教授）、秋山仁（東海大学教育開発研究所教授）。パネリストに佐竹久典（神奈川県立総合高校教頭）、小林道夫（神奈川大学附属中・高教諭）。

## 1月27日、2月3日 湘南国際村オープンカレッジ（湘南国際村アカデミア）

湘南国際村内研究機関の協力を得て、学問分野の枠を超えた学術研究等の研究成果の普及・啓発を目的とする講座を開催。「コンピュータが拓く21世紀の考古学」及川昭文（総合研究大学院大学教授）、「ヒトゲノム—生活と歴史」高畑尚之（総合研究大学院大学教授）。「三浦半島の地域づくりのヒント」出口正之（総合研究大学院大学教授）、「地球温暖化問題最新情報」西岡秀三（地球環境戦略研究機関プロジェクトリーダー）。

## 2月3日 湘南国際村文化と音楽の集い

「マハーバーラタの詩劇：ワヤン・クリ（影絵劇）とガムラン演奏—アジアの風を感じる」。演奏は日本ワヤン協会。

## 2月9～10日 第1次第1回 21世紀かながわ円卓会議

第1次 統一テーマ「グローバリゼーション」の第1回「グローバリゼーションと新しい価値観」。

モデレータに鈴木佑司（法政大学教授）、問題提起役に樺山紘一（東京大学教授）、川勝平太（国際日本研究センター教授）、平野健一郎（早稲田大学教授）、福原義春（当財団理事長）。コメンテーターに大西直樹（国際基督教大学教授）、勝俣誠（明治学院大学教授）、金貞淑（2002年ワールドカップサッカー諮問委員）、小島明（日本経済新聞常務論説主幹）、リチャード・ダイク（ティーシーエス・ジャパン代表取締役）、高島肇久（国連広報センター所長）、堤清二（セゾン文化財団理事長）、橋口収（広島銀行相談役）、ブルース・バーネット（在日カナダ大使館参事官）、花岡信昭（産経新聞論説副委員長）、古田和子（慶應義塾大学教授）、堀出一郎（麗澤大学教授）、松田義幸（実践女子大学教授）、デーヴィッド・モリス（英オクスフォード大学日本事務所代表）、諸富徹（横浜国立大学助教授）、吉田文彦（朝日新聞論説委員）。

## 2月15日 K-FACE / IGES リーダーシップセミナー

テーマは「新時代のリーダーシップ」。横浜シンポジアにて開催。講師はグレン・パオレット（地球環境戦略機関（IGES）人材開発プログラムマネージャー）。

## 3月9日 サクセスフル・エイジング・セミナー

資生堂と共催にて開催。講師に畑尾正人（資生堂基盤研究センター薬剤開発研究所主任研究員）、新藤幸子（資生堂湘南支社ビューティー・コンサルタント）。

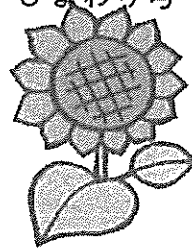
## 3月10日 日中比較文化講座

テーマは「トキの将来—危機に瀕する鳥類の日中保護協力」。日中友好会館と共催にて湘南国際村センターで開催。講師は石居進（早稲田大学教授）、李賛東（中国農業大学生物学院教授）。

## 3月30日 「湘南国際村から」 発行

湘南国際村国際村の歴史と共に村内の施設を紹介する冊子を当財団の編著により神奈川県から発行。





2000年7月



# face to フェイース face to フェイース face to フェイース

## K-FACEコラム

### 「エコミュージアムって何だろう」

～財団企画研究事業「三浦半島エコミュージアム構想」～

最近「エコミュージアム」という言葉を聞いたことはありませんか。ミュージアムとは博物館。では、エコは何のことでしょうか。エコロジー（生態学）？。エコロジーについての展示を建物に詰め込んだものがエコミュージアム？—いえいえ、そうではないのです。

従来型の博物館では、花を切り、きれいな装飾や詳細な説明を付けて、展示品として公開することはできません。その中に、花が育った「環境」そのものを持ち込むことはできません。なぜなら、建物を造って空間を断ち切ってしまうからです。

G.H.リヴィエールというフランス人は、「環境」を持ち込めない従来の博物館の問題点に対する提案として、「環境」そのものを博物館にしまおうと考え、エコミュゼ（＝エコミュージアム）が生まれました。

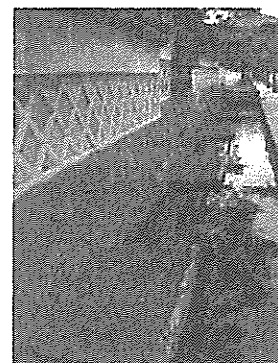
エコミュージアムは、「地域丸ごと博物館」とか「屋根のない博物館」といわれ、また「生活・環境博物館」と訳されることもあります。特に地域の住民と結びついていくという点が特徴です。

エコミュージアムでは、地域というのが大前提になり、そこに住む住民が主役になります。その地域の中には、人間と環境との関わりを表現する様々な産業・自然・文化遺産などがあります。エコミュージアムでは、各地域に存在する様々な遺産を学んで環境学習を進め、市民間のネットワークを生み出し、21世紀の地域社会のあり方をめざして、地域のアイデンティティと住民活力の創出を促進します。

このような市民主体のエコミュージアムの地域活動が三浦半島圏のどんな地域にどのような形で成り立つのか、またそれらの地域間の活動交流を進めるにはどのような条件づくりが必要なのか。湘南国際村周辺をモデル地区として、フィールド調査や分析を進めながら、三浦半島圏の状況についても考察し、三浦半島圏にどのようなエコミュージアムが想定されるか、その構想を提案していきます。

すでに「三浦半島エコミュージアム研究会」が発足し、2回の研究会がおこなわれています。本年度から4年間の予定で研究活動が進められ、研究者、教員、地域活動者、環境NGO、商工会、行政等様々な立場の方々が参加しています。国際村周辺モデル地区等のフィールド活動には、地元の市民グループ、ボランティア市民のみなさんの参加が不可欠です。

また、来たる8月19日には、発表・参加・交流の場として夏のイベント「風と光のフィエスタ」をおこないます。エコミュージアムに関するシンポジウム、ワークショップをはじめ、昨年開催して好評だったサイエンスレンジャーによる実験・工作教室、多彩な作品が集まった野外展示会など、盛りだくさんの内容で皆様をお待ちしております。湘南国際村の夏のイベントをお楽しみください。





## 2001（平成13）年度

### 【概況】

厳しい経済環境の中、経営の健全化に向け事業・組織など運営全般にわたり見直しを行うとともに、効率的な執行、経費の節減に努めた。組織的には年度の初めより部制を廃し簡素化した。

事業の実施状況では、企画研究事業として、三浦半島の地域環境資源を利用した環境学習プログラム研究に新たに取り組むとともに、グレート・ブックス・セミナーを公立図書館等との連携・協力により地域の生涯学習活動への実践・普及に向けて取り組む等の事業の一層の充実に努めた。

### 【研究】

（企画研究）

①「名著と学び」研究プロジェクト

研究名：名著セミナーの充実と地域展開に向けた調査研究

研究者：松田義幸（実践女子大学教授）

②「地球環境資源との共生」研究プロジェクト

a 三浦半島エコミュージアム研究

研究会：三浦半島エコミュージアム研究会

代表者：大原一興（横浜国立大学助教授）

b 地域環境資源学習プログラム研究

研究会：地域環境資源学習プログラム研究会

構成：環境教育 NGO、小中学校教諭等

### 【出来事】

5月3～4日 湘南国際村フェスティバル参加事業

自然環境資源を活かした野外展示「風と光のフィエスタ」。

5月22～23日 第8回 湘南国際村リブイン・セミナー

米国大使館東京アメリカンセンターと共催。テーマは「電子情報社会（その4）：知的所有権・個人情報・情報制限」。座長は関口和一（日本経済新聞編集委員）。講演はパメラ・スミス（米ボストンカレッジ助教授）、ヘンリー・グラドニー（HGMコンサルティング社長）、スティーブン・リビー（ニューズウィーク誌シニアエディター）。

7月12～13日 かながわを生きた人々セミナー

「澤田美喜－日本におけるボランティア精神の変化とゆくえ」。モデレータは出口正之（総合研究大学院大学教授）、講師は千住真理子（バイオリニスト）、藤村美津（エリザベスサンダースホーム園長）、早瀬昇（大阪ボランティア協会事務局長）、阿部志郎（横須賀基督教社会館館長）。

9月3～7日 第17回 国連大学グローバル・セミナー

テーマは「地球環境のゆくえ」。プログラム委員長は遠藤貢（東京大学助教授）。基調講演はミランダ・シュロイアス（米メリーランド大学政治学部助教授）、松井孝典（東京大学大学院教授）。講師は、A.H. ザクリ（国連大学高等研究所所長）、川島康子（国立環境研究所主任研究員）、大田宏（青山学院大学教授）、松下和夫（地球環境戦略研究機構副所長代行）、バンダナ・シバ（科学技術環境研究財団所長）、大田元（住友金属鉱山監査役）、臼井久和（フェリス女学

院大学教授)、鈴木基之(国連大学副学長)、伊藤光子(国際機関人事センター所長)。

#### 9月8日 グレート・ブックス・セミナー講演会

テーマは「古典を読む－Great Books Seminarの試み」。横浜市立中央図書館と共催にて、横浜市立中央図書館で開催。講師は松田義幸(実践女子大学教授)。

#### 9月～2月 グレート・ブックス・セミナー(全14回)

9月22、29日、10月6、13、20、27日、11月10、17日、1月19、26日、2月2、9、23日、意見交換会が3月9日。横浜市立中央図書館と共催にて、横浜市立中央図書館で開催。テーマは「《生命倫理》を考える」。モデレータは梅田誠(横浜市中央図書館長)、蟹澤成好(横浜市立大学名誉教授)、後藤英司(同助教授)、松山秀介(同名誉教授)、南睦彦(同教授)、鈴木良昭(元神奈川県立衛生短期大学学長)、宮原忍(元横浜市立大学看護短期大学部学長)。

#### 10月20日第2回 三浦半島エコミュージアム・フォーラム

テーマは「エコミュージアムとまちづくり」。モデレータは大原一興(横浜国立大学助教授)、講師に松田栄子(NPO朝日町エコミュージアム協会事務局長)、林公義(横須賀市自然・人文博物館副館長)、分科会座長に辻井善弥(大楠観光協会)、高橋正弘(地球環境戦略研究機関研究員)、金子和夫(SMBCコンサルティング)、林公義。

#### 11月10日 K-FACEフォーラム(プレ円卓)

テーマは「共生へのヒント－儒教文化とグローバリゼーション」。講師は杜維明(米ハーバード大学イェンチン研究所教授)の講演に続き、青木保(政策研究大学院大学教授)、樺山紘一(国立西洋美術館長)とパネルディスカッション。

#### 11月15～17日 グレート・ブックス・セミナー研究発表

グレート・ブックス・セミナーの定着と充実及び普及のため、東京国際フォーラムで開催の図書館総合展に中央公論新社と共催で、展示とフォーラムを実施。「自分磨きのエッセンス－良書がもたらす心の“美”」のテーマで、永井路子(作家)と福原義春当財団理事長が対談(15日)。

#### 11～12月 葉山国際セミナー(全4回)

統一テーマは「葉山からアジアへ－環太平洋を考える『多文化共生の大地：東南アジア』」。11月20日のテーマと講師は「身装から見た東南アジア」道明三保子(文化女子大学教授)。12月5日は「アンコール遺跡に見るアジアの世界観・宗教観」石澤良昭(上智大学教授)、15日は「食とアジア－食べてアジアを知る」グエン・ディン・ダオ、17日は「開発教育の現状から見る東南アジア」村井吉敬(上智大学教授)。

#### 12月1日 湘南国際村文化と音楽の集い

テーマは「天平の調べ－アジアの幻想より」。劉宏軍(天平楽府主宰)と同有志による演奏と舞。

#### 12月20日 鎌倉女学院国際セミナー

高校生に異文化を知り多文化共生社会への理解を深めてもらうために日帰り学習プログラムを実施。講演のテーマは「国際社会における国連の役割」、講師は高島肇久(国際連合広報センター所長)。ワークショップ「ハーフでなくダブルの生き方」はペンセタリン(東京外国語大学講師)、「世界は飢えている!？」は伊藤美幸(国連世界食糧計画)、「新・貿易ゲーム」は木下理仁(神奈川県国際交流協会)、「ネパールの識字教室－学ぶってなんだろう」は丸谷士都子(NPO地球の木)、「フィリピンボックス」は出口雅子(NPOピナツボ復興むさしのネット)。

2002（平成14）年

1月26～27日 グレート・ブックス・セミナー

テーマは「幸福について－暮らしの哲学としての『幸福論』」。講師は松田義幸（実践女子大学教授）。モデレータは松田、江藤裕之（清風英語学研究所長）、須賀由紀子（エンゼル財団主任研究員）。オブザーバーとして犬塚潤一郎（リベラルアーツ総合研究所研究主幹）、鈴木良雄（神奈川県立図書館図書課長）。アリストテレス「ニコマコス倫理学」、ホイジンガ「ホモ・ルーデンス」などを取り上げた。

1月～2月 湘南国際村アカデミア（全3回）

1月26日が湯川哲之（総合研究大学院大学教授）による「物理法則と自由意思－量子力学の世界観」。2月2日に松尾直樹（地球環境戦略研究機関上席研究員）による「地球温暖化問題に関する世界の現状について」。同23日に松本吉泰（総合研究大学院大学教授）による「固体表面－デビルの贈りもの」の講演。

2月1～2日 第1次第2回 21世紀かながわ円卓会議

第1次の統一テーマ「グローバリゼーション」の第2回「グローバリゼーションの進展と市民社会の役割」。

モデレータは樺山紘一（国立西洋美術館長）、問題提起役は小島朋之（慶應義塾大学教授）、片倉もとこ（中央大学教授）、五十嵐武士（東京大学教授）、福原義春（当財団理事長）、鈴木佑司（法政大学教授）。コメンテーターに犬塚潤一郎（リベラルアーツ総合研究所研究主幹）、大西直樹（国際基督教大学教授）、住川治人（朝日新聞論説副主幹）、リチャード・ダイク（ティーシーエス・ジャパン代表取締役）、高島肇久（国連広報センター所長）、竹村真一（東北芸術工科大学助教授）、田島英一（慶應義塾大学助教授）、田中弥生（国際協力銀行プロジェクト開発部参事役）、出口正之（総合研究大学院大学教授）、永淵康之（名古屋工業大学助教授）、花岡信昭（産経新聞論説副委員長）、福川伸次（電通総研所長）、牧田東一（トヨタ財団プログラムオフィサー）、宮武公夫（北海道大学助教授）、村田雄二郎（東京大学大学院助教授）、諸富徹（横浜国立大学助教授）。

2月18日 環境NPO交流セミナー

地球環境戦略研究機関（IGES）と共催にて、神奈川中小企業センターで開催。テーマは「環境問題最前線」。基調講演は松尾直樹（IGES上席研究員）。

3月12日 環境NPO交流セミナー

地球環境戦略研究機関（IGES）と共催にて、神奈川中小企業センターで開催。テーマは「NPOと学校－次世代に伝えたい環境問題」。基調講演は高橋正弘（IGES研究員）。

3月21日 日中比較文化講座

テーマは「漢方医学と生活習慣病」。講師は汪先恩（中国同済医科大学中西医結合研究所副教授）。その後、萩原達雄（順天堂大学助教授）との対談。

3月22日 企業向け環境セミナー

地球環境戦略研究機関（IGES）と共催にて、神奈川中小企業センターで開催。テーマは「企業の環境マネジメント」。基調講演は神田康宏（IGES主任研究員）。

K-FACE ニュースレター

# Face to フェイス



—湘南国際村から発信—  
21世紀かながわ円卓会議

ハイライト:

- 湘南国際村から発信  
寄稿「21世紀かながわ円卓会議への期待」
- 三浦半島エコミュージアム構想  
地域市民グループからの寄稿
- 「風と光のフェスタ」開催!
- 寄稿感想文「グレート・ブックス・セミナーに参加して」
- セミナー実施報告
- 新シリーズ 連載開始!  
「湘南国際村四季～私の歳時記」
- K-FACE インフォメーション



人により、地域により、国により違っているはずの世界に、ITや市場経済などの共通のルールや尺度が当てはめられてゆく過程の諸現象を「グローバルゼーション」といいます。

「21世紀かながわ円卓会議」は3年計画で、その衝撃、その作用・副作用を考えてきました。今年は私たちが属する市民社会にどのような影響が出て、それが国や地球社会にどんな波紋を起こすか、について、2月1～2日、学者、ジャーナリストなどの識者に集まって議論していただきました。

「グローバルゼーションの進展と市民社会の役割」をテーマに、5つのセッ

ション①アジアの状況(小島朋之・慶大教授)、②イスラム社会(片倉もとこ・中大教授)、③アメリカ市民社会(五十嵐武士・東大教授)、④市民社会の進展(福原義春・当財団理事長)、⑤グローバルゼーションとローカリゼーション(鈴木佑司・法大教授)を行ったところ、いずれも時間が足りないほど議論百出。コメントターをはじめ、多くの参加者から、とても刺激的で有意義な会議であり、来年が楽しみであるとの期待のメッセージが寄せられています。

今回の円卓会議でのコメントターのおひとりに、寄稿いただきました。

「21世紀かながわ円卓会議への期待」 慶応義塾大学 助教授 田島英一

思えばベリーがこの三浦半島に現れて、約150年が経過している。以降日本は、世界資本主義及び米国という巨人と相対せざるをえなくなった。その三浦で「グローバルゼーション」を語る円卓会議が開催されるというのも、いささか因縁めいたものを感じる。

「グローバルゼーションの進展と市民社会の役割」と題した2002年の円卓会議は、モデレーターに樺山紘一氏、基調講演者に小島朋之氏ほか4名を迎え、その他17名のコメントターとの間で活発な議論が交わされた。イシューはアジア太平洋地域協力、安全保障、イスラム、米国市民社会など多岐にわたり、学問領域を越えた、有意義な討議の場を持てたように思う。1日目の討議は午後5時30分に終了したが、実は夕食後、K-FACE職員の皆さんも交え、インフォーマルな意見、情報交換が深夜まで続いていた。大学や通常の学会にあつては、得がたい啓発の機会であった。

ただし、その啓発が我々個人の財産にとどまる限り、円卓会議の意義は半減してしまうように思われる。この会議は、昨年11月に行われた、杜維明氏(ハーバード大学

教授)の講演「新儒教社会とヒューマニズム」をアジアの論点の一つとして受ける形で催されたものだ。杜氏は新儒家の立場から、さまざまな社会活動における政治意識・公共的参加意識をもつ非エリート知識人(Public Intellectual)の存在の重要性を訴えられた。いわば、「21世紀市民総『士大夫』化のすすめ」である。しかし、それを受けての円卓会議には、(学識経験者、財団関係者以外で、という意味での)一般市民からの参加が、あまりにも少ない。また、行政の関与が感じられないのも、やや気になった点ではある。神奈川県は、「民際外交」という画期的理念を生んだ国際化先進県であったはずだ。このような議論を、たとえば県政にどう反映させてゆくか、といった発想が、もう少し前面に出てよい。

産学の代表者を多くかかえるこの円卓会議が、市民社会と行政をどうまきこむか。たとえばパネリストに行政代表、NGO代表を加えるといった工夫、WEB上で討議内容を公開し、広く意見を募るといった手法も考えられよう。地域一丸となった、世界へのメッセージ発信に向け、この円卓会議には、まだまだ飛躍が期待できるのである。



21世紀かながわ円卓会議コメントター  
慶応義塾大学 湘南キャンパス  
総合政策学部 理論言語学 中国地域研究  
田島英一 助教授

## K-FACE研究プロジェクト「エコミュージアム研究」について

三浦半島内で、新しく生まれつつある地域の市民活動の動きを捉えて支援し、半島全体でのエコミュージアム構想の提案を目指しています。今回は、半島西部の葉山と大楠地域のモデル地域で里山の自然や歴史などを活かしながら、市民が主体となって取り組んでいる二つのまちづくり活動をご紹介します。

「里の魅力をみんなで体験-くれ竹の郷葉山エコミュージアムワークショップ」  
葉山町 くれ竹委員会委員 江成卓史

葉山の里の生活文化を体験しようと、昨年度の海辺の魅力さがしに続き、12月から3月にかけて3回の「くれ竹の郷葉山 エコミュージアムづくりワークショップ」を開催しました。3月初旬には、4グループに分かれて炭焼き・竹細工・こんにゃくづくり・畑作業を体験しました。その後、全員が集まって成果を披露し、講師の農家の方々からも講評や感想をもらい、風土に根ざす暮らしにふれるもうひとつの地元の魅力を分かち合いました。

町民が理解し協力し合って、先人の努力を受け継ぎ、地域の豊かな暮らしを築いていきたいと願うころざしが、エコ

「大楠地域をまるごと博物館」再発見おおくすの会 辻井善彌

大楠地域は長者ヶ崎から佐島に至る海岸線とその後背にせまる大楠山へ連なる丘陵部からなる自然豊かな地です。また、歴史的、伝統的要素を色濃く残している所でもあります。これらの環境資源や社会資源を展示物と見なし、大楠地域全体を博物館にしてしまおうという、大楠エコミュージアムの活動がスタートしました。

当面、大楠地域の様々な資源を調査し、それを顕在化(マップ化など)していこうと、「再発見おおくすの会」(仮

ミュージアムの土台となるのではないのでしょうか。それを形にしていくには、想いを抱く私たち自身が地元の魅力を楽しみつつ出会いや学びを重ね、町民主体の活動の輪が広がっていくことが大切です。

今回のワークショップは、そのための場と機会を提供し、さまざまな活動の始まりと交流を促すきっかけとなることでしょう。「くれ竹の郷葉山」構想が、三浦半島周辺の活動とも連携しながら、葉山の地と人々のつながりを深める舞台となることを願っています。

称)をつくり、活動をしながら有志者を募っていく計画です。その第一回の活動が3月30日(土)に大楠山、前田川を探るワークショップとして実施されます。第二回目は4月に秋谷地区を探る予定となっております。このように1か月に一度程度の活動を続けていこうと、現在、主だったもので、年間計画を立案中です。

これらの活動では地域住民を始め、小・中学生、有識者など広く参加していただき、互いに交流することも大切なことと考えています。

エコミュージアム研究とは：

エコミュージアムによる三浦半島の豊かな地域資源を調査・保全・活用する活動を通して、市民活動や環境学習、生涯学習などの可能性、また市民・企業・行政の協働によるまちづくりの可能性を提案し、21世紀の地域社会のあり方について発信する研究事業です。

この研究活動の特徴としては、構想を検討する過程において、市民グループ・NPOのネットワークづくりや学校と地域の連携の仕組みづくり、フォーラムや学習会による団体活動情報・ノウハウ等の情報支援を行い、市民による自立した活動の展開を促すことにあります。

☆14年度フォーラム開催！☆

期 日 11月30日(土)  
場 所 湘南国際村センター  
国際会議場  
内 容 「子どもとエコミュージアム」



### 『風と光のフィエスタ』

2万人のお客様を迎える5月のゴールデンウィークに開催する「湘南国際村フェスティバル」。K-FACEでは湘南国際村グリーンパーク(野外展示とワークショップ)と第6研修室(三浦半島市民の部屋)において、地域のみなさまの日ごろの活動表現の場を提供します。

あなたの所属するサークルや、グループ活動の成果を発表し、参加グループ同士、あるいは来場する地域住民の方々と交流できるこの機会を、ぜひご活用ください。



バックアップします!あなたの市民活動

コンタクトポイント  
(エコミュージアム研究  
プロジェクト)

・TEL→0468-55-1821  
(担当：柳田)

・電子メール  
→eco@k-face.org

## 『湘南国際村四季～私の歳時記』



### 「国際村の四季」

今号から、この欄は湘南国際村の各研究・研修施設の皆様に、ご執筆をお願いすることにしたいと思います。四季を存分に楽しめる国際村には、皆様のお好きなものや思い出の風物も多いと存じます。テーマ、文体など、全く自由をお願いいたします。とりあえずご挨拶代わりに私からスタートさせていただきます。

(かながわ学術研究交流財団/K-FACE 専務理事 富岡 隆夫)

ひょっとすると、かながわ学術研究交流財団の初代専務理事であった宇野喜三郎さんのご功績ではないかと思うが、専務理事室から見える富士山は、村一番、と自慢してもいいだろう。四月上旬、すでに村の名物となった「富士に落ちる夕日」が見られる。

三浦半島は、いわば文学の半島である。横光利一の「春は馬車に乗って」の葉山、徳富蘆花の「不如帰」や国木田独歩の「欺かざるの記」は逗子の、それぞれ海岸なしには生まれなかったろう。北原白秋(作曲梁田貞)の「城ヶ島の雨」も忘れがたい。

川上眉山も名文「相模湾の落日」で、夕日の美しさを永遠に残した。「日の落ちたるのちは、富士もほどなく蒼ざめ、やがて西空の金は朱となり、燻(くすぶ)りたる樺となり・・・」

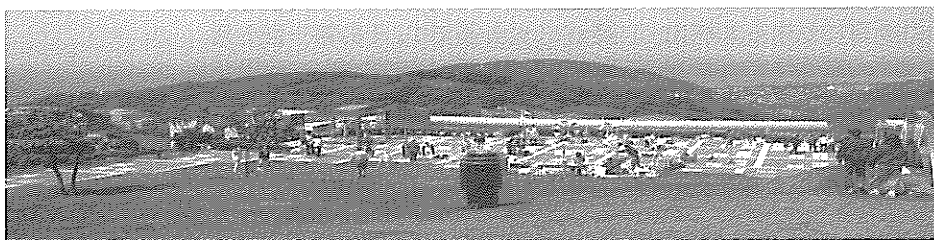
四季折々  
春

## K-FACE インフォメーション

K-FACEホームページもご覧下さい。

<http://k-face.org/>

広報についてのお問い合わせTEL:0468-55-1822



## 湘南国際村「風と光のフィエスタ」5月3～6日に開催！

ゴールデンウィーク、国際村は「湘南国際村フェスティバル」で賑わいます。コンサート、講演会に加えて物産展や屋台村など盛りだくさんですが、K-FACEでは、「風と光のフィエスタ」と銘打って、相模湾から江ノ島、富士山を見渡せる標高182mの湘南国際村グリーンパークを会場にした野外展示イベントと三浦半島で活躍する市民グループの活動発表の室内イベントを開催します。

- ①5月3～4日：眺め抜群の公園を会場にした野外展示、市民グループのワークショップなど
- ②5月3～6日：地域の市民グループなどによるパネル展示や活動交流「三浦半島市民の部屋」の二本立てです。今年の5月の連休は、ぜひあなたも湘南国際村へ足をお運びください・・・



### K-FACEニュースレター “Face to フェイス” 14号

財団法人かながわ学術研究交流財団(K-FACE)

〒240-0198 神奈川県三浦郡葉山町上山口1560-39 湘南国際村センター内  
コンタクトポイント 電話→0468-55-1820～1822 ファックス→0468-58-1210  
ホームページ→<http://k-face.org/> 電子メール→[mail@k-face.org](mailto:mail@k-face.org)

## 2002（平成14）年度

### 【概況】

厳しい経済環境の中、経営の健全化に向け事業・組織など運営全般にわたり見直しを行うとともに、効率的な執行、経費の節減に努めた。

事業は引き続き「研究」「人材育成」「交流」の3事業体系のもとに各事業の一層の充実に努めた。

### 【研究】

（企画研究）

#### ①「名著と学び」研究プロジェクト

研究名：名著セミナー普及・定着のための新規プログラム開発と地域展開に向けたモデレータ養成等の調査研究

代表研究者：松田義幸（実践女子大学教授）

#### ②「地球環境資源との共生」研究プロジェクト

##### a 三浦半島エコミュージアム研究

研究会：三浦半島エコミュージアム研究会

代表者：大原一興（横浜国立大学助教授）

##### b 地域環境資源学習プログラム研究

研究会：地域環境資源学習プログラム研究会

代表者：高橋正弘（地球環境戦略研究機関研究員）

構成：環境教育 NGO、市民グループ

### 【出来事】

#### 5月3～6日 湘南国際村フェスティバル参加事業

自然環境資源を行かした野外展示「風と光のフィエスタ」。

#### 6～12月 鎌倉女学院国際セミナー（全5回）合宿を取り入れた初年度

6月13日、「入門講座」を鎌倉市由比ヶ浜の鎌倉女学院で、講師は箱崎律香（国連難民高等弁務官事務所広報官）。続いて7月15～16日（1泊2日）、湘南国際村センターで高1国際セミナー。ワークショップと講演、講師は木下理仁（神奈川県国際交流協会）、岡あかり（国連世界食糧計画）、山口史里、丸谷士都子（「地球の木」）、八木亜紀子（ピナツボ復興むさしのネット）、中村絵乃（開発教育協議会）、渡邊奈美子／佐藤信一／中山実生（国際子ども権利センター）、田中博（ヒマラヤ保全協会事務局長）。続いて10月19日、同校で土曜講座「もしも世界が100人の村だったら」磯野昌子（東和大学国際研究所専任講師）。また11月17日同校で英語講座「ネパールの貧困と環境破壊」ビシュヌ・バンダリ（地球環境戦略研究機関（IGES）上席研究員）、12月13日には、進路講演会「人間の安全保障と現代国際社会」旦祐介（東海大学教授）。

#### 8月19～20日 第9回 湘南国際村リブイン・セミナー

米国大使館東京アメリカンセンターと共催。テーマは「グローバリゼーション：機会と挑戦」。講演は、エドワード・グラハム（国際経済研究所シニアフェロー）、アラン・トネルソン（教育財団米国産業ビジネス評議会研究員）、グレン・フクシマ（前在日米国商工会議所会頭）、谷口誠（早稲田大学教授、現代中国研究所所長）、座長は大林守（専修大学教授）。

## 9月2～6日 第18回 国連大学グローバル・セミナー

「なぜ人は国境を越えるのか」。基調講演は宮島喬（立教大学教授）、南塚信吾（千葉大学教授）。講師に伊豫谷登士翁（一橋大学教授）、マリア・シンシア・R.B.バウティスタ（フィリピン大学哲学部教授）、岡真理（京都大学人間学部助教授）、田中博（ヒマラヤ保全協会事務局長）、ハラルド・クラインシュミット（筑波大学教授）、滝田賢治（中央大学教授）、四宮信隆（法務入国管理局審議官）、ファルーク・アザム（国連移住機関バンコク地域事務所代表）、ディエゴ・ロゼロ（国連難民高等弁務官事務所東京首席法務官）。プログラム委員長は大島美穂（津田塾大学教授）。

## 9月14日 K-FACE フォーラム（プレ円卓）

「アジア文化のアイデンティティー—グローバル時代の日韓中」をテーマに、講師は李御寧（韓国初代文化相）。モデレータ樺山紘一（国立西洋美術館長）。問題提起役は服部民夫（東京大学教授）、岡本真佐子（政策研究大学院大学教授）、田島英一（慶應義塾大学助教授）。

## 10月23日 地球環境セミナー 第1回（全4回）

地球環境戦略研究機関（IGES）と共催で、地球環境問題を考えるセミナーをIGESで開催。テーマは「地域社会の視点から考える地球環境サミット」。基調講演は大塚隆志（IGES 研究員）。

## 10月26～28日 グレート・ブックス・セミナー

江藤裕之（長野県看護大学外国語講座助教授）の講演「言語・思考・人間について—ロゴスの学をめざして」に続き、松田義幸（実践女子大学教授）、犬塚潤一郎（リベラルアーツ総合研究所研究主幹）等とのパネルディスカッション。

## 11月12日 地球環境セミナー 第2回（全4回）

地球環境戦略研究機関（IGES）と共催で、地球環境問題を考えるセミナーをフォーラムよこはまで開催。テーマは「地球温暖化問題を考える—COP8最新レポートと国内対策の今後の動向について」。基調講演は二宮康司（IGES 研究員）。

## 11月20日 図書館総合展参加

東京国際フォーラムで開催の図書館総合展に中央公論新社と共催で展示とフォーラムを実施。講演テーマは「コモンセンスからの再出発—教養とはなにか」。講師は中村雄二郎（明治大学教授）。

## 11～12月 葉山国際セミナー（全5回）

統一テーマは「南太平洋の人々と暮らし—海と島に生きる」。11月27日、12月5、14、17、24日の計5回。各回のテーマと講師は：

第1回 「海洋文化の源流」内田正洋（シーカヤッカー）

第2回 「南太平洋の民族・芸能・文化」山本真鳥（法政大学教授）

第3回 「インドネシア料理に挑戦」上川礼子（日本ワヤン協会）と山根アスリ

第4回 「ワヤンの芸術」松本亨（日本ワヤン協会主宰）

第5回 「南太平洋あっちこっち」青木公（元朝日新聞シドニー支局長）

## 11月30日 第3回 エコミュージアム・フォーラム

平成12年度から実施している三浦半島エコミュージアム研究の中間成果報告をエコミュージアム・フォーラムで実施。テーマは「エコミュージアムと地域の学びについて」。講師は大原一興（横浜国立大学助教授）。



## 12月7日 文化と音楽の集い

「ラーガとターラーインド古典音楽と舞踊の楽しみ」。北インド古典音楽集団「ビシュヌプール」の加藤貞寿、瀬川由希夫、森山繁、小林祐介、バンチャ・ラマ、クンジュビハリ、高橋薫子の演奏と舞踏。

## 12月24日 地球環境セミナー 第3回 (全4回)

地球環境戦略研究機関 (IGES) と共催で、地球環境問題を考えるセミナーをフォーラムよこはまで開催。テーマは「地域社会づくりにおけるエコツーリズムの可能性」。基調講演は梅津ゆりえ (資源デザイン研究所)。

## 2003 (平成15) 年

### 1月22日 地球環境セミナー 第4回 (全4回)

地球環境戦略研究機関 (IGES) と共催で、地球環境問題を考えるセミナーを IGES で開催。テーマは「環境マネジメントシステムの改善に向けて - ISO14001の導入事例をもとに」。基調講演は穂積克宏 (神奈川県環境農政部環境計画課)。

### 2月8日 日中文化講座

日中友好会館と共催。テーマは「日本食のルーツ? - 中国雲南料理の魅力と『医食同源』」。講師は徐耀華 (雲南料理「御膳房」代表取締役)、木村春子 (聖徳大学講師)。

### 3月7~8日 第1次第3回 21世紀かながわ円卓会議

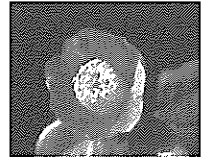
第1次の統一テーマ「グローバリゼーション」の第3回「グローバリゼーションのゆくえと日本」。

モデレータは樺山紘一 (国立西洋美術館長)。講師は原洋之助 (東京大学東洋文化研究所教授)、小杉泰 (京都大学大学院教授)、毛利勝彦 (横浜市立大学助教授)、福川信次 (電通顧問)。総括討議講師は五十嵐武士 (東京大学法学部教授)、鈴木佑司 (法政大学法学部教授)、福原義春 (当財団理事長)。コメンテーターは伊木和子 (上野学園大学教授)、伊藤隆 (日本財団海洋船舶部員)、大西直樹 (国際基督教大学教授)、勝俣誠 (明治学院大学教授)、姜英之 (東アジア総合研究所所長)、小松久男 (東京大学大学院教授)、坂井健男 (三桜工業顧問)、リチャード・ダイク (ティー・シー・エス・ジャパン代表取締役)、滝田賢治 (中央大学教授)、田島英一 (慶應義塾大学助教授)、田中弥生 (国際協力銀行プロジェクト開発部参事役)、出口正之 (総合研究大学院大学教授)、永淵康之 (名古屋工業大学助教授)、橋口収 (広島銀行特別顧問)、花岡信昭 (産経新聞論説副委員長)、林雄二郎 (日本フィランソロピー協会会長)、伴野文夫 (元 NHK 解説委員)、福井憲彦 (学習院大学教授)、船橋晴雄 (作家)、宮武公夫 (北海道大学教授)、若宮啓文 (朝日新聞論説主幹)。

### 3月21日 湘南国際村アカデミア特別講演

総合研究大学院大学と共催にて総合研究大学院大学で開催。テーマは、「私の半生 - 科学者として女性として」。講師は太田朋子 (国立遺伝学研究所名誉教授・総合研究大学院大学教授)。

K-FACE ニュースレター



椿号

# Face to フェイス

## 三浦半島を“まるごと博物館”に

### ハイライト:

- 三浦半島エコミュージアムフォーラム
- グレートボックス研究会
- グレート・ボックス・セミナーに参加して
- シリーズ連載 (4)  
「湘南国際村四季～私の歳時記」
- K-FACE インフォメーション

エコミュージアムとは、地域のさまざまな資源を保全し、住民が主体となり進めていくまちづくり活動です。K-FACEでは交流の場づくり、地域活動の支援などに取り組みながら、広域の視点から新たな市民主体の地域社会づくりの形を描く「三浦半島エコミュージアム」構想の研究に取り組んでいます。11月開催のフォーラムでは活発に意見が交わされました。

■11月30日第3回「三浦半島エコミュージアムフォーラム」開催!!  
今年「地域の学びとエコミュージアム」をテーマとして、まず大原一興氏(日本エコミュージアム研究会)による「エコミュージアムにとって学習とは、コミュニティとの様々な関係性から世代を超えて学びあい、地域をつくっていく力を育むものである」との講演で始まりました。

次に「おおくすエコミュージアムの会」「葉山エコミュージアム」「すかっこセミナー」の3つの団体からエコミュージアム活動の紹介が行われ、その後4つの分科会討議とワークショップが行われました。

第1分科会「地域の子どもの学び」: 学校への協力の視点だけではなく、地域自体を子ども達の学びの場にすることが議論され、フリースクールなど大人と子どもの新しい関係性の問題なども提起されました。

第2分科会「学習の担い手と博物館」: 地域には博物館や市民グループなど、さまざまな学びの主体が存在していますが、その間をつないでいく必要性和現実的な難しさが意見交換され、今後の課題となりました。

第3分科会「広域ネットワークと情報発信」: 活動団体は何のためにネットワークするのかを問う問題提起に沿って、ネットワークとは不足を

補い合うもの、個々の活動やコアになる施設がしっかりしなければならない、など議論が続きました。

第4分科会「観光・地場産業活性とまちづくり」: 地域の豊かな自然を守り、産業を活性化していくには、地域の視点、地域内での人や資金の循環などの重要性について議論されました。また観光に関する環境と開発などについて、今後につながる討議の場となりました。

ワークショップ「エコミュージアムってなんだろう」: 参加者一人ひとりが理想のエコミュージアムを絵を描きながら、分かりにくい概念を整理した結果、自分達の地域に対するそれぞれの想いが重なり合って、浮かび上がってくるものが「エコミュージアム」の姿ではないだろうか確認され、参加者の共感を得ていました。

フォーラムの詳細については、「三浦半島エコミュージアムかわら版」第2号(2003年1月発行予定)でご報告します。

### ■ホームページを開設!

K-FACEでは、パソコン上で地域のさまざまな資源・活動を共有し、地域間の交流を図ることを目的としたホームページを開設しました。今後皆さんの活動や地域の情報をいただきながら情報の発信拠点として活動していきますので、ご期待下さい。

■コンタクトポイント  
(事業担当: 柳田、清水)  
・Tel→0468-55-1821  
・電子メール  
→eco@k-face.org

■三浦半島エコミュージアムホームページを開設しました。ぜひ訪れてみてください!



<http://k-face.org/eco/index.html>

## 2003（平成15）年度

### 【概況】

（株）湘南国際村協会と村センターを協同運営するなど新しい経営スキームのもとで、湘南国際村における事業活動の活性化や国際交流拠点づくりをめざし先進的な研究、国際的な視野を持つ人材の育成などの諸事業を進めた。

事業は引き続き「研究」「人材育成」「交流」の3事業体系のもとに取り組み、第1回ミュージアム・サミットやシルクロード平山郁夫コレクション展示事業等の新規事業を実施し、その充実を図った。

### 【企画研究】

#### ①「名著と学び」研究プロジェクト

研究名：『「名著と学び」研究プロジェクトの成果の総括とグレート・ブックスの将来展望』

代表研究者：松田義幸（実践女子大学教授）

#### ②「地球環境資源との共生」研究プロジェクト

##### a 三浦半島エコミュージアム研究

研究会：三浦半島エコミュージアム研究会

代表者：大原一興（横浜国立大学助教授）

##### b 地域環境資源学習プログラム研究

学習プログラムづくりの支援、ワークショップの開催、『三浦半島の植生ガイド』作成。

### 【出来事】

#### 4月1日 基本財産の構成を変更

湘南国際村センターの建物と施設の一部を取得等。

#### 4月2日～12月23日 第一期シルクロード平山郁夫コレクション展

平山郁夫がシルクロードにおいて長年にわたり収集した仏教彫刻などの文化遺産を展示・紹介し、併せてセミナーを開催することにより日本と国際社会、とりわけアジア諸国との相互理解を深める機会を提供し、国際交流拠点作りの推進を図った。仏像や浮彫、陶器、土器、ガラス器、土偶、俑等73点をガンダーラ美術・ギリシャ・地中海東岸地方・中国等7つのコーナーを設けて展示。

#### 5月3～5日 湘南国際村フェスティバル参加事業

「もっと知りたい！湘南国際村」をテーマにパネル展示とワークショップ。

#### 5月31日 三浦半島エコミュージアム交流シンポジウム

テーマは「地域をつなぐエコミュージアム」。基調講演はピーター・デーヴィス（英ニューカッスル大学教授）。当財団が研究報告。モデレータは大原一興（横浜国立大学助教授）。活動報告者は岸しげみ（茅ヶ崎野外自然史博物館）、江成卓史（葉山生活文化協働事業委員会副委員長）、柴田敏隆（元横須賀市博物館学芸員）。5月30日にエクスカッションを実施。

#### 6～12月 鎌倉女学院国際セミナー（全5回）

6月13日「入門講座」を鎌倉市由比ヶ浜の鎌倉女学院で、講師は青年海外協力協会の大森岳と牧島恵。続いて6月15～16日（1泊2日）、湘南国際村センターで高1国際セミナー。ワークショップと唐津聖子（OXFAM インターナショナル日本事務所代表）の講演。続いて12月9

日同校で国際学講座、講師は且祐介（東海大学教授）。12月13日同校で土曜講座「もしも世界が100人の村だったら」、講師は磯野昌子（東和大学国際研究所専任講師）。また12月17日同校で英語講座、講師はビシュヌ・バンダリ（地球環境戦略機関上席研究員）。

#### 9月1～5日 第19回 国連大学グローバル・セミナー

テーマは「人間の安全保障は国家を越えるか－21世紀国際社会の課題とは」。基調講演として緒方貞子（前国連難民高等弁務官）が「人間の安全保障」について。このほかの講演者は勝俣誠（明治学院大学教授）、アルフレッド・ルバン（Gaston Z.Ortigas 平和研究所プログラムディレクター）、ニルマラ・バンディット（ナブ・マハラシュトラ・コミュニティ財団専務理事）、ラメシュ・タクル（国連大学副学長）、宮坂直史（防衛大学助教授）、田坂興亜（アジア学院校長）。プログラム委員長は且祐介（東海大学教授）。

#### 9月28日、10月26日、11月24日、12月21日 シルクロード文化交流セミナー（全4回）

平山郁夫コレクション展示開始を記念して、「日本人の文化の源流・シルクロードの魅力を探る」をテーマに全4回のセミナーを開催。講師は前田たつひこ（平山郁夫シルクロード美術館学芸部長（2回））、宮下佐江子（古代オリエント博物館研究員）、勝木言一郎（東京文化財研究所主任研究員）。

#### 9月30～10月1日 第10回 湘南国際村リブイン・セミナー

米国大使館東京アメリカンセンターと共催。テーマは「日米 NGO / NPO 専門家会議：21世紀の新しい市民社会のために」。講師はサラ・ニューホール（PACT 理事長）、カオ・オー（ニューヨーク・アジア系アメリカ人連盟事務局長）、黒川千万喜（ジャパン・プラットフォーム事務局長）、川北秀人（人と組織と地球のための国際研究所代表）。座長は原田勝広（日本経済新聞社編集委員）。

#### 11月20、27日、12月2、10日 葉山国際セミナー（全4回）

葉山町教育委員会と共催。テーマは「シルクロードの伝統文化と現代」。講師は久保田展弘（アジア宗教文化研究所主宰（2回））、T.M. ホフマン（武蔵野音楽大学講師）、廣瀬陽子（慶應義塾大学講師）。

#### 11月29～30日 グレート・ブックス・セミナー

テーマは「日本のグレート・ブックスを読む－世界文学としての源氏」。講演の講師は岡野弘彦（國學院大学名誉教授）。モデレータは松田義幸（実践女子大学教授）、江藤裕之（長野県看護大学助教授）、犬塚潤一郎（リベラルアーツ総合研究所主幹）、須賀由紀子（エンゼル財団主任研究員）。

#### 12月6日 湘南国際村文化と音楽の集い

テーマは「ペルシャの響き－遙かなるシルクロードの調べ」。出演はサントゥール演奏家のプーリー・アナビアン、バーラム・サーランギ、ダリア・アナビアン、河村麻衣。

### 2004（平成16）年

#### 1月15日 地球環境セミナー 第1回（全3回）

地球環境戦略機関（IGES）と共催にてフォーラムよこはまで開催。テーマは「地球温暖化防止への取組み－温室効果ガス削減に向けて」。講師は、二宮康司（IGES 気候政策プロジェクト研究員）。

#### 1月31日 第4回 三浦半島エコミュージアム・フォーラム 平成12年度から4回の最終回

テーマは「三浦半島エコミュージアム構想について」。モデレータは大原一興（横浜国立大

学助教授)。活動報告者は野崎章子(おおくすエコミュージアムの会)、森田昌明(葉山まちづくり協会)、雨宮郁夫(エコリーダーズ会議まちなみと緑の創造部会)。コメンテーターに田中喜美子(NPO 多摩川エコミュージアム)、丸山好一(NPO 北はりま田園空間博物館)。

#### 2月4日 地球環境セミナー 第2回(全3回)

地球環境戦略研究機関(IGES)と共催にてフォーラムよこはまで開催。テーマは「環境教育推進のための社会関係づくり」。報告者は、中端章博(IGES 環境教育プロジェクト研究員)、吉武美保子(NPO 法人よこはま里山研究所)、神谷由紀子(NPO 法人みどりのゆび)。

#### 2月7日 日中文化講座

日中友好会館と共催。テーマは「中国茶の多様な世界」。講師は曾徳深(横浜華僑総会会長)、佐野由美子(カメラリアエンタープライズ代表取締役)。

#### 3月9日 地球環境セミナー 第3回(全3回)

地球環境戦略研究機関(IGES)と共催にて神奈川中小企業センターで開催。テーマは「アジアにおける都市環境問題」。報告者は井村秀文、クリスティン・ピアソン、常杪(IGES 都市環境管理プロジェクト)。

#### 3月20~21日 第1回 ミュージアム・サミット

湘南国際村10周年記念事業。テーマは「21世紀ミュージアム・サミット—文化の継承と創造」。日本経済新聞社、国際交流基金と共催にて、3月19日の日経ホールでの講演会に続いて湘南国際村で開催。総監修と司会は高階秀爾(西洋美術振興財団理事長)。基調講演はフランソワーズ・カシャン(前フランス美術館群総局長)、ロナルド・デ・レーウ(アムステルダム国立博物館長)、ジェームズ・クノー(コートールド美術研究所館長)。これに加えてキャサリン・リー・リード(クリーヴランド美術館長)がビデオ映像により講演。討議者には芳賀徹(京都造形芸術大学学長)、岩淵潤子(静岡文化芸術大学助教授)、樺山紘一(国立西洋美術館長)、蓑豊(大阪市立美術館長)、岡真理子(国際交流基金芸術交流部長)、酒井忠康(神奈川県立近代美術館長)、竹田博志(日本経済新聞編集委員)、建畠哲(多摩美術大学教授)、堤清二(セゾン文化財団理事長)、植木浩(ポーラ美術館長)、雪山行二(横浜美術館長)、福原義春(当財団理事長)。

なお講演と討議の内容は、2006年開催の第2回ミュージアム・サミット分と合わせ、『ミュージアム・パワー』のタイトルで慶應義塾大学出版会から2006年11月10日出版。

#### 3月28日 湘南国際村アカデミア

総合研究大学院大学と共催にて、同大学で開催。テーマは「DNA から見た日本人の起源—おとことおんなの来た道」。講師は宝来聡(同大学教授)。

#### 3月29~31日 第1回 インカレ国際セミナー「東アジア共通の家」

県内を中心に9大学が参加。企画委員会委員長は滝田賢治(中央大学教授)。基調講演は、猪口孝(東京大学東洋文化研究所教授)、六鹿茂夫(静岡県立大教授)。講演は王建鋼(中国月刊「経済」高級記者)。講師は滝田賢治(中央大学教授)、大芝亮(一橋大学教授)、押村高(青山学院大学教授)、黒川修司(横浜市立大学教授)、高瀬幹雄(関東学院大学教授)、高松基之(東洋英和女学院大学教授)、津守滋(同大学教授)、高柳彰夫(フェリス女学院大学教授)、且祐介(東海大学教授)、山田敦(一橋大学助教授)、松本郁子(国際環境 NGO「FoE Japan」代表)。

#### 3月30日 三浦半島中央道路開通

三浦半島中央道路の一部となる県道217号の葉山町長柄から上山口までの区間2.4kmが開通。湘南国際村へのアクセスが大きく改善した。

K-FACE ニュースレター



# Face to フェイス

クワガタ号  
(号外)

特集：シルクロード平山郁夫コレクション展

ハイライト:

特集：シルクロード平山郁夫  
コレクション展

- 湘南国際村でシルクロードの軌跡にふれる
- 展示品・展示室紹介
- 文化交流セミナーインフォメーション
- お客様の声
- 次号予告

## 湘南国際村でシルクロードの軌跡にふれる

かながわ学術研究交流財団は2003年4月2日に国際村センター1階の「K-FACE展示室」にシルクロード各地の多彩な古美術品を紹介する常設展「シルクロード平山郁夫コレクション展」をオープンいたしました。そこで今回の特集号ではその特徴とその魅力をご紹介します。

●K-FACEと平山コレクション

グローバル化という大きな国際的な動きとその複雑な問題点が浮き彫りになる現代社会では、ますます異文化間の相互理解と交流の意義が問われつつあります。

当財団では日本画壇の泰斗であり、かつ世界の文化遺産・文化財保護活動に情熱的に取り組まれている平山郁夫氏が、30余年にわたり収集したシルクロードゆかりの古美術品を、湘南国際村センター(K-FACE展示室)で展示しています。

この「シルクロード平山郁夫コレクション展示」は、財団の国際相互理解、学術・文化の国際交流事業の一環として、平山氏の運営するシルクロード研究所と、神奈川県との協力を得て、2003年4月から実施している新しい事業のひとつです。

●シルクロードの魅力堪能

今回K-FACE展示室で紹介している70余の展示品は、素朴な味わいの土器から高い芸術性を示す仏教彫刻まで、いずれも飽くことのない魅力にみちあふれ、シルクロードを舞台とする壮大な東西文化交流の軌跡を鮮やかに指し示しています。これらコレクションの一点一点は、現代に生きる私たちをその多彩な造形美で魅了すると同時に、時空を越えて文化の交流と継承について大切なメッセージを発しているかのようです。そしてこの芸術・学術的に貴重なコレクションを堪能した後は、おそらく日本文化の源流が豊かな国際交流の果実であるという思いに至るのではないのでしょうか。

また、シルクロードは平山氏の創作活動の原点であり、いまなお芸術的インスピレーションの源泉でもあります。そこで、展示室にシルクロードをモチーフとする平山氏のリトグラフ等版画数点を併せて展示しています。

●秋の文化セミナー

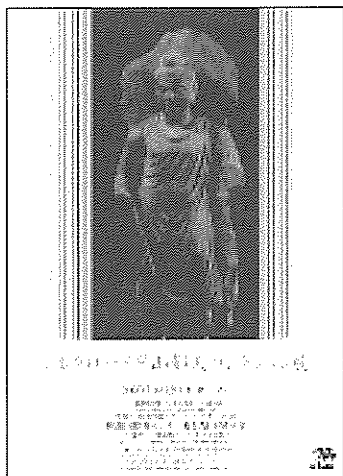
財団では、このようなシルクロードを軸とする文化の交流・融合をテーマに9月から「シルクロード文化セミナー」の開催を予定しています。(Page4参照)

\* \* \*

今後、2003年12月23日まで現在の展示を第1期分として紹介し、入替の後2004年3月第2期展示を開始する予定です。

来館メモ:

- ◎期間：4月2日～12月23日
- ◎開館期間：10:00～17:00 (入館は16:30まで)
- ◎休館日：月曜(祝日の場合は翌日休館)、12月24日～2004年3月上旬
- ◎入館料：一般300円・小中学生100円、団体(10名以上)一般200円・小中学生50円
- ◎交通：JR逗子駅・京急新逗子駅・京急汐入駅から湘南国際村行きバスで湘南国際村センター下車、徒歩1分。
- ◎お問い合わせ：財団法人かながわ学術研究交流財団/TEL046-855-1823・コレクション展示室/TEL046-855-1822



シルクロード平山郁夫コレクション展ポスター

## 2004（平成16）年度

### 【概況】

湘南国際村における事業活動の活性化や国際交流拠点づくりをめざし先進的な研究、国際的な視野を持つ人材の育成などの諸事業や(株)湘南国際村協会と協同で村センター施設の円滑な運営に取り組んだ。

事業は引き続き「研究」「人材育成」「交流」の3事業体系のもとに取り組み、21世紀かながわ円卓会議を再開するとともに、青少年向けの国際セミナーを開催するなどの新規事業の実施、湘南国際村開村10周年事業への参加と充実を図った。

### 【企画研究】

#### ①「青少年の国際教育のあり方」研究

名 称：「青少年の国際教育のあり方」研究会

委 員：学識経験者、専門家、高校教諭等7名

代表者：勝俣誠（明治学院大学教授）

#### ②企画研究事業調査

「持続可能な地域社会づくり」をトータルテーマとした環境分野の研究課題を設定するための文献調査、ヒアリング。

### 【出来事】

#### 4月3日～12月23日 第二期平山郁夫コレクション展「シルクロードの造形美」

生活に関わりの深い円筒印章、腕輪、首飾り、鏡などを中心に74点を7つのコーナーに分けて展示した。

#### 5～12月 鎌倉女学院国際セミナー（全4回）

5月19日、「入門講座」を鎌倉市由比ヶ浜の鎌倉女学院で、青年海外協力隊OB・OGの体験談。続いて6月13～14日（1泊2日）、湘南国際村センターで高1国際セミナー。ワークショップと高橋志麻子（国連大学）の講演。続いて10月23日同校で土曜講座、磯野昌子によるワークショップ「世界がもし100人の村だったら」。また12月14日同校で国際学講座、講師は旦祐介（東海大学教授）。

#### 7月10日 「解はひとつではない」出版

2000（平成12）年7月から2003（平成15）年3月にかけて実施した3回の「K-FACE フォーラム」と3回の「21世紀かながわ円卓会議」の成果を『解はひとつではない』として慶応義塾大学出版会から出版。

#### 7月10日 湘南国際村アカデミア 第1回（全2回）

テーマは「命と文化と自然を守る」。講師は宮脇昭（国際生態学センター研究所長）とリチャード・ポット（ハーバード大学教授）。

#### 8月2～3日 第11回 湘南国際村リブイン・セミナー

米国大使館東京アメリカンセンターと共催。テーマは「産学協同の世紀－日米における現状と比較」。司会は隅蔵康一（政策研究大学院大学助教授）。講師はクリストファー・ロレッツ（米国国立科学財団（NSF）東京事務所長）、ウィリアム・F・ミラー（米国スタンフォード大学大学院教授）、伊藤学司（文部科学省産学連携課技術移転推進室長）、渡部俊也（東京大学先端技

術科学研究センター教授)の各氏。

8月23日 湘南国際村体験教室「水彩で描く平山コレクション」

平山郁夫コレクション展示を題材にしたこどもの水彩画教室を開催。指導は寺田小夜子(絵画教室講師)。

9月4～5日 湘南国際村10周年記念「湘南国際村トップセミナー」

「地球環境と企業等の社会的責任」をテーマに県主催、湘南国際村センターで。小林陽太郎(富士ゼロックス会長)、福原義春(当財団理事長)がモデレータ。フランス・ナント市のジャン・ルイ・ボナン文化局長の報告、木村尚三郎(静岡文化芸術大学学長)、森脇昭夫(地球環境戦略機関理事長)、水谷雅一(経営倫理実践研究センター会長)、伊佐山建志(日産自動車副会長)の講演。

9月6～10日 第20回 国連大学グローバル・セミナー

国連大学と共催。テーマは「文化の多様性をどう生きるか」。基調講演は加藤周一(評論家)とマイク・フェザーストン(英ノッティンガム・トレント大学教授)。講師は篠原初枝(早稲田大学教授)、カルドン・ビートリス(ユネスコ文化局プログラム・オフィサー)、パク・ソンヒ(梨花女子大助教授)、中野嘉子(香港大学助教授)、ジョン・ウェルフィールド(国際大学教授)、小倉和夫(国際交流基金理事長)、安井至(国連大学副学長)、村上陽一郎(国際基督教大学教授)、松尾康範(アジア農民交流センター事務局長)、早川秀樹(多文化まちづくり工房代表)。プログラム委員長は山本和(国際基督教大学教授)。

10月23日 三浦半島エコミュージアム・エコツアー

湘南国際村周辺の地域資源(自然、歴史、生活文化)を身近に感じ、エコミュージアムの一端を体験するツアーを葉山町上山口で「里山体験コース」、子安の里で「歴史と生活めぐり」と2コース開催。

10月31日、11月7日、11日、28日 シルクロード文化交流セミナー(全4回)

統一テーマは「シルクロードにみる人々の暮らし」。第1回「印章の歴史」を石田恵子(古代オリエント博物館研究員)が、第2回「ガンダーラの装い」を前田たつひこ(平山郁夫シルクロード美術館学芸部長)が、第3回「中国の俑」を植松勇介(同美術館学芸員)が、第4回「ギリシャの器と人々の暮らし」を平山東子(同美術館学芸員)が講演。

11月13日 湘南国際村アカデミア 第2回(全2回)

テーマは「映像でたどる日本人の暮らし」。総合研究大学院大学創立15周年、国際村10周年を記念して同大学にて開催。講師は大森康宏(国立民族学博物館教授)。

11月18日、12月1日

青少年国際人材育成研究事業の第1回、第2回研究会を明治学院大学白金キャンパスで開催。

11月19～21日 第2回 インカレ国際セミナー「東アジア共通の家」

基調講演は姜英之(カン・ヨンジ)(北陸大学未来創造学部教授)、天児慧(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授)。講師は徐承元(ソ・スンウォン)(関東学院大学助教授)、神崎尚美(国際環境NGO FoE Japan)。委員長は滝田賢治(中央大学教授)。

11月30日、12月7、14、22日 葉山国際セミナー(全4回)

統一テーマ「21世紀の世界を南アジアの人々と共に考えよう」。各回のテーマと講師は順に:

第1回 「生まれ変わるインド経済」、絵所秀紀(法政大学教授)

第2回 「インド人のものの考え方と宗教意識の変化」、白田雅之(東海大学教授)

第3回 「南アジアのNGOと私たち」、大橋正明(恵泉女学園大学教授)



第4回 「民主主義のインドと21世紀の平和」、竹中千春（明治学院大学教授）。

#### 12月4日 湘南国際村文化と音楽の集い

テーマは「コリアのリズム」。講演はピョン・インジャ（韓国伝統舞踊家）。演奏は大韓民国居留民団横浜農楽隊。

#### 12月12日 グレート・ブックス・フォーラム

当財団の研究事業「名著と学び」の経過・成果発表。テーマは「グレート・ブックスをどう読むかー古典読書の新しい試み」。特別講演は木田元（哲学者・中央大学名誉教授）。講師は松田義幸（実践女子大学教授）、須賀由紀子（エンゼル財団主任研究員）、江藤裕之（長野県看護大学助教授）、犬塚潤一郎（リベラルアーツ総合研究所研究顧問）、梅田誠（横浜市教育委員会委員長）、鈴木良雄（神奈川県立図書館資料部長）、原田広幸（アゴラ・ソクラティカ代表）。

### 2005（平成17）年

#### 2月5日 日中文化講座

日中友好会館と共催。テーマは「中国酒の楽しみと効用」。講師は、稲田恵子（中医薬膳アドバイザー・保健師）。

#### 2月10日、3月22日 地球環境セミナー（全2回）

地球環境戦略研究機関（IGES）と共催にてフォーラムよこはまで開催。

第1回セミナーのテーマは「エコアクション21ー認証・登録制度の仕組みとメリット」。講師は竹内恒夫（エコアクション21事務局長）と小竹重一（かながわ環境カウンセラー協議会）。

第2回のテーマは「クリーン開発メカニズム（CDM）と途上国人材等育成支援事業について」。講師は飯岡眞一（IGES CDM プログラムマネージャー）と市原純／小坪一久（IGES CDM プログラムカントリーオフィサー）。

#### 2月26日 湘南国際村開村10周年記念 湘南国際村アカデミア

開村10周年を記念して地球環境戦略研究機関（IGES）と共催で。テーマは「環境再生と日本経済ー循環型社会への道しるべ」。講師は三橋規宏（千葉商科大学教授）。

#### 3月11～12日 第2次第1回 21世紀かながわ円卓会議

「21世紀を構築する」を第2次円卓会議（期間：3年間）の通しテーマとして、その第1回「超大国の行方と日本の対応」を開催。モデレータは樺山紘一（国立西洋美術館館長）。基調講演は明石康（前国連事務次長）による「超大国の責任と限界ー21世紀の世界のガバナンス」。講師に五十嵐武士（東京大学教授）、リチャード・クー（野村総合研究所主席研究員）、田島英一（慶応義塾大学助教授）、竹中千春（明治学院大学教授）、袴田茂樹（青山学院大学教授）、羽場久美子（法政大学教授）、福川伸次（電通顧問）、船橋洋一（朝日新聞社編集委員）。討議者に犬塚潤一郎（実施女子大学助教授）、黒川修司（横浜市立大学教授）、滝田賢治（中央大学教授）、船橋晴雄（シリウス・インスティテュート代表取締役）、福原義春（当財団理事長）他。

#### 3月27～29日 第1回 湘南国際村青少年国際セミナー（K-PIT）「世界の入り口に立とう」

研究事業「青少年の国際教育のあり方」の成果を基に、参加型学習の考え方を基本とした高校生を対象とする2泊3日の国際入門セミナーを湘南国際村センターで開催。委員長は、勝俣誠（明治学院大学教授）。



# Face to フェイス

●特集：かながわ円卓フォーラム「21世紀ミュージアム・サミット」

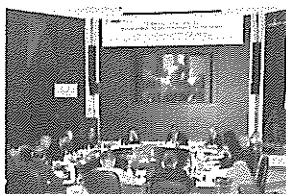
世界の著名美術館長など迎え

「文化の継承と創造」を展望

過去の円卓会議踏まえ本格議論

## ハイライト:

- 巻頭特集:かながわ円卓フォーラム  
「21世紀ミュージアム・サミット」開催報告
- 開催報告:  
三浦半島エコミュージアムフォーラム  
日中文化講座  
湘南国際村アカデミア  
第1回インカレ国際セミナー
- 予告:  
第二期シルクロード平山郁夫コレクション展  
湘南国際村開村10周年記念行事開催
- 三浦半島中央道路開通のお知らせ
- 葉山中学生職場体験リポート
- 「湘南国際村四季～私の歳時記」
- K-FACE セミナーインフォメーション



熱心に交わされる議論

湘南国際村開村10周年を記念し、さる3月20日(土)・21日(金)、湘南国際村センターにおいて、かながわ円卓フォーラム「21世紀ミュージアム・サミットー文化の継承と創造」を(株)日本経済新聞社と独立行政法人・国際交流基金との共催で開催しました。議長に大原美術館長・西洋美術振興財団理事長、高階秀爾先生を迎え、海外4カ国の主要ミュージアム館長の基調講演を受けて、国内外の識者が議論を深め、文化の未来を展望する提言を発信しました。

### ●岐路に立つミュージアム

博物館、美術館といえば、広大な建物、ひやりとする空気、無表情なガードマン、写真撮影や万年筆お断りの注意書き、といった親しみにくい雰囲気を連想されますか？

英語ではミュージアムと総称される、こうした施設が、いま大きな曲がり角に立たされています。国や地方自治体からの資金が、徐々に絞られてきたからです。善意の寄附も減りました。その結果、「自力で採算のとれる運営」を課題として突きつけられているのです。

ミュージアムへ美術品や文化財の鑑賞に来る人の数は高齢者を中心に増えているし、学校の生徒も総合学習などで人類の文化遺産や真の美術作品に接する機会が増えているのですが、元来、利潤を上げるための施設ではなかったため、ミュージアム側のPRは充分とは言えません。しかし今やどのミュージアムも目新しい展示企画や各方面への宣伝に、知恵を絞っています。

### ●欧米の例に学ぶ

ミュージアムは全体として、18世紀啓蒙主義思想を根底に置く西欧の産物でした。21世紀を迎えた欧米の美術館では、本来の任務である文化財の収集、管理・公開に加え、地元との結びつき、新しい技術との提携、そして次の世紀にも生き残れるような、現代の美術の育成などといった、多彩な課題に、一斉に取り組んでいます。

湘南国際村10周年を記念して開かれたミュージアム・サミットは、欧米各国の先進的な試みを学び、これからの「文化」につい

ての考え方を議論するために企画されました。欧米四カ国(うち一人は書面参加)の著名ミュージアム館長と、この分野に関心の深い日本の識者が、胸襟を開いて語り合うというシンポジウムは、日本ではこれまで例を見なかった催しです。

### ●相互理解を目指して

世界には、いまおよそ8,000の違った文化集団がある、といわれています。それぞれの「文化」を旗印にして、これらの集団が争うようなことがあったら、これは世界の人類にとって大きな不幸です。必要なのは、人類の歩みを刻んできた文化・芸術を、相互に理解し、尊重し合うことではないでしょうか。文化を重んじる国が他国からも尊敬され、留学生、観光旅行など多くの人々の行き来を生み出すことは、ご承知の通りです。ミュージアムは激動の21世紀を生きぬくばかりではなく、新しい文化活動を十分に吸収して、次の世代、そしてまた次の世代に引き継がれてゆかねばなりません。

### ●文化を未来に引き継ぐ

このサミットで、フランス美術館総局の前局長フランソワーズ・カシャンさんたちは、「本来利潤の追求とは関わりのない美術館は、目先の損得に煩わされず、息長く本来の研究、展示、保存の仕事に取り組むべきだ」と原点に立ち返る必要を強調、また次の世代、その次の世代に文化遺産を引き継ぎ、ミュージアムに親しんでもらうため、どの館も努力すべきだ、と訴えました。

●湘南国際村開村10周年

萌芽期から新緑へ成長をめざして

村内機関が連携して記念行事多彩

湘南国際村は今年で開村10年を迎えます。みなさまに村への理解を深めていただく機会とするため今年一年をとおして、村内機関の研究活動や、環境資源などを活かした催事など、多彩な記念行事の開催を予定しています。

●湘南国際村の誕生とあゆみ

いまから10年前、神奈川県は世界の平和と発展への貢献を目指し、学術研究・人材育成・技術交流・文化交流という相互に関わりの深い4つの機能を集積する「21世紀の緑陰滞在型国際交流拠点」として、三浦半島の中央部に位置する湘南国際村の建設に着手しました。そしてこれらを実現するため、湘南国際村センターをはじめ、総合研究大学院大学や、(財)社会経済生産性本部の生産性国際交流センター、(福)全国社会福祉協議会の中央福祉学院(ロフォス湘南)、(財)地球環境戦略研究機関(IGES)などの公的研究機関や、民間研修施設やサービス施設・居住施設などの整備が進められてきました。

●開村10周年記念事業

この10年間に、村内で活動する様々な機関・団体によるセミナーや講演会などといったソフト事業も活発に開催されるようになりました。2004年は、今までの集大成と今後の活動を一層進めるために、数々の記念行事を企画しています。主だった村内団体が実施するコンサート、セミナー、講演会、参加型ツアーなど、お子様から大人までご家族揃って参加できる企画を検討中です。

■国際村開村10周年記念行事  
年間プログラム(予定)  
\*詳細はお問合せください

月	内容
5月	湘南国際村音楽祭リレーコンサート 村内3施設の日替わりで多彩なコンサート (神奈川フィル木管五重奏他6プログラム)
7~8月	親子で体験! シルクロード~平山コレクションの楽しみ方 展示品を題材に写生やクラフト製作を体験
8月	湘南国際村トップセミナー 神奈川県や湘南国際村にゆかりの深い各界のトップリーダーによるセミナー
9月中・下旬	湘南国際村探検エコツアー&スタンブライバー 湘南国際村の周辺環境への体験学習型ツアー
11月	働く人の心の健康を考える~メンタルヘルス特別講座 メンタルヘルスの現状や課題、解決についての講話と心のリラックス体操の実践講座
12月	現代数学入門市民講座 現代数学の最先端のテーマを一般の方にわかりやすく消化するセミナー
7月~2005年1月	湘南国際村アカデミア(詳細未定) 研究の成果を分かりやすく紹介する講演やセミナー(3回シリーズ) 第1回のテーマ「命と文化と自然を守る~植物生態学者が語る21世紀の緑環境」



国際村から遠く富士山を望む

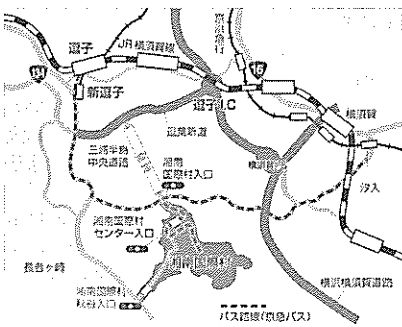
コンタクトポイント  
(事業担当:長島)

・Tel→046-855-1822  
・電子メール→  
nagashima@k-face.org

●3月30日三浦半島中央道路開通

「うるおい」と「にぎわい」の三浦半島に一役

国際村へ新アクセスルート



●ウォーキングで開通記念

3月30日(火)午前11時、三浦半島中央道路の一部となる、県道217号(逗子葉山横須賀線)の三浦郡葉山町長柄から同町上山口までの区間(2,410m)が、開通しました。開通に先立ち、3月28日(日)には、地元団体などによる完成記念イベントがあり、逗葉新道・南郷交差点付近での地元産物の販売やミニコンサート、逗子第一運動公園からトンネルを抜けて湘南国際村までの全行程7キロの道のりを歩く、湘南国際村健康ウォークなどが開催され1,000

人を越す方々の参加で大いににぎわいました。

●湘南国際村への新しい道

この道路の開通により、三浦半島に南北の軸が新たに加わり、交通が集中している海岸沿いの国道134号などの渋滞が緩和されることが期待されます。また湘南国際村への新しいアクセスルートとして、国際村が皆様にとってより身近なスポットとなることを願っています。



葉山中学生在が職場体験

2月3(火)~5日(木)までの3日間、葉山中学校2年、山田 泰輝くん、青木 拓磨くんがK-faceで職場体験をしました。ホームページリニューアルの手伝い、データ入力、セミナーの事務補助など、パソコンを使う場がたくさんありました。IT時代の職場体験をおとしているらなことを学び、有意義な3日間となったことと思います。お疲れ様でした。

真剣な眼差しで作業中

# Face to フェイス



特集: 湘南国際村開村10周年記念事業

「湘南国際村トップセミナー」

地球環境と企業等の社会的責任を考える

## ハイライト:

### ■特集 (P1-P3):

湘南国際村開村10周年記念事業開催報告

- ・湘南国際村トップセミナー
- ・湘南国際村アカデミア
- ・水彩画教室

### □人材育成セミナー開催報告(P4)

- ・湘南国際村リブインセミナー
- ・国連大学グローバル・セミナー

### ■セミナー・イベント参加者募集情報(P5)

□「湘南国際村四季～私の歳時記」(P6)

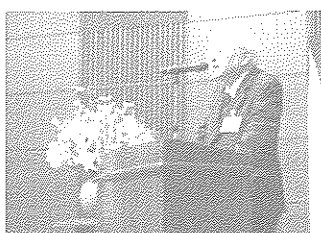
### ■追悼 財団第二代理事長 鈴木治雄氏 (P6)



トップセミナー開会式の模様



円卓でのディスカッション



東京大学名誉教授 木村先生の講演

Face to フェイス第23号では、今夏に開催した3つの10周年記念事業「湘南国際村トップセミナー」、「湘南国際村アカデミア」、「水彩で描く平山郁夫コレクション」を特集でご報告します。

去る9月4日から5日の2日間にわたり開催された「湘南国際村トップセミナー」では、「地球環境と企業等の社会的責任」をテーマに、21世紀における、企業、NPO、自治体などが、市民社会において期待される役割や求められる行動などについて、各界で活躍するトップリーダーとともに議論を深めました。

### ●各界で活躍するトップが国際村に集結

平成16年9月4日(土)から5日(日)の二日間、湘南国際村センター国際会議場において湘南国際村トップセミナーを開催しました。このセミナーは湘南国際村の開村10周年を記念して、村内に立地するK-FACEや湘南国際村協会などの7団体と、県や横須賀市、葉山町の地元行政機関でつくる「10周年事業実行委員会」が主催したもので、企業や自治体、NPO団体などのリーダーや一般傍聴者、約130人の方が参加し、講演やディスカッションを行いました。

### ●地球環境と企業等の社会的責任

セミナーは、「地球環境と企業等の社会的責任(Corporate Social Responsibility)」をテーマとし、初日は松沢県知事の開会挨拶、(株)資生堂名誉会長の福原K-FACE理事長からセミナーの趣旨説明後、水谷日本経営倫理学会会長から、社会貢献活動を事業化戦略などに結び付けている企業等の取組みを紹介しながら、CSRの今日的課題やその重要性等についての基調講演をいただきました。

次に日産自動車(株)の伊佐山副会長から、「日産自動車のグリーン革命と環境戦略」と題し、日産自動車のハイブリッドカーや超低公害車導入への取組み、またリサイクルの問題など、車づくりにおける環境戦略について具体的なお話がありました。

### ●企業・団体等のトップリーダーによるディスカッション

続いて、富士ゼロックス(株)の小林取締役会長を進行役に、企業・団体等のトップリーダー23名により、「企業倫理と地球環境」をテーマに円卓形式によるディスカッションを行いました。

まず、(財)地球環境戦略研究機関の森島理事長から、企業倫理やCSRの基本的考え方についての問題提起を受け、その後の討論では、①

CSRとは何か、②CSRを定着させるために企業はどうすればいいのか、③CSRの定着と各ステークホルダーズの役割とは何か、という3つの論点に整理し、東京電力(株)村田会長や日本IBM(株)柴田常務ら企業のトップリーダーから、各社の経営理念やCSRへの取組み、また社会的責任投資(SRI)等について意見交換が行われました。古くは近江商人の「三方よし」に代表される経営倫理観があるなかで、今やファッション的になっているともいえるCSRへの懸念や、社員一人ひとりの倫理観の浸透の難しさ、情報発信やコミュニケーション不足等の課題などから、今後の取組みの方向性を示すことができました。

### ●グローバルよさようなら ローカルよこんにちは

2日目は、東京大学名誉教授の木村先生から「住んでよし訪れてよしの地域づくり～かながわツーリズムに向けて」と題した講演をいただきました。7億人もの人々が世界を旅する大交流の時代において、求められているのはその土地なりのローカルな暮らしや楽しさ、魅力をツーリズムに導入することであり、とりわけ日本人の美意識を生かした「かながわブランド」創りの必要性や神奈川の観光や文化振興に向けたヒントを伺うことができました。

### ●地域社会・まちづくりへの貢献

続いて、福原K-FACE理事長が進行役となり、1日目と同様に企業・団体等のトップリーダーにより「地域の文化政策とまちづくり」をテーマにディスカッションを行いました。その中で、造船・海運業の衰退により活力を失った街を文化政策の推進により再生した事例に基づいて、フランスナント市文化局長のジャン＝ルイ・ポナン氏から問題提起がありました。

## 『湘南国際村四季～私の歳時記』



こすげ さん

## 『安心できる地場の産物を届けたい～湘南国際村の朝市とともに～』

湘南国際村「朝市」主催役員/子安の里在住 小菅 美代子さん

湘南国際村センターの設立とほぼ同時に開始された湘南国際村「朝市」は、今年で8年目を迎えました。毎週日曜日の朝8時前ごろから開始し、正午まで湘南国際村センターの正面入口で、子安の里などから八組の農家が、地場の野菜、お花、加工品、竹細工などの品を販売しています。子安の里とは、湘南国際村の入り口に位置し、元禄のはじめに開かれた古い集落で、昔と変わらないのどかな里山の景色を残した農村です。その産物を中心に、朝市が開かれております。

朝市にはこれまでたくさんのエピソードがございますが、特に印象深いのは天皇皇后両陛下がお越しになったことです。今年の7月、葉山御用邸に避暑で訪れた両陛下がおしのみで湘南国際村をご訪問された際、朝市にもお寄りになりました。そして両陛下はそれぞれのお店に立ち寄られ、私のお店では加工品の梅の甘煮と野路を皇后様と紀宮様がご試食され、野路をお二人で半分にして食べ、ニッコリと顔を見合わされて、「おいしいですね」とおっしゃってください、買われていきました。「お野菜はどれがお勧めですか」などのご質問を賜り、また「がんばってください」など励ましのお言葉を頂きました。両陛下の暖かい心遣いに深く感激しました。

地場で取れた新鮮で美味しいものを皆さんに安心して味わっていただけることが、朝市の一番の醍醐味です。近隣だけでなく都内などの遠方からも、湘南国際村の朝市に買い物にいらっしゃる方も多です。「おいしかったよ」などと声をかけていただいたり、お客さんとお話したり、喜ぶ顔を見るのが私たちの何よりの喜びであり、それが農作業や朝市の励みになります。

国際村は四季を通じてとても美しく、自然が大事に残されていますので、あちこち散策したり、富士山を眺めたり、ほのかに甘い空気を味わいながら、五感を研ぎ澄ますことのできる絶好の場所です。また、これからの季節は食欲の秋となり、朝市には葉物、カブ、キャベツ、ブロッコリー、大根、さつまいも、漬物など、野菜や加工品の数も多くなり、お花は、菊、水仙、ストック、矢車、金仙など次々と咲いていきます。散歩がてら、是非とも湘南国際村の朝市にいらしてください。お待ちしております。

四季折々  
秋

## 追悼 かながわ学術研究交流財団第二代理事長 鈴木 治雄 氏

鈴木治雄(すずき・はるお)さんは、初代小山八郎さんを継いで1997年6月、当かながわ学術研究交流財団の第二代理事長になられ、翌年4月第三代理事長一二期さんに理事長職を譲られた。その鈴木さんは去る7月3日、軽井沢で天に召された。91歳であった。

朝日新聞の財界担当記者をしていた私が、鈴木さんにインタビューしたのは、第一次石油ショックの翌年、昭和49(1974)年のこと。「新日本産業論」というタイトルの連載特集記事で、企業経営者の今後についてお話を伺った。社長として、昭和電工鹿瀬工場の、いわゆる「新潟水俣病」の判決に控訴しないことを決断されたすぐあとのことである。

そのことで「個人的には筆舌に尽くせない体験をした」という鈴木さんが、穏やかな口調に、含羞ともいふべき笑みをたたえて「社会の批判も謙虚に受けて解決に努力することが必要。“大過なく”では、ひ弱になる」とおっしゃったのを、今でも覚えている。これはいまでも、経営者にとって金言であろう。

鈴木さんは葉山町の名門の生まれで、野村證券のあと昭和電工の第一期新入社員として入社された。71年同社社長、81年会長と経営の最前線を歩まれる一方、『化学産業論』から『古典に学ぶ』『ルオー礼賛』『雅俗邂逅』など20冊を上回るご著作をあらわし、企業が芸術文化を支援する「メセナ」の元締め「企業メセナ協議会」の初代会長はじめ業界団体などの代表や、政府審議会関係の要職を、精力的に務められた。

94年創刊の財界人の随筆誌『ほほづえ』の、初代発行人も鈴木さんで、昨年春号まで『古典の知恵』を連載された。最終回は「最も豊富な教訓を受けた」カール・ヒルティとラファエル・ケーベルという、知る人ぞ知る一級の知識人を取り上げておられる。

葬儀は麹町の聖イグナチオ教会で盛大に執り行われた。69年にご夫婦で受洗された鈴木さんには、『告白』を書いた初代キリスト教会の教父アウグスティヌスの名が贈られ、参列者には、まるで遺言のように「わたしは、良い戦いを戦い、走るべき道程を走り終え、信仰を守り抜きました」(第2テモテ書4・7)と記したカードが渡された。

(談:かながわ学術研究交流財団 専務理事 富岡 隆夫)

K-FACEニューズレター“Face to フェイス”第23号 2004年10月1日発行

財団法人かながわ学術研究交流財団(K-FACE)

〒240-0198 神奈川県三浦郡葉山町上山口1560-39 湘南国際村センター内

電話→ 046-855-1820~1822・1823(展示室) / ファックス→ 046-858-1210

ホームページ→ <http://k-face.org/> / 電子メール→ [info@k-face.org](mailto:info@k-face.org)

## 2005（平成17）年度

### 【概況】

湘南国際村における事業活動の活性化や国際交流拠点づくりをめざし先進的な研究、国際的な視野を持つ人材の育成などの諸事業や（株）湘南国際村協会と協同で村センター施設の円滑な運営に取り組んだ。

事業は引き続き「研究」「人材育成」「交流」の3事業体系のもとに取り組み、第2回ミュージアム・サミット、第3期平山郁夫シルクロードコレクション展を実施するとともに青少年国際セミナー等の充実を図った。

### 【企画研究】

#### ①「青少年国際人材育成」研究

名 称：「青少年国際人材育成」研究会

委 員：学識経験者、専門家、高校教諭等7名

代表者：勝俣誠（明治学院大学教授）

#### ②「地球環境政策の課題」研究

名 称：「自治体における持続可能性政策」研究会

委 員：学識経験者、自治体環境政策担当者等10名

代表者：竹内恒夫（地球環境戦略機関上席アドバイザー）

### 【出来事】

4月23日～12月18日 第三期シルクロード平山郁夫コレクション展「土器と陶器の世界」

5月～12月 鎌倉女学院「国際セミナー」（全4回）

5月25日、「入門講座」を鎌倉市由比ヶ浜の鎌倉女学院で、青年海外協力隊OB・OGの体験談。続いて6月12～13日（1泊2日）、湘南国際村センターで高1国際セミナー。ワークショップと妹尾靖子（国連広報センター広報官）講演。続いて10月15日同校で土曜講座、講師は磯野昌子（ネパール研究家）。また12月13日に同校で国際学講座、講師は旦祐介（東海大学教授）。

6月6～7日 第12回 湘南国際村リブイン・セミナー

東京アメリカンセンターと共催。テーマは「FDI（対日直接投資）と日本経済活性化－M & A投資の効果」。座長に杉浦哲郎（みずほ総合研究所常務執行役員）、講師にロビン・レーデン（米ハーバード大学ロースクール国際金融システムプログラム副ディレクター）、ジェームス・P・ズムワルト（大使館経済担当公使）、浦田秀次郎（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）。

7月25日、8月13日 平山郁夫コレクション展を記念した湘南国際村体験教室

7月25日は小中学生向けの「水彩で描く平山コレクション」。指導は、寺田小夜子（絵画教室講師）。8月13日は小学生向け「ドキ、土器、シルクロード（焼き物の製作）」。指導は木村芳之助（子安窯窯主）

9月5～9日 第21回 国連大学グローバル・セミナー

テーマは「グローバルガバナンスにおける国連の役割－挑戦と可能性」。基調講演は、ケビン・クレメンツ（豪・平和紛争研究センター所長）、志村尚子（前津田塾大学学長）。講師に望月康恵（関西学院大学助教授）、ベセリン・ポポフスキー（国連大学学術研究官）、浦元義照（ユニ

セフ駐日事務所代表)、長有紀枝 (ジャパン・プラットフォーム評議会アドバイザー)、ステファン・ジョベ (カナダ大使館参事官)、内田孟男 (国連大客員教授・中央大学教授) 等。プログラム委員長は滝田賢治 (中央大学教授)。

9月17日、11月26日 湘南国際村アカデミア (全2回)

第1回のテーマは「創造的環境政策の指針－環境と福祉の垣根を越えて」、講師は炭谷茂 (環境事務次官)。

第2回のテーマは「こどもと免疫」、講師は藤田紘一郎 (東京医科歯科大学名誉教授)。

9月28日、10月15日 地球環境セミナー (全2回)

フォーラムよこはまとパシフィコ横浜で開催。

第1回のテーマは「エコアクション21が目指す環境経営」。講師は森下研 (地球環境戦略研究機関 (IGES) 持続性センター・エコアクション21事務局次長)、木村信幸 (かながわ環境カウンセラー協議会横浜支部長)、望月良治 (エコアクション21地域事務局かながわ事務局長)。

第2回のテーマは「廃棄物から見る国際関係－ごみが結ぶ私たちと世界のつながり」。講師は瀧口博明 (環境省廃棄物リサイクル対策部企画課課長補佐)、本田大作 ((株)リサイクルワン取締役兼 COO)、橘徹 (IGES 長期展望・政策統合プロジェクト主任研究員)。

11月21日、12月1、5、14日 葉山国際セミナー (全4回)

統一テーマは「今こそ、中国を知ろう」。講師は王敏 (法政大学教授)、今井健一 (アジア経済研究所地域研究センター研究員)、園田茂人 (早稲田大学大学院教授)、毛里和子 (早稲田大学教授)。

11月25～27日 第3回 インカレ国際セミナー「東アジア共通の家」

基調講演は薬師寺克行 (朝日新聞『論座』編集長)、山本吉宣 (青山学院大学国際政治経済学部教授)。講師は押村高 (青山学院大学教授)、大芝亮 (一橋大学教授)、黒川修司 (東京女子大学教授)、小久保康之 (静岡県立大学教授)、白鳥浩 (法政大学助教授)、高松基之 (東洋英和女学院大学教授)、高柳彰夫 (フェリス女学院大学教授)、滝田賢治 (中央大学教授)、田島英一 (慶應義塾大学助教授)、津守滋 (東洋英和女学院大学教授)、中村英俊 (早稲田大学助教授)、野口和彦 (東海大学助教授)、羽場久美子 (法政大学教授)、渡辺啓貴 (東京外国語大学教授)、井上団 (国際協力 NGO センター員)。

11月27日、12月4、11、18日 シルクロード文化交流セミナー「土器、陶器」(全4回)

講師は順に堀眺・古代オリエント博物館研究部長、石田恵子 (同博物館研究員)、勝木言一郎 (東京文化財研究所美術部主任研究官)、前田たつひこ (平山郁夫シルクロード美術館学芸部長)。

2006 (平成18) 年

1月28～29日 第2回 ミュージアム・サミット

テーマは「美術館は生き残れるか」。総監修は蓑豊 (金沢21世紀美術館長・大阪市立美術館長)。海外講師はマーク・ジョーンズ (英ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館長)、アルフレッド・バックマン (仏ポンピドゥー・センター国立近代美術館長)、ニール・ベネズラ (米サンフランシスコ近代美術館長)、ラース・ニッティヴ (ストックホルム国立近代美術館長)。討議者は高階秀爾 (大原美術館長)、植木浩 (ポーラ美術館長)、岡部あおみ (武蔵野美術大学造形学部教授)、酒井忠康 (世田谷美術館長)、妹島和世 (建築家)、堤清二 (セゾン文化財団理事長)、永井多恵子 (日本放送協会副会長)、西沢潤一 (首都大学東京学長)、野崎弘 (東京国立博物館長)、原俊夫 (原美術館長)、福武聰一郎 (ベネッセコーポレーション代表取締役会長)、森佳子 (森

美術館理事長)、竹田博志(日本経済新聞社編集委員)、福原義春(当財団理事長・東京都写真美術館長)。

なお講演と討議の内容は、2004年開催の第1回ミュージアム・サミット分と合わせ、『ミュージアム・パワー』のタイトルで慶應義塾大学出版会から2006年11月10日出版。

### 3月4日 日中文化講座

日中友好会館と共催。テーマは「西安発見の井真成墓誌－蘇えた古代の遣唐使」。講師は鈴木靖民(國學院大学教授)。

### 3月17～18日 第2次第2回 21世紀かながわ円卓会議

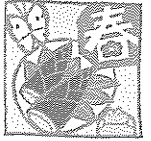
第2次 統一テーマ「21世紀を構築する」、第2回「世界を走る亀裂－グローバル化の可能性」  
モデレータは樺山紘一(国立西洋美術館長)。基調講演はハンス・ファン・ヒンケル(国連大学学長)による「不公平に世界はどう立ち向かうか 大学の役割」。講師に藤原帰一(東京大学教授)、諸富徹(京都大学大学助教授)、伊豫谷登士翁(一橋大学教授)、竹中千春(明治学院大学教授)、福川伸次(機械産業記念事業団会長)。討議者に五十嵐武士(東京大学教授)、内田孟男(中央大学教授)、勝俣誠(明治学院大学教授)、鈴木佑司(中央大学教授)、船橋晴雄(シリウス・インスティテュート代表取締役)、福原義春(当財団理事長)他。

### 3月26～28日 第2回 入門編

### 3月29～31日 第3回 発展編 湘南国際村青少年国際セミナー(K-PIT)

湘南国際村センターで開催。テーマは、入門編「感じて・遊ぶ・語ろう－共に生きる世界を求めて」と発展編「地球的課題に触れて・感じて・語ろう－私たちの役割」。講師は入門編が遠藤晋(県立向の丘工業高校教諭)、細谷早里(関東学院大学助教授)、江藤裕之(長野県看護大学助教授)。「発展編」が勝俣誠(明治学院大学教授)、佐久間健一(横浜国際女学院翠陵高校副校長)。





# Face to フェイス

巻頭特集:「21世紀かながわ円卓会議」

## 「国際村から世界へ発信」第2期円卓会議スタート 《21世紀を構築する-超大国のゆくえと日本の対応》

### ハイライト:

#### ■巻頭特集 (P1&P2):

- ・第2期21世紀かながわ円卓会議  
『超大国のゆくえと日本の対応』

#### □研究事業特集 (P3&4):

- ・三浦半島エコミュージアム研究報告

#### ■開催報告 (P2&P5)

- ・日中文化講座 (P2)
- ・地球環境セミナー第1回&第2回 (P5)
- ・湘南国際村アカデミア 第3回 (P5)

#### □葉山中学校職場体験記 (P5)

#### ■「湘南国際村四季～私の歳時記」(P6)

#### □セミナー・イベント参加者募集 (P6)

K-FACEは、1月から3月にかけて日中文化講座をはじめ、地球環境セミナー、湘南国際村アカデミアに続き、第2期21世紀かながわ円卓会議、青少年国際セミナーなど今年度を締めくくる大きな事業を次々と開催しました。Face to フェイス第25号では、世界のガバナンスを左右する「超大国」をテーマに2日間にわたり国際村で開催された第2期円卓会議の様子を巻頭で報告します。

### ●過去三年の成果を踏まえ第2期スタート

3月11日(金)～12日(土)の2日間、湘南国際村センター国際会議場で「21世紀かながわ円卓会議ー21世紀を構築するー『超大国のゆくえと日本の対応』」が開催され、研究者、実務家、ジャーナリスト、政策担当者など内外の有識者達が集い、「円卓会議」シリーズの第2期が新たにスタートを切りました。初日のレセプションには、松沢成文・神奈川県知事も駆けつけ、「国際村から世界への発信」を祝いました。

2000年度から3年間シリーズで、「グローバリゼーション」をテーマに「21世紀かながわ円卓会議」(第1次)を開催し、政治経済システムと社会構造の変化、価値の崩壊、文化の変容など多方面にわたる議論を深め、その記録は昨年7月に慶應義塾大学出版会から『解はひとつではない』のタイトルで刊行されました。

第2期目のスタートとなる今年は「超大国のゆくえと日本の対応」をテーマとし、9.11事件以降の国際社会におけるアメリカの役割を再考するとともに、EU、中国、インド、ロシアなど膨大な人口と経済成長力を発揮する次世代の「大国」に、日本がどのように対応すべきかを議論しました。

### ●21世紀の「超大国」は今

基調講演と4つのセッションから構成された今回の会議では、司会進行役に榊山紘一・国立西洋美術館長を、オープニングの基調講演には前国連事務次長の明石康氏を迎えました。

その後、セッション1「アメリカの実像ー世界戦略は変わるか」で、五十嵐武士・東京大学教授は、ブッシュ政権2期目を誕生させたアメリカ国民の世界観と安全保障戦略など政治・社会問題について、リチャード・クー・野村総合研究所主席研究員は、アメリカの景気の減速感、双子の赤字の将来など経済・財政につき明快に分析しました。

第2日目は、次世代の超大国「候補」の点検から開始し、セッション2「台頭する勢力ー中国・インド」では、田島英一・慶應義塾大学助教授が中国における高度経済成長が生み出している「ひずみ」、現体制の弱みと強み、国としての一体性の分裂の要素、FTAの積極的な姿勢などにつき、現

地での豊富な調査に基づく報告を行いました。インドについては、竹中千春・明治学院大学教授が、1990年代に入って、社会主義経済から市場経済への転換をはかり、ハイテク産業の分野で急速な成長を続ける政治・社会・国際関係の変貌の歴史とインドが今後世界にどのような影響を与えるかを論じました。

引き続きセッション3「台頭する勢力ーロシア・EU」では、袴田茂樹・青山学院大学教授が「ソ連邦」崩壊、プーチン政権の登場、大國ロシアのゆくえや、日露関係の現状と課題を展望しました。また、EUについては「拡大EUと新しい『世界秩序』の構築」と題し、羽場久・尾子・法政大学教授は25カ国EUが実現した背景、今後も拡大を続けるEUは世界の新しいリーダーになり得るか、拡大EUが日本にとってどのような意味を持つかについて述べました。

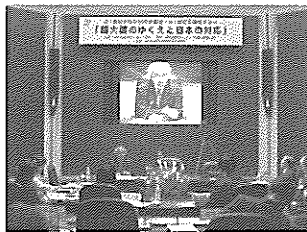
### ●日本の取るべき進路とは

締めくくりにセッション4「日本はいかに対応すべきか」では、船橋洋一・朝日新聞編集委員が「日本外交ブランディング」、福川伸次・電通顧問が「日本の力の評価と発現」というタイトルでそれぞれ講演を行い、大國ひしめく世界の中で日本は国としてどのようなビジョンを持ち、それをどう実現するかにつき、大きな視点に立つて論じました。

各セッションの講演後には、それぞれ1時間ほどの討議時間を設け、講師9名と討議者12名の総勢22名による討議を行いました。

### ●明石氏基調講演

「超大国の責任と限界ー21世紀の世界のガバナンス」と題する講演の中で、前国連事務次長の明石氏は、まず超大国アメリカを分析し、アメリカのバイタリティーは、さまざまな批判があっても、世界のイノベーションの中心となってきたと振り返り、ブッシュ再選以降、キリスト教原理主義の台頭が目立っているが、同時に相対主義を重んじる知的エリートの存在も無視できないと指摘しました。



21世紀かながわ円卓会議の様子

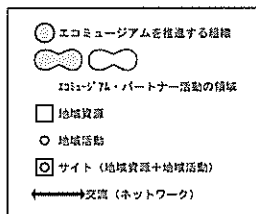
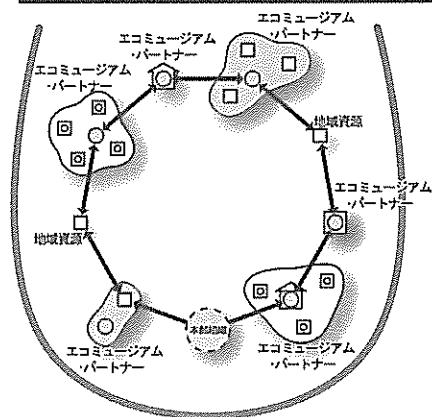


円卓を囲んで自然の討議

## 特集：三浦半島エコミュージアム研究報告

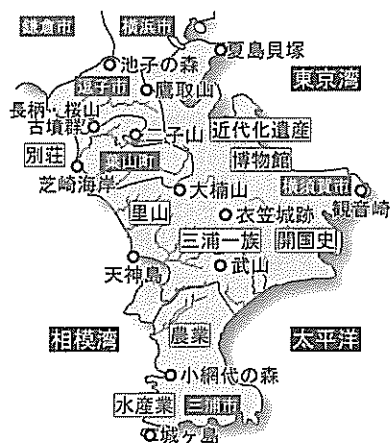
### 三浦半島のエコミュージアム構想 —半島各地のエコミュージアムをつなぐ—

#### エコミュージアムの形態と活動「エコミュージアム三浦半島ネットワーク」イメージ



#### 三浦半島地域の主な「地域資源」

※横須賀、逗子、三浦市、葉山町の3市1町域を対象に研究を行いました。



コンタクトポイント  
(事業担当：柳田)  
・Tel→046-855-1821  
・電子メール→  
eco@k-face.org

K-FACEでは、「エコミュージアム」の考え方を活用し、持続可能な地域づくり・まちづくりを進めていくことはできないか、という視点に立って、三浦半島地域をモデルとしたエコミュージアム研究を進めてきました。

今回はその中から、K-FACEの提案—半島各地のエコミュージアム構想を紹介します。

#### ●なぜ三浦半島でエコミュージアムを？

三浦半島には、緑や海といった「自然」、三浦一族や開国の「歴史」、農・漁業、伝統文化等の「生活文化」など、半島に共通の「地域資源」が数多くあります。商工業も集積する都会型の地域ですが、三方を海で囲まれ、緑も色濃く残り、農・漁業も盛んです。

こうしてみると、半島地域はバランスのとれた、多様に富む魅力的で潜在的な可能性の高い地域だということに気づきます。

そのため自然を守り、豊かな歴史と文化に根ざしたうおいある地域づくりへの取り組みや、エコミュージアム、それに類する活動も行われています。

ただ、残念なことに、これらの活動は市や町をはじめ限られた地域内でのものに留まりがちです。また、環境保全、地域の歴史の学習・継承といった同一分野の連携・交流に限られるといった傾向が見られます。

エコミュージアムのネットワーク化によって既存の取り組みを補強し、それぞれの活動が相互に連携・交流していくことができれば、半島域内の住民の取り組みはさらに活発になり、半島域内外への発信性も大いに高まります。

これにより、半島地域に暮らす住民が普段意識しにくい「三浦半島」という一つのまとまった地域に、一体感を感じ、その豊かな自然・社会環境のもつ魅力を最大限に活かし、将来に引き継いでいく地域づくりを進めていくことができるのではないのでしょうか。

#### 基本的な考え方

- ・半島各地の魅力を守り、次世代に引き継ぐ
- ・半島地域の多様性を大切にする
- ・住民・半島の各地域が中心となって推進する

#### 目標

- ・テーマ：「持続的な地域環境を担う人づくり・場づくり(仮)」

・名称：「エコミュージアム三浦半島ネットワーク(仮)」

・コレクション：「自然、歴史、産業・まちを含めた生活文化全般」

三浦半島の各地で取り込まれるエコミュージアムやそれに類する(エコミュージアム的な)活動が「エコミュージアム三浦半島ネットワーク」の基本になります。

これら半島地域各地のエコミュージアムやエコミュージアム活動を「パートナー」と位置づけ、これらのパートナーを緩やかに結び、半島全体をつなぐ「広域・ネットワーク型のエコミュージアム」として、半島のエコミュージアムの活動を支援します。

#### 構成と運営

・構成：Σ半島地域(地域資源+住民活動)の「エコミュージアム・パートナー」+「本部組織」(+中核的な施設)

((※Σ(シグマ)は数学の総和記号。ここでは集合体を意味します。))

各地の「エコミュージアム・パートナー」は、原則として各地域の力で自立的な運営を行っていきます。

「本部組織」は、エコミュージアム全体を統轄管理する組織ではなく、半島地域内の「エコミュージアム・パートナー」と同等の立場で「広域性」と「専門性」の視点から、

- ・半島内外への広報・PR
- ・「パートナー」間の交流・連携の促進
- ・情報・人材バンク

などの役割を果たすことにより、半島各地のエコミュージアム・パートナーとの交流やそれらの自立を支援し、半島全域にエコミュージアム活動を広げていきます。

## 2006（平成18）年度

### 【概況】

1992(平成4)年の財団設立以来、湘南国際村を活動拠点に、人文・社会科学分野を中心に地域と世界に共通する課題に関する研究、人材育成、学術・文化交流事業を展開してきたが、地域社会を取り巻く環境も大きく変化したこと等から、時代の要請に応えるべく市民レベルの国際交流・協力活動を支援してきた財団法人神奈川県国際交流協会(KIA)と統合することになった。

湘南国際村における事業活動の活性化や国際交流拠点づくりをめざし先進的な研究、国際的な視野を持つ人材の育成などの諸事業に取り組みつつ、KIAとの統合に向けて準備作業を行い、予定通り2007(平成19)年3月末に当財団は解散した。2007(平成19)年4月1日に、新たに統合財団法人財団法人かながわ国際交流財団(KIF)が発足。K-FACEは、統合財団の「湘南国際村学術研究センター」となり、従来の事業がそのまま引き継がれた。

### 【企画研究】

「地球環境政策の課題」研究

名称：「自治体における持続可能性政策」研究会

委員：学識経験者、自治体環境政策担当者等10名

代表者：竹内恒夫（地球環境戦略機関上席アドバイザー）

### 【出来事】

4月29日～12月24日 第四期シルクロード平山郁夫コレクション展「煌めきを求めて」

海のシルクロード沿いの東南アジアの陶磁器、インドネシアの織物、カンボジアの仏像を展示。またシルクロードの向こう側でシルクロードの影響を受けたボヘミアガラス等のヨーロッパのガラス器を展示した。

5月12日、7月10日、8月30日、10月23日、12月18日 自治体における持続可能性政策研究会

三浦市観光インフォメーションセンター、湘南国際村、葉山しおさい公園、横須賀市役所、地球環境戦略研究機関でそれぞれの日に開催。

5月～12月 鎌倉女学院「国際セミナー」(全4回)

5月24日は国際学講座Ⅰを鎌倉女学院で、青年海外協力隊OG中村愛の体験談。6月12～13日(1泊2日)は湘南国際村センターで、フィールドワーク国際セミナー。10月18日は中学生向け土曜講座、講師は磯野昌子。12月12日は国際学講座Ⅱ「国際学とは何だろうか?」、講師は野口和彦(東海大学教授)。

7月20～21日 第13回 湘南国際村リブイン・セミナー

米国大使館東京アメリカンセンターと共催。テーマは「災害対策と危機管理－国際協力と自治体を始めとする国内でのネットワーク構築に向けて」。司会は初日が、林春男(京都大学防災研究所巨大災害研究センター長)、二日目が田中聡(富士常葉大学環境防災学部助教授)。基調講演はキャサリン・アン・バーティニー(米シラキュース大学公共政策大学院教授)、報告者に足達雅英(総務省消防庁防災課防災担当)、栗原利久(三浦半島活断層調査会事務局長)、塩月博之(横須賀市消防局情報調査課員)、杉原英和(神奈川県安全防災局災害消防課員)、ジェイミー・ルバルカバ(米軍海兵隊中佐)、田中文康(陸上自衛隊第31普通科連隊員)、斎藤実(東

京都総合防災部副参事)、金田晃一(大和証券グループ CSR 室次長)。

7月31日 平山郁夫シルクロードコレクション展を記念した湘南国際村体験教室

小中学生向け「水彩で描く平山コレクション」。指導は寺田小夜子(絵画教室講師)。

8月20~22日 第4回 湘南国際村青少年国際セミナー(K-PIT)「世界の入口に立とう」

湘南国際村センターで開催。特別講演は勝俣誠(明治学院大学教授)。講師は江藤裕之(長野県立看護大学助教授)、野口和彦(東海大学助教授)、平山恵(明治学院大学助教授)。ファシリテーター木下理仁、西あい。

8月22日 「青少年国際人材育成事業」研究成果発表会

基調講演は「若者を育てるー青少年と国際」山根誠之(横浜YMCA 総主事)。パネルディスカッションのモデレータは富岡隆夫(当財団専務理事)、パネリストは勝俣誠(明治学院大学教授)、江藤裕之(長野県看護大学助教授)、佐久間健一(横浜国際女学院翠陵高校副校長)。

8月29日、10月16日、11月30日、平成19年1月31日、3月27日(全5回) 地球環境セミナー

5回連続講座を横浜ビジネスパーク、パシフィコ横浜、横浜市金沢区水再生センター、県立川崎図書館、パシフィコ横浜(実施日順)で開催。

第1回のテーマは「エコアクション21と環境経営」、講師は森下研(地球環境戦略研究機関(IGES) 持続性センター・エコアクション21事務局次長)、望月良治(エコアクション21地域事務局かながわ事務局長)、柴田昌宏(三菱東京UFJ銀行中小企業部企画グループ次長)、古市公久(産業廃棄物処理事業振興財団常務理事)。

第2回のテーマは「アジアをめぐる持続可能な森林管理」、講師は関良基(IGES 森林保全プロジェクト研究員)、中澤健一(国際環境NGO・FoE Japan 森林プログラム代表)、原田一宏(IGES 森林保全プロジェクト研究員)。

第3回のテーマは「持続可能な地域社会へ向けたビジネス」、講師はベンカタチャラム・アンブモリ(IGES 産業と持続可能社会プロジェクト主席研究員)、渋谷寿一(NPO 樹木・環境ネットワーク協会)、竹林征雄(IGES 産業と持続可能社会プロジェクト上席客員研究員)。

第4回のテーマは「経済のグローバル化と3Rイニシアティブの展開」、講師は堀田康彦(IGES 長期展望・政策統合プロジェクト研究員)、小島道一(アジア経済研究所研究員)、市川芳明(日立製作所上席コンサルタント)。

第5回のテーマは「地球温暖化防止への取り組み」浜中裕徳(IGES 上席コンサルタント)、講師はアンチャ・スリニヴァサン(IGES 気候政策プロジェクト上席研究員)、木村ひとみ(同プロジェクト研究員)、小塚一久(同プロジェクト CDM カントリーオフィサー)。

9月4~8日 第22回 国連大学グローバル・セミナー

「持続可能な平和構築と開発ー新たなグローバルアジェンダ」。基調講演はロイド・アックスワージー(加ウィニペグ大学学長兼副総長)、廣野良吉(成蹊大学名誉教授)。講師はヴァネッサ・ファー(国連軍縮研究所プロジェクト・マネージャー)、熊岡路矢(日本国際ボランティアセンター代表)、ラガヤ・ハジ・マット・ジン(マレーシア国立大学教授)、池田晶子(特定非営利活動法人21世紀協会理事長)、有馬利男(富士ゼロックス社長)、明石康(スリランカ平和構築および復旧・復興担当日本政府代表)。プログラム委員長は太田宏(青山学院大学教授)。

10月7日 湘南国際村アカデミア 第1回(全2回)

地球環境戦略研究機関(IGES)と共催。テーマは「高度経済成長下の中国環境問題」、講師は小柳秀明(IGES 北京事務所長)。

11月3～5日 第5回 湘南国際村青少年国際セミナー (K-PIT)「世界の入口に立とう」

JICA 横浜センターで開催。講師は大泉敬子 (津田塾大学教授)、江藤裕之 (長野県看護大学助教授)、高橋祐三 (東海大学助教授)。

11月3、12、19、26日 シルクロード文化交流セミナー (全4回)

講師は順に、平山美知子 (平山郁夫シルクロード美術館館長)、土屋良雄 (日本ガラス工芸学会会長)、小笠原小夜 (日本女子大学教授)、矢島律子 (町田市立博物館学芸員)。

11月10日 「ミュージアム・パワー」出版

第1回、第2回ミュージアム・サミットの記録を「ミュージアム・パワー」として慶応義塾大学出版会から出版。

12月7日 湘南国際村アカデミア 第2回 (全2回)

総合研究大学院大学と共催。テーマは「動物の骨が語る古代人の暮らし」、講師は本郷一美 (総合研究大学院大学助教授)。

12月27日 「統合基本合意書」の締結

財団法人神奈川県国際交流協会と「統合基本合意書」を締結。

12月8～10日 第4回 インカレ国際セミナー「東アジア共通の家」

基調講演は、文正仁 (ムン・ジョンイン) (大韓民国国際安全保障特命大使)、加藤千洋 (朝日新聞社編集委員兼テレビ朝日「報道ステーション」キャスター)。ほかに講師として村上正子 (国際環境 NGO・FoE Japan)。企画委員会委員長は押村高 (青山学院大学教授)。

2007 (平成19) 年

1月22日 自治体における持続可能性政策研究成果発表会

「バイオリージョン三浦半島」を目指して。成果発表と参加者の交流。

2月17日 日中文化講座

日中友好会館と共催。テーマは「徐福伝説—いまを生きる伝承—」。講師は、遠志保 (愛知県立大学講師)。

3月1日 湘南国際村アカデミア特別講演

総合研究大学院大学など主催 (当財団は協力)。テーマは「脳科学の現在と未来」、講師は乾敏郎 (京都大学大学院教授)。

3月12日 K-FACE ニュースレター face to フェイス 最終号 (第32号) 発行

3月16～17日 第2次第3回 21世紀かながわ円卓会議

第2次 統一テーマ「21世紀を構築する」、第3回「地球と地域との協働の道—社会関係資本を組み立てる」

基調講演は、大岡信 (詩人)。樺山紘一 (印刷博物館館長) をモデレータに、講演者は大原謙一郎 (大原美術館理事長)、藤原帰一 (東京大学教授)、諸富徹 (京都大学助教授)、小林重敬 (横浜国立大学教授)。討議者として五十嵐武士 (東京大学教授)、池田清彦 (早稲田大学教授)、岡部直明 (日本経済新聞社論説主幹)、金澤史男 (横浜国立大学教授)、北川フラム (アートフロントギャラリー主宰者)、工藤裕子 (中央大学教授)、陣内秀信 (法政大学教授)、鈴木佑司 (法政大学教授)、高島肇久 (外務省参与)、露木順一 (神奈川県開成町長)、坂東眞理子 (昭和女子大学副学長)、伴野文夫 (EU-Japan Fest 日本委員会委員)、平野雅章 (早稲田大学教授)、雪山行二 (横浜美術館館長)、王敏 (法政大学教授)、福原義春 (当財団理事長)。

### 3月20日 統合と財産処分の承認

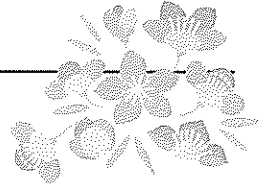
当財団評議員会、理事会で財団法人かながわ国際交流財団の解散及び財団法人神奈川県国際交流協会との統合並びに財産処分案を承認。

### 3月26～28日 第6回 湘南国際村青少年国際セミナー（K-PIT）「世界の入口に立とう」

東海大学湘南キャンパスで開催。講演「私が暮らしたブラジルー貧困コミュニティでの活動から」小貫大輔（東海大学助教授）、「国際社会は紛争にどうやって立ち向かうのかー国連の役割を考える」柘山堯司（青山学院大学教授）、「目に見えないもの考える」江藤裕之（長野県看護大学助教授）、「南アフリカ体験記」ジェフリー・カーター（東海大学助教授）、「国際問題をどう見るか」木原実郎（共同通信社国際局次長）。その他にワークショップ。

### 3月31日 財団解散

3月20日の財団評議員会、理事会の決議に則り、財団法人かながわ学術研究交流財団解散。



# Face to フェイス

春の訪れを前に、湘南国際村では21世紀の新しいビジョンを求めて熱い議論が繰り広げられました。今号では、1月に開催した「21世紀ミュージアム・サミット」と、3月開催の「21世紀かながわ円卓会議」をご紹介します。

## ハイライト:

### ■新しいビジョンを求めて①:

「21世紀ミュージアム・サミット」(P1-P2)

### ■新しいビジョンを求めて②:

「21世紀かながわ円卓会議」(P3)

### ■第4期平山郁夫コレクション展 (P4)

### ■「誌上セミナー」

「日中文化講座」(P5)

### ■湘南国際村四季～私の歳時記 (P6)

『普通の人』の視点で国際政治を考える

### ■セミナー・イベント参加者募集 (P6)

## 新しいビジョン 21世紀ミュージアム・サミット を求めて① — 21世紀、美術館は生き残れるか

1月28～29日、湘南国際村センターにおいて、日本経済新聞社との共催で、国際会議「第2回21世紀ミュージアム・サミット—21世紀、美術館は生き残れるか 第2部 かながわ円卓フォーラム『21世紀の美術館:その生き残りの戦略』」を開催しました。この会議は、2004年3月に行った「第1回21世紀ミュージアム・サミット—文化の継承と創造」の成果を踏まえ、ミュージアムの課題と展望について、更に議論を深めることを目的として行われました。

会議は、二部構成\*のサミットの第2部にあたり、国際会議場で円卓会議形式で行われました。養豊金沢21世紀美術館長・大阪市立美術館長を総監修・議長に迎え、欧米館長4名と議長の基調講演と、国内有識者14名を交えての討議とが行われ、美術館関係者など74名の傍聴者の出席がありました。

討議では、ミュージアムの基本的理念から現場の問題点まで幅広く活発に議論が交わされました。討議者の福武氏からは越後妻有アトリエンナーレの活発な試みが紹介され、総括討議では、アートとコミュニティの密接な関係や、感性を育み、文化を次世代に伝えていく場としてのミュージアムの価値と重要性が改めて認識されました。

(\*第1部は、1月27日、日経ホール(東京都・大手町)において公開シンポジウム形式で、招聘欧米館長によるパネルディスカッションが行われました。)

### 【各講演の概要】

○ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館長

のジョーンズ氏は、ミュージアムの建物は、実用的な目的以外に、誇示するための建物として、建物自体が勢力を主張するものとして存在していること、コレクションに関してミュージアムが慎重であることの重要性を述べるとともに、ミュージアムの在り方とその機能について問題提起し、各国のミュージアム建設ラッシュの中で、ミュージアムの価値を高く位置付けていくことの意義を促しました。

○パックマン氏は、ポンピドゥー・センター国立近代美術館で行った「ビッグ・バン—20世紀美術における創造と破壊」展について紹介しました。美術の既存の 카테고리を取り払い、時代系列でなく、戦争、破壊、哀愁などのテーマごとに、異なる年代の絵画、建築、デザインなどの多彩な作品を展示するというもので、氏は、美術館は新しい作品を取り上げる一方で、長く収蔵庫に眠っている作品も展示構成に生かし、オープンな視点で市民に見せていく責任があると述べました。

○ベネズラ氏は、ミュージアムがいかにか若い年齢層の人たちをひきつけられるかが重要であると、館長を務めるサンフランシスコ近代美術館におけるホームページの充実化や、ビデオの展示解説への利用など、テクノロジーを使った事例を説明しました。中でも有効な試みとして、ポッド・キャストング(iPod)などにインターネットラジオを自動録音して、収集された放送を好きなときに聴取するシステム)による同館の紹介や、アーティストインタビュー、特別展の案内などを配信していることを挙げました。

K-FACEでは、この会議の内容をまとめ、本年夏頃を目途に出版する予定です。行財政改革や指定管理者制度に揺れ、今その在り方が注目される中、創造性豊かな21世紀社会を作り上げていく鍵を握るミュージアムについて、考察を深める指針のひとつにいただければと考えています。



議長の養豊氏

○ニッティヴ氏は、ストックホルム国立近代美術館がティーンエイジャーを対象に行っている「ゾーン・モダナ」という芸術教育プログラムについて紹介しました。これは、氏のイニシアティブで始まり、学校や生活環境などの異なる高校生が約20人1チームで創作活動を行うものであり、アートを通じて参加の高校生たちに元気を与え、新たな友人関係を生み出し、興味の対象を広げる契機になるという成果を生み出しているとのことでした。

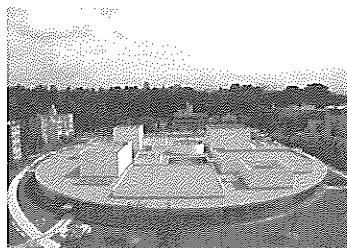
○議長の蓑氏は、オープンから1年間で予定をはるかに上回る157万人が訪れた金沢21世紀美術館の成功について、入館料不要のフリーゾーンや体験型アートの設置、オープン時の市内の小中学生無料招待、「もう一回券」の配布などの同館の具体的試みを示して講演しました。蓑氏は、美術館は建築、美術作品、陳列や解説方法、設備、スタッフ、観客、環境などの要素が交じり合い、お互いに作用する場であり、地域との連携とアートを通じての子供たちへの教育の重要性を強調しました。



美術館関係者等89名が参加

【関連ウェブサイト一覧】  
 ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館  
<http://www.vam.ac.uk>  
 ボンビドゥー・センター国立近代美術館  
<http://www.centrepompidou.fr>  
 サンフランシスコ近代美術館  
<http://www.sfmoma.org>  
 スtockホルム国立近代美術館  
<http://www.modernamuseet.se>  
 金沢21世紀美術館  
<http://www.kanazawa21.jp>  
 越後妻有アートトリエンナーレ2006  
<http://www.echigo-tsumari.jp>

【第1回 21世紀ミュージアム・サミット報告書】  
[http://www.k-face.org/layout\\_design/msummit200403.htm](http://www.k-face.org/layout_design/msummit200403.htm)



金沢21世紀美術館

コンタクトポイント  
 (担当: 江藤)

・TEL→046-855-1822  
 ・電子メール→  
[msummit@k-face.org](mailto:msummit@k-face.org)

#### 【傍聴者からの声】

「世界共通の課題を討議することにより、日本のミュージアムの現在・未来の展望が開け、日本的な固有の問題も明確になっていくように思いました。」

「内容が充実していたのは講師が現在世界で活躍している館長であるということと、日本の討議者が経験豊かな皆様であったからだと感じました。」

「視点の異なるパネリストからの提案・報告と、幅広い分野からの討議者の発言で、全体的に深い内容でした。意見が異なっても、それぞれ考えさせられる発言でした。」

#### 第2回 21世紀ミュージアム・サミット 第2部 かながわ円卓フォーラム (プログラムと講師・討議者)(敬称略)

- セッション1 「21世紀のミュージアム: 拝むところか? 宝の山か?」  
 マーク・ジョーンズ/ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館長(イギリス)
- セッション2 「収集することと見せること—ミュージアムの役割とは?」  
 アルフレッド・バックマン/ボンビドゥー・センター国立近代美術館長(フランス)
- セッション3 「現代アート、観客、そして新たな技術」  
 ニール・ベネズラ/サンフランシスコ近代美術館長(アメリカ)
- セッション4 「構築か? 再構築か?—芸術と人間形成についての考察と事例」  
 ラース・ニッティヴ/ストックホルム国立近代美術館長(スウェーデン)
- セッション5 「私の挑戦」  
 蓑 豊/金沢21世紀美術館長、大阪市立美術館長

総監修・議長: 蓑 豊

招聘海外講師: 上記セッション1~4講演者

討議者: (順不同)

- 高階 秀爾 / 大原美術館長、西洋美術振興財団理事長  
 福武 總一郎 / ベネッセコーポレーション代表取締役会長兼CEO  
 植木 浩 / ポーラ美術館長・元文化庁長官  
 岡部 あおみ / 武蔵野美術大学造形学部教授  
 酒井 忠康 / 世田谷美術館長  
 堤 清二 / セゾン文化財団理事長  
 野崎 弘 / 東京国立博物館長  
 原 俊夫 / 原美術館長  
 森 佳子 / 森美術館理事長  
 妹島 和世 / 建築家  
 西澤 潤一 / 首都大学東京学長  
 永井 多恵子 / 日本放送協会副会長  
 竹田 博志 / 日本経済新聞社編集局文化部編集委員  
 福原 藝春 / かながわ学術研究交流財団理事長・  
 東京都写真美術館長・資生堂名誉会長



新しいビジョン  
を求めて②

21世紀かながわ円卓会議

世界を走る亀裂—グローバル化に何ができるか



多彩な識者・専門家が討論

3月17日～18日の2日間、湘南国際村センター国際会議場で「21世紀かながわ円卓会議」を開催し、研究者、実務家など内外の有識者にお集まりいただきました。昨年より3年間を目途に始まった「21世紀を構築する」という共通テーマの2回目として、今年は、「世界を走る亀裂—グローバル化に何ができるか」をテーマに取り上げました。

榊山紘一印刷博物館館長（東京大学名誉教授）の司会で開幕した今回のプログラムは、基調講演と5つのセッションで構成され、世界の中で広がるさまざまな格差が、グローバル化の流れの中でどのような方向に向かっていくのか、是正することができるかが議論されました。

1日目は、ハンス・ファン・ヒンケル国連大学学長から「世界を走る亀裂—不公平に世界はどう立ち向かうか / 大学の役割 (A rift through our World : Bridging the Divide / Role of Universities)」と題して、人間の安全保障を脅かす世界の貧困の問題とその克服の可能性について具体的なデータに基づいた基調講演がありました。

次に、セッション1「世界の公正の現状」では、藤原婦一東京大学教授から、貧困の中で暮らす人々の事例をまじえながら、貧困がこれまでどう捉えられてきたか、それを語る者の意識にまで踏み込んだ問題提起があり、その後の討論では、東南アジア・アフリカの例を基に、途上国に対する援助の有効性とその限界について活発な議論がなされました。

2日目は、セッション2「環境保全が経済開発か—環境と貧困の悪循環をどう抜け出すか—」が始まり、諸富徹京都大学助教授は、グローバル化に伴う途上国での環境と貧困の悪循環について

解説し、その対策として持続可能な発展を可能とする途上国における小規模金融について説明しました。討議者からは、成功の理由としてコミュニティーの役割や信頼関係の重要性について意見が出されました。また、小規模金融の融資対象がほとんど女性だったこともあり、ジェンダーの問題にも触れた討論となりました。

セッション3「民主主義と人権」では、伊豫谷登士翁一橋大学教授が、第二次大戦後の民主主義、人権という体制の台頭がもたらした境界の消失が、移民や、地域文化の破壊という問題を生んでいることを説明しました。

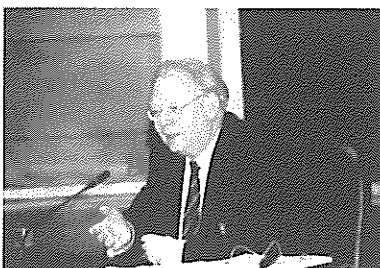
セッション4「教育・文化の断層を超えるために」は、竹中千春明治学院大学教授から、グローバル化の中でインドで起こっていること、貧困から抜け出そうとする人々の必死さ、経済成長に深く関わる政治の歴史について講演がありました。その後の討論は、中国とインドとの比較をベースに展開され、両国に対する認識を深めるものになりました。

総括セッションのセッション5「格差に向き合う思想」では、福川伸次財団法人機械産業記念事業財団会長から、それまでのセッションの内容をまとめて振り返りながら、国連の役割や、格差を是正するための方策が提言され、討議では、途上国への支援等、国・地域によって細やかな対応が必要で、容易に解決しない問題の根深さが示されました。

※6ページに、竹中先生へのインタビューを掲載しています。併せてご覧ください。

コンタクトポイント  
(担当: 江藤)

- ・TEL → 046-855-1822
- ・電子メール → forum@k-face.org



ハンス・ファン・ヒンケル国連大学学長

K-FACE ニュースレター

# Face to フェイス

〈K-FACE インタビュー〉

**樺山 紘一** 東京大学名誉教授／印刷博物館館長

国際政治も人と人のつながりで――

「子安の里」のカンザクラ

## 今号の内容

### 〈セミナー開催情報〉

- ・自治体における持続可能性政策研究成果発表&ダイアローグ  
「"バイオリージョン三浦半島"を目指して」
- ・地球環境セミナー(第4回)「経済のグローバル化と3Rイニシアティブの展開」
- ・日中文化講座「徐福伝説～いまを生きる伝承～」
- ・湘南国際村アカデミア特別講演「脳科学の現在と未来」

〈K-FACE インタビュー〉 樺山紘一 東京大学名誉教授／印刷博物館館長

〈出版情報〉『とっておきの三浦半島』～三浦半島まるごと博物館連絡会ガイドブック～

### 〈今後の予定〉

◆4/20(金)～7/1(日)◆

第5期シルクロード平山郁夫コレクション展「カシミール 織りと刺繍の世界」



## ＜セミナー開催情報＞

K-FACE では、今年度もこれまでに多様なセミナーを開催してまいりました。ここではその一部の開催報告をお伝えします。

### 地球環境

#### ■自治体における持続可能性政策研究成果発表&ダイアログ「“バイオリージョン三浦半島”を目指して」

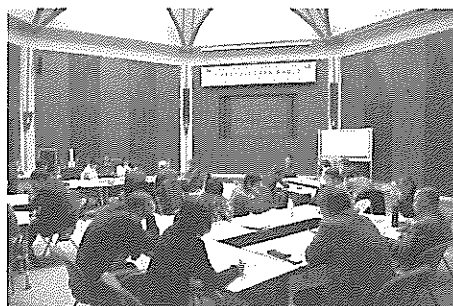
1月22日(月) 湘南国際村センター

(株)湘南国際村協会との共催で、三浦半島域で活動している市民グループ、大学生、企業、行政関係者らが30名ほど集い、ワークショップを実施しました。

冒頭に、K-FACE が事務局となって、2005年から2カ年計画で「持続可能性政策」をテーマに研究者、行政関係者とともに研究を重ねてきた成果を発表した後に、それを踏まえて参加者も含めたワークショップ形式で意見交換を行いました。

意見交換では、「棚田保全・里山整備」「海岸清掃」「三浦の食材」などのテーマごとに4グループに分かれ、参加者それぞれの活動経験などを踏まえて「行政域を越えて三浦半島全体を視野に入れた取組み」および「まちづくりや地域経済にも貢献するような環境対策」についてどのようなものが考えられるのか話し合いました。閉会後に開催した懇親会では、参加者の連携が深められ、今後の活動プランについて、より具体的な意見交換が行なわれました。

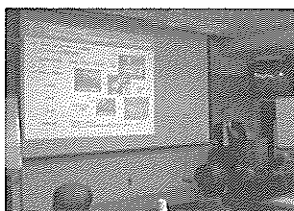
→HP チェック(当日資料を掲載) [http://www.k-face.org/work/sustainability/2006\\_report.html](http://www.k-face.org/work/sustainability/2006_report.html)



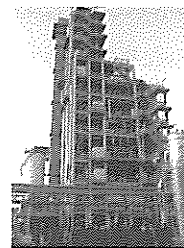
#### ■地球環境セミナー【第4回】「経済のグローバル化と3Rイニシアティブの展開」

1月31日(水) 神奈川県立川崎図書館

湘南国際村に拠点を置き活動している地球環境戦略研究機関(IGES)との共催によるセミナーです。今回は、廃棄物の発生抑制、再利用、再生利用(リデュース、リユース、リサイクル)を促進することにより、資源の有効利用を図り、持続可能な社会を目指す国際的な取組である「3Rイニシアティブ」がテーマです。



セミナーでは、3Rの最新動向や3Rとアジアの資源循環枠組みとの関係、そして製品の環境配慮設計が3R推進へ貢献する効果などについて、各界の専門家よりお話をいただきました。また、資源循環型まちづくりの実践事例として川崎エコタウンを取り上げ、担当者よりお話を伺うとともに、同エコタウン内にあるリサイクル施設(CORELEXグループ・三栄レギュレーター株式会社東京工場及び昭和電工株式会社)の見学会を実施しました。企業関係者を中心に70名近くの参加があり、最後まで熱心に耳を傾けていました。



昭和電工工学のひとコマ

→HP チェック(当日資料を掲載) [http://www.k-face.org/work/environment/environment\\_2006\\_3.html](http://www.k-face.org/work/environment/environment_2006_3.html)

## 教 養

### ■日中文化講座「徐福伝説～いまを生きる伝承～」

2月17日(土) 湘南国際村センター



日中友好会館との共催で実施している「日中文化講座」。昨年の井真成墓誌に引き続き、今回は「徐福伝説」をテーマに日本・中国の歴史ロマンに思いをはせました。

講師の達志保(つじ・しほ)氏は、徐福を初めとする渡来人の伝説についての研究者で、日本各地はもとより、中国・韓国にも足を運び、徐福に関する人や地域、風習やゆかりの品などを調査・研究しています。講演では、日本国内の徐福伝承地を巡り、土地ごとに特色のある徐福との関わりの品や、村おこし・地域アイデンティティ確立のために使われている徐福伝説を紹介しました。そして、史実であるかどうかについて検証されることが多い徐福伝説を、地域の伝承として「いまを生きている」と捉えている達氏の徐福論を展開されました。

徐福伝承地に暮らす人々の中には、親しみを込めて「徐福さん」と呼ぶ人も多いとのこと。徐福さん人気の表れか、会場に入りきれないほどの方が参加され、講師の話に身を乗り出すように聴き入っていました。また、講演終了後は、参加者思いおもいの「徐福さん」を語り合う姿も見受けられ、熱気あふれる講座となりました。



徐福伝承地に暮らす人々の中には、親しみを込めて「徐福さん」と呼ぶ人も多いとのこと。徐福さん人気の表れか、会場に入りきれないほどの方が参加され、講師の話に身を乗り出すように聴き入っていました。また、講演終了後は、参加者思いおもいの「徐福さん」を語り合う姿も見受けられ、熱気あふれる講座となりました。

→HP チェック <http://www.k-face.org/work/jpn-chn/index.html>

→講師を務めていただいた達氏の著作:『徐福論—いまを生きる伝説—』(新典社、2004年)

### ■湘南国際村アカデミア特別講演「脳科学の現在と未来」

3月1日(木) 湘南国際村センター



K-FACE では、湘南国際村内の研究・教育機関と協力して、地元の方々を始め県民の皆さんを対象とした「湘南国際村アカデミア」を実施していますが、3月1日は京都大学大学院の乾敏郎(いぬいとしお)教授をお迎えし、「脳科学の現在と未来」と題した講演会を開催しました。

人間の脳は前頭葉、頭頂葉、後頭葉、側頭葉に別れ、それぞれ役割が異なり、同時に活動していることや、体の痛みと心の痛みを感じる部分は脳内でとても近接していること。また、我々が見ている映像は、目を感じた光を電気信号にして脳内に送り解釈しているので、同じものを見ても、一人一人の見たものは厳密にはみな異なるということなど、とても興味深いお話が続きました。

さらに、脳の一部にダメージがあると、もう一人の自分が見えたり、自分の後ろ姿が見えたりすること(自己幻視現象)があるなど、脳科学の最先端情報に触れたセミナーとなりました。



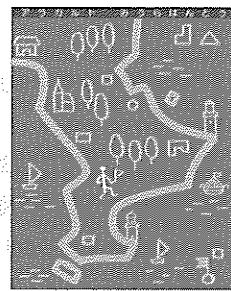
→HP チェック(京都大学大学院 情報学研究科知能情報学専攻 認知情報論分野) <http://www.cog.ist.i.kyoto-u.ac.jp/>

## ＜出版情報＞ 『とっておきの三浦半島』 ～三浦半島まるごと博物館連絡会ガイドブック～ (A5判/90ページ)

K-FACE も参加している「三浦半島まるごと博物館連絡会」は、自然・歴史・生活文化を学び、保全・活用し、継承する活動に取り組んでいる団体のネットワークです。今回、会員団体が協力し、ガイドブック「とっておきの三浦半島」が制作されました。このガイドブックは、単なる観光案内ではなく、それぞれの団体の“とっておき”のコースや情報を紹介することで、私たちが住む三浦半島がいかに恵まれた地域であり、その環境を守り育てていくことがいかに大切であるかというこや、それぞれの団体の活動を知ってもらうことを目的としています。

このガイドブック一冊で、さまざまな角度から地域の魅力を語ることができますし、三浦半島の特徴が伝わってきます。ぜひお手元に一冊いかがでしょうか。

### とっておきの三浦半島



三浦半島まるごと博物館連絡会

#### 【配布方法】

神奈川県横須賀三浦地域県政総合センター(県合同庁舎)1階 県政情報コーナー(無料)で配布するほか、240円切手を貼った返信用封筒(角3以上)を同封して、次の問い合わせ先へ郵送でも申し込みできます。

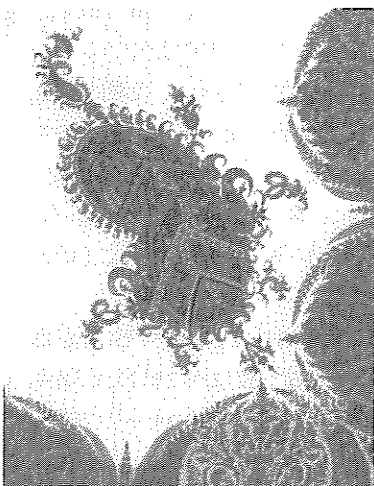
#### 【問い合わせ先】 神奈川県横須賀三浦地域県政総合センター 企画県民部企画調整課

〒238-0006 横須賀市目の出町 2-9-19

【TEL】 046-823-0278(直通) 【Eメール】 yokosukaac.0022.kikaku@pref.kanagawa.jp

→HP チェック(三浦半島まるごと博物館連絡会) <http://www.ecomuseum-miurahanto.jp/>

## ＜今後の予定＞



### ◆第5期シルクロード平山都夫コレクション展「カシミア 織りと刺繍の世界」

カシミアのショールを中心に、カシミヤ山羊の毛でさまざまなカシミヤ花文を織り出したカシミア原産の織物約75点を展示し、その代表的なモチーフであるペイズリー柄に焦点をあて、丹念な手作業で埋め尽くされた織りと刺繍による染色芸術の世界を紹介します。(写真左は肩掛けの一部)

会期/4月20日(金)～7月1日(日)まで ※月曜休館

10時～17時(入場は16時30分まで)

場所/湘南国際村センター(葉山町)

観覧料/300円(高校生以下無料)

問合せ/(財)かながわ国際交流財団(4月1日より新名称)

☎046(855)1823

#### ■組織統合のお知らせ

(財)かながわ学術研究交流財団(K-FACE)は、2007年4月1日に(財)神奈川県国際交流協会(KIA)と統合し、「財団法人かながわ国際交流財団」(仮称)となる予定です。なお、これまで K-FACE が取り組んできました主な事業は、引き続き湘南国際村を舞台に実施してまいります。今後とも、ご協力賜りますようお願いいたします。

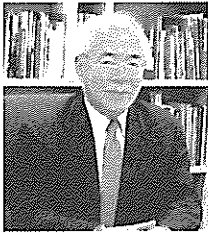
K-FACE ニュースレター “Face to フェイス” 第32号 <http://k-face.org/>

発行/2007年3月12日 財団法人かながわ学術研究交流財団(K-FACE)

〒240-0198 神奈川県三浦郡葉山町上山口 1560-39 湘南国際村センター内

【TEL】 046-855-1820(～1822) 【FAX】 046-858-1210 【Eメール】 info@k-face.org





## 国際政治も人と人のつながりで ——

### ■K-FACEインタビュー■

K-FACEは数々の事業を行っていますが、「21世紀かながわ円卓会議」はその中でもフラッグシップイベントです。今回は、円卓会議のモデレーターをさせていただいている榊山紘一先生のインタビューをお届けいたします。

2000年から始まった「21世紀かながわ円卓会議」ですが、いよいよ第2次シリーズの最終回になります。榊山先生とK-FACEのつながりは長いものですが、そのきっかけは何だったのでしょうか。

K-FACEのある湘南国際村は、都内から1時間。美しい自然を満喫できる研修施設として、近すぎず遠すぎずの丁度いい距離にあります。ですから、円卓会議の前から、湘南国際村にはセミナーなどでときどき伺ったり、施設を使わせていただいたり、個人的にもなじみのある場所でした。K-FACEの理事長(1996～1999年)をされていた長洲一二・元神奈川県知事(故人)に、そこで何回かお会いしたことが、K-FACEとのつながりが深くなるきっかけだったと思います。

公益法人を取り巻く環境は現在大きく変化しています。今後、K-FACEに期待する役割は何でしょう。

長洲さんは、県・地域に関する本格的な研究に最も早い段階から取り組まれた方で、1980年代初期から「地域の時代、地方の時代」を提唱しておられました。K-FACEは、その長洲さんの構想が十分に引き継がれている財団だと思います。社会を考える上で地域が基本にあるという考え方はいまでは一般的になりましたが、長洲さんの時代にはまだ広く世の中には受け入れられていませんでした。それを実体化するために、シンクタンク機能と研修その他の施設が一体となった湘南国際村を設立したのです。そうした考え方に対しては、私も非常に共鳴しておりました。

K-FACEが設立されてから15年も経っているとのことですが、その間に社会経済的な側面ももちろんのこと、ものの考え方といった面においても世の中は大きく変化しました。高度なグローバル化が進行する一方、地域の足腰を強めることによって、日本のみならず、世界をどう見て、どう変えていけるのかといった新しい問題に直面しています。ですから、K-FACEも制度、組織、コンテンツなど、根本的なところから再検討するよい時期にさしかかっているのかもしれない。

地方が強くなるための足腰の強化とは具体的にどのようなことなのでしょうか。

足腰という場合、財政的な意味合いで言われることが

多いですね。いま地方財政はどこも逼迫しています。地方分権改革推進会議の答申などを見ても、総論においては合意を見るものの、地方自治体の厳しい財政をどのように分担するべきか、その実現に向けた各論については合意が得られていません。この数年間で市町村合併により、地方自治体数は激減しました。しかし、それで問題が解決するわけではなく、依然としてどのように地方自治を実現するかという課題が残っています。

そこで、地方のガバナンスを担う主体として、市民の役割が注目されています。

市民は個別の市民であるばかりでなく、NPO団体などになることによって、集合的な市民にもなり得るのです。地方自治への参加形態も、個別の市民が一票を投じる選挙行動だけにとどまらず、団体で地方自治体をサポートできるような仕組みが重要となってきました。

私がいま携わっている印刷博物館は文京区にあります。そこでは博物館、美術館庭園を含む文化施設27団体がゆるやかな連合体を作り、住民とのつながりをどのように作っていくかについての取り組みを開始しました。つまり、お客さんである住民に対して、どのようにコンテンツを伝えるか、個別の団体だけではなく、協働で考えていこうという趣旨です。そうでもしないと一つの館や施設だけでは解決するのが難しい問題がたくさんあります。NPOを設立するのも大事ですが、このようにインフォーマルな協働を草の根レベルで展開することの成果は想像以上のものでした。

草の根レベルで連携と連帯がうまく機能するには「競争」が必要です。一見矛盾することのように思われるかもしれませんが、資金面だけでなく、よりよいサービスやコンテンツを目指し、お互い切磋琢磨する環境があればこそ、意識が向上し、協働の質が高まることもわかりました。こうした競争を前提にした連携が地域社会の中で当たり前になれば、地方の力は強まるでしょう。また、自治体間に競争が生まれることによって、日本の自治体全体のレベルが底上げされることも期待できます。

地方自治体の足腰の強化に文化施設が有効に機能するという点で、大変示唆に富む事例をご紹介頂きました。K-FACEのようなシンクタンクにも、地方自治体の強化を支える存在になる可能性があるのでしょうか。

#### ※編者注

かながわ円卓会議: K-FACE主催による、社会構造や政治経済システムの変容、価値の崩壊など国際社会の話題に着目し、研究者、有識者が一堂に会して議論を展開する円卓会議。2000年度～2002年度の3ヶ年における「グローバル化」の議論を経て、2004年度より「21世紀を構築する」をテーマに国内外の諸課題に取り組む。次回は、2007年3月16日から17日にかけて「地球と地域の協働の道—社会関係資本を組み立てる」というテーマで開催。

一つ例を申し上げます。人は本を借りたり、物を調べに図書館や資料館にやって来ますが、現在そうした機能としてアーカイヴズという概念が注目されています。図書館は本だけを並べたところです。しかし、いま情報は書物だけに蓄積されるわけではなく、紙一枚、録音もの、ファイルに残されたままのものなどさまざまです。アーカイヴズは、そうした知的資源を書物と同じように利用できるようにする場所のことで、アーカイヴズ機能を充実し、成熟させることで、知的資源を一層有効に収集、管理、利用することができるようになるはず。しかし、重要な点は何かという、そこには知的資源だけでなく、それを扱う人がいることです。図書館であれば、さしずめ図書館のスタッフでしょうか。人は知的資源を求めてそうした場所を訪れるわけですが、そこで思いがけず人と人の交流が生まれます。こうした交流があればこそ、「場所」の重要性が一層高まるのです。

K-FACE は湘南国際村で会議やシンポジウムを開催することにより、知的資源を蓄積しています。それは集積され、交換されながら活用されるのですが、その知的資源とそれを扱う人がいるということは、個別の研究者や市民や団体にとっての資源である以上に、今後の社会全体においての富になるはず。最近、ホームページの充実によって、さまざまな情報をネットから取り出すことができるにもかかわらず、シンポジウムは以前にもまして盛況です。あらゆる情報がネットから取り出せる時代にシンポジウムに足を運ぶ意義とは何でしょうか。

インターネットやメディアに掲載される情報は、一次情報を加工したものです。こうしたパブリックになった情報にもはや稀少価値はありません。むしろ、クローズドな中から生まれた情報を発信することに意義があるのです。

インターネットやメディアに掲載される情報は、一次情報を加工したものです。こうしたパブリックになった情報にもはや稀少価値はありません。むしろ、クローズドな中から生まれた情報を発信することに意義があるのです。

円卓会議の講師や討議者は互いによく知っている人ですが、それでも円卓会議に集まって下さるのは、まだパブリックになっていない、その人の中にある情報に触れたいがためです。知識と、それを持った人が集まり、交流が生まれるとき、そこには新たな価値が生まれるのです。他方、それを聞きに人が集うのは、話し手がなぜそれを語るのか、その根っこにあるものに触れようという思いがあるからです。

今回の円卓会議では「社会関係資本」をクローズアップしています。先生のお考えになる社会関係資本とは何でしょう。

従来、日本ではソーシャル・キャピタル(social capital)は、カネ、モノ(施設)などがイメージされてきました。勿論こうした資本も社会をつなぐものとして重要ではありますが、現在人と人とのつながりが作り上げていく総体が、再び注目

#### 【プロフィール】 榊山 紘一 (かばやま こういち)

東京大学名誉教授、印刷博物館館長。専門は西洋中世史、西洋文化史。東京大学大学院修士課程修了後、京都大学助手、東京大学助教授、同大学教授、国立西洋美術館館長などを歴任し、2005年10月より現職。

されています。それは自治体、会社などが持っている社会的なパワーを大事にしようということでもありますが、それ以上に多様な形で人間関係が作り出す資本を指しています。つまり、コミュニティとか同業団体とかグラスルーツに出来上がってきた多様な人間関係が実際に社会を動かしている、さらに広く言えば、国際関係の中でも実際的に出来上がっている人間的な関係が極めて重要な役割を果たしていることはよく話題になります。

例えば、世界経済フォーラム(ダボス会議)<sup>※</sup>はお祭りのようなものですが、そこで出来上がった国際的な人間関係がやがて国際政治を動かしていく上でも大きなパワーになっています。円卓会議は、20数名の有識者が集い、議論を行いますので、そこから、どんな視点や具体的な事例が飛び出してくるのか、楽しみです。

#### ■関連書籍&ホームページ

——「もっと知りたい、勉強したい」という方に

- ・榊山紘一著(最近の著作から)
- 『<…イズム>で読みとく美術』(新樹社、2006年)
- 『東京の美術館・博物館選りすぐり200を歩く』(中経出版、2006年)
- 『地中海一人と町の肖像』(岩波書店、2006年)
- 『解はひとつではない グローバリゼーションを超えて』(慶應義塾大学出版会、2004年)
- 『20世紀の定義8 マイナーの声』(岩波書店、2002年)
- 『20世紀の定義6 ゲームの世界』(岩波書店、2002年)

・印刷博物館ホームページ

<http://www.printing-museum.org/>

・国立西洋美術館ホームページ

<http://www.nmwa.go.jp/index-j.html>

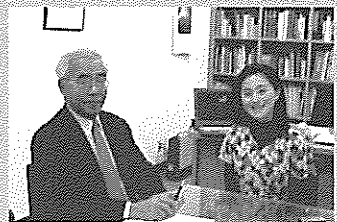


#### 〈インタビューを終えて〉

榊山先生は、上海の虹口(ホンキョウ)育ち。虹口は各国の共同租界の外にありましたが、特に日本人が多く住んでいた場所でもあります。戦争中の2年半、以前魯迅や内山完造など多くの文化人や革命家が住んでいた、里弄(リーロン)と呼ばれる高級住宅地の並びにお住まいだったそうです。

「まだ幼かったころでそれほど記憶には残っていないが、上海で育ったという意識は強く持ってきた。日本への帰国後も、幼いころの家庭の定番料理は麻婆豆腐で、いまでも中華料理は大好きと話す先生ですが、中国に関する知識は、多くの著作でも分かるとおり専門家顔負けです。上の写真は昨年、中国へ訪問されたときのものです。

(インタビュー・K-FACE原嶋千穂)



ダボス会議：世界経済フォーラム(World Economic Forum,略称 WEF)が毎年1月下旬にスイスの観光地ダボスで開催する年次総会の通称。1971年の創設時から毎年開催されており、企業のトップ、政治家、学者、ジャーナリストなどの招待客3000人以上が参加する。

## 2007（平成19）年度

### 4月1日 統合財団発足

「財団法人神奈川県国際交流協会」(KIA)と統合し、新たに「財団法人かながわ国際交流財団」(KIF)が発足。「財団法人かながわ学術研究交流財団」(K-FACE)の事業は、統合財団の「湘南国際村学術研究センター」にそのまま引き継がれた。

新財団 KIF は、K-FACE の資産については湘南国際村学術研究交流基金を設けて引き継ぎ、設立趣旨を継承した事業を実施するために湘南国際村学術研究交流基金事業企画会議を設置した。



## 5 . 湘南国際村に入村する諸機関



# 財団法人かながわ国際交流財団 湘南国際村学術研究センター(旧 K-FACE)

<http://www.k-i-a.or.jp/index.html>

財団法人かながわ国際交流財団は、財団法人神奈川県国際交流協会(KIA)と財団法人かながわ学術研究交流財団(K-FACE)が、2007年4月に統合して発足しました。

## 湘南国際村学術研究センター <http://www.k-i-a.or.jp/shonan/index.html>

かながわ国際交流財団の湘南国際村学術研究センターでは、国際会議場を備えた宿泊型の研修施設である湘南国際村センター内に拠点を構え、同センターを中心に、学術・文化交流や人材育成などの事業を実施しています。

### 【学術・文化交流の促進】

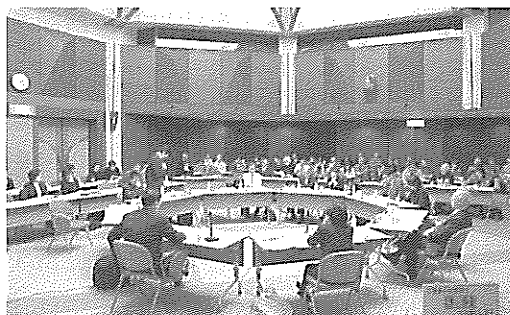
#### ・ミュージアム・サミット

文化のシンボルとして美術館・博物館に着目し、ミュージアムさらには文化の役割について議論を深め、文化の継承と創造の方向を探るために、国内外から美術館館長等関係者を招きシンポジウムを開催します。



#### ・21世紀かながわ円卓会議

21世紀における社会の平和と繁栄のために、国家に止まらず、個人、市民、地域等のあらゆる主体が、グローバル化の潮流の中で、今後どのように取り組むべきかの方向性を討議します。



#### ・湘南国際村フォーラム

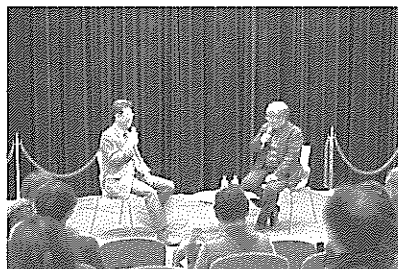
「持続可能な社会」をテーマにして、湘南国際村にある研究機関の知的資源を最大限活用することで、自然・人文・社会科学の枠を超えた学際的な討議を行うとともに研究者の交流を促進します。

#### ・三浦半島エコミュージアムの交流推進

財団がとりまとめた「三浦半島エコミュージアム構想」に基づき、県横須賀三浦地域県政総合センターとの共同事業により、三浦半島のエコミュージアム活動団体のネットワーク形成を促進します。

#### ・日中文化講座

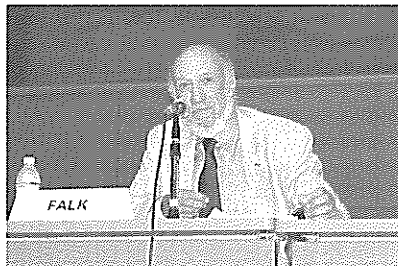
中国の文化、教育、政治、経済、社会など幅広い分野の講演を通じて、日本と中国の現状と将来を考えながら、中国文化への理解と参加者の知識向上に貢献するセミナーを開催します。



### 【国際性豊かな人材の育成】

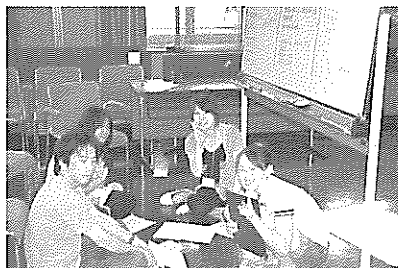
#### ・国連大学グローバルセミナー

国連大学とともに、国際問題の研究と教育に関心を持つ大学との協力により、世界情勢に即したテーマに関する日英2カ国語を使用する4泊5日のセミナーを開催します。将来、国際機関、国際NGOなど国内外で活躍できる人材を育成します。



#### ・湘南国際村インカレ国際セミナー

首都圏の大学と連携し、学部1、2年生を主な対象として「東アジア共同体」に関するテーマについて、学際的、多角的な視点から議論を進める2泊3日のセミナーです。

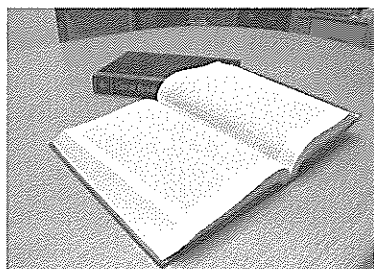


#### ・湘南国際村青少年国際セミナー (K-PIT)

県内の高校生世代を対象に、参加型学習の手法などを取り入れ、世界の現状を知り、国際社会で生きる力を備えた人材を育成するためのセミナーです。

#### ・湘南国際村高校国際教育支援 (派遣授業)

高校生が地域と世界へ興味・関心を持つよう、財団が培ってきた国際教育のノウハウおよび講師のネットワークを活用し、講師を派遣し県内高校の国際教育を支援します。



#### ・若手社会人リーダー養成セミナー

現代社会が直面する諸問題に対し、若手社会人らが人間性の原点を振り返りつつ、あるべき社会像を思索し、語り合う場を提供することで、いつの時代にも通じる哲学、倫理などを身につけ「真の国際人」として広く社会に貢献する人材を養成します。

## 〈創設の趣旨・目的〉

近年、従来の学問分野の枠を超えた独創的、国際的な学術研究の推進や、科学の新しい流れを創造する先導的学問分野の開拓の重要性が強く要請されております。

本学は、このような要請に対応する研究者を養成するため、学問諸分野で先端的な研究を行い、国内外の研究者の共同研究の推進に中心的な役割を果たしている〈大学共同利用機関〉<sup>※</sup>の最先端に行く高度で優れた研究環境を活用した、我が国最初の大学院大学として創設されました。本学は、学術研究の新しい流れに先導的に対応できる、幅広い視野を持った国際的で独創性豊かな研究者を養成し

ます。また、従来の学問分野の枠を超えた独創的、国際的な学術研究の推進並びに先導的学問分野を開拓します。



※大学共同利用機関とは、国内外の大学研究者が共同で利用でき、各種の高度で大型の研究施設・実験設備又は貴重な学術資料などを保有する、日本が世界に誇れるトップレベルの研究機関であり、全国に18機関が設置されています。

例えばテレビのニュースや新聞で、ハワイで活躍中の世界最大規模の大型望遠鏡「すばる」や南極に向かう観測船「しらせ」などのことを耳にしたことがありませんか。「すばる」は総研大を構成している国立天文台が建設したものですし、「南極観測」は同じく国立極地研究所が行っています。

## 葉山高等研究センター <http://center.soken.ac.jp/>

総合研究大学院大学（総研大）の先導科学研究科が、総研大の教育組織として位置づけられているのに対し、当センターは、葉山本部の教員15名の研究組織として機能することが第1の目的です。と同時に、基盤機関あるいはそれ以外の大学や研究所の研究者との共同研究の機会を提供することも重要な役割と考えています。通常の科研費等にはなじまない先進的な研究課題や基盤機関においてできにくい研究課題を選んで推進することにしています。また、教育組



織である先導科学研究科の教育内容に積極的にに関わり、研究と教育の統合を図ることも重要な目的です。

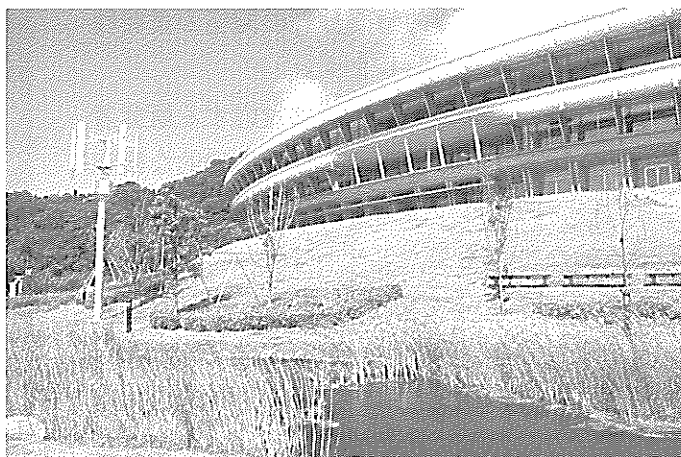
## 〈IGESが目指すもの ～アジア太平洋地域発の地球環境戦略～〉

### 【背景と使命】

IGESは、アジア太平洋地域における持続可能な開発の実現を目指し、実践的な政策研究を行う国際的研究機関として、1998年に日本政府のイニシアティブによって設立されました。

アジア太平洋地域では、急速な経済発展とともに人口増加や都市化が進行し、天然資源の深刻な枯渇や自然環境への負荷が深刻化する一方で、依然として貧困の軽減が大きな課題となっています。また、温暖化問題など地球規模の環境問題を解決する上で、アジア太平洋は重要な役割を担うものとして注目されています。

IGESの使命は、こうした様々な課題に対峙しながら、アジア太平洋地域において持続可能な開発を実現するための戦略を立て、実効性ある政策を提言することです。同地域は経済や政治、文化、自然環境の面で多様性に富んでおり、各地域の状況を適切に踏まえて政策提言を行うことが極めて重要です。

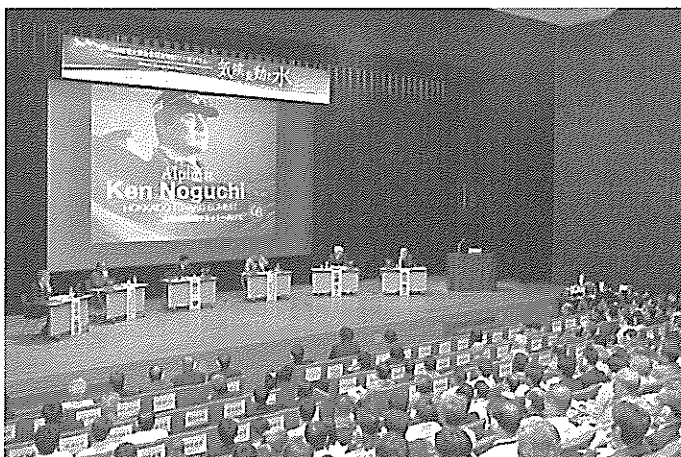


### 【研究活動】

IGESは、国際機関、各国政府、地方自治体、NGO、企業などの多様な意思決定者と積極的に関わりながら研究活動を行っています。アジア太平洋地域をはじめとする世界各国から研究者が参加し、それぞれのバックグラウンドを生かして、多様なアジアを反映する政策研究に努めています。

現在、「気候政策」、「バイオ燃料」、「森林保全」、「淡水」、「廃棄物・資源」、「ビジネスと環境」、「能力開発と教育」の7つの研究プロジェクトを実施するとともに、さまざまな国際機関と連携して分野横断的な研究にも取り組んでいます。

また、気候変動に関する政府間パネル (IPCC) 国別温室効果ガスインベントリープログラム (NGGIP) の技術支援ユニット (TSU) やアジア太平洋地球変動ネットワーク (APN) 事務局ならびに国際生態学センター (IISE) も IGES の活動の一角を担っています。



# 株式会社 湘南国際村協会

<http://www.shonan-village.co.jp/company.html>

湘南国際村の中核施設、緑陰滞在型宿泊施設「湘南国際村センター」の運営を通じて、地域社会の発展に寄与しています。

設立 1989(平成元)年10月 資本金25億円

- 公的セクター 58% 神奈川県、横須賀市、葉山町、日本政策投資銀行
- 民間セクター 42% 37企業・団体

## 事業内容

1. 施設の管理  
「湘南国際村センター」(ホテル、会議室、レストラン)の管理・運営
2. 各種企画事業  
研修事業、会議・イベント企画事業、情報サービス事業、調査研究事業など
3. 旅行業法に基づく旅行業

---

# K-face 15年のあゆみ

～かながわ学術研究交流財団の軌跡～

2008年9月30日発行

企画・編集 財団法人かながわ国際交流財団 湘南国際村学術研究センター

<http://www.k-i-a.or.jp/shonan/>

〒240-0198 神奈川県三浦郡葉山町上山口1560-39 湘南国際村センター内

電話 046-855-1820 ファックス 046-858-1210 メール shonan@k-i-a.or.jp





